

博士論文
(学術)

「虚辞」の it を含む構文の意味論的・語用論的研究*

佐藤翔馬**

名古屋大学大学院
国際開発研究科

審査委員会
大名力（委員長）
木下徹
大島義和
大室剛志（人文学研究科）

研究科教授会合格決定
2020 年 9 月 11 日

* Semantic and Pragmatic Studies on “Expletive” *It* Constructions

** SATO Shoma

目次

第 1 章 序論	1
1.1 本研究の趣旨	1
1.2 本研究の構成	1
第 2 章 <i>it</i> 分裂文	9
2.1 はじめに	9
2.2 Prince (1978) による <i>it</i> 分裂文の 2 分類	10
2.2.1 stressed focus <i>it</i> -cleft	11
2.2.2 informative-presupposition <i>it</i> -cleft	13
2.2.3 前提要素の性質	14
2.2.4 縮約 <i>it</i> 分裂文	15
2.3 総記的含意	18
2.3.1 論理的含意	18
2.3.2 会話の含意と言語規約的含意	20
2.4 おわりに	22
第 3 章 <i>it</i> 分裂文と <i>it is that</i> 節構文	24
3.1 はじめに	24
3.2 <i>it is that</i> 節構文と区別すべき例	25
3.2.1 <i>thus</i> や <i>so</i> を伴う例	25
3.2.2 副詞 <i>just</i> を伴う例	27
3.2.3 法助動詞を伴う例	29
3.2.4 「 <i>it</i> が明確な指示対象を持つ」とされる例	30
3.3 提案	32
3.3.1 Bolinger (1977) による <i>it</i> 分裂文の分析	32
3.3.2 <i>it is that</i> 節構文と <i>it</i> 分裂文の類似点	35
3.3.3 <i>it is that</i> 節構文と <i>it</i> 分裂文の相違点	37
3.3.4 <i>it is that</i> 節構文の分析	39
3.3.5 大竹 (2009) と本研究の分析の比較	42
3.4 さらに考察	44
3.5 おわりに	47
第 4 章 <i>it is that</i> 節構文と「の (だ)」	48
4.1 はじめに	48
4.2 大竹 (2009) による <i>it is that</i> 節構文と「の (だ)」の分析	48
4.3 提案	52
4.3.1 <i>it is that</i> 節構文は指定文である	52

4.3.2 「...のではない」は命題の真実性を否定する	55
4.3.3 It is not that ... と「...のではない」の比較	56
4.4 さらに考察	57
4.5 八木 (2019) による主張の問題点	61
4.6 おわりに	63
第 5 章 文主語構文と主語位置からの it 外置	64
5.1 はじめに	64
5.2 本研究で取り扱わない例	65
5.2 既定性 (中右 (1983))	66
5.2.1 既定性の概念	66
5.2.2 既定性に基づく分析	69
5.2.2.1 文主語構文が許されない場合	69
5.2.2.2 文主語構文と it 外置文のどちらも可能である場合	70
5.3 文主語構文の特異性	71
5.3.1 文末重心の原理	71
5.3.2 談話における結束性	75
5.4 さらに考察	78
5.5 主語位置からの it 外置における it	81
5.6 It AUX be that	83
5.6.1 It AUX be that ... と it is that 節構文の相違点	84
5.6.2 It AUX be that ... と主語位置からの it 外置の類似点	86
5.6.3 It AUX be that ... に現れる助動詞	89
5.7 おわりに	91
第 6 章 目的語位置からの it 外置 1 : it が随意的な場合	92
6.1 はじめに	92
6.2 既定的 it	92
6.3 目的語位置からの it 外置を許す動詞と許さない動詞	97
6.3.1 2 種類の stance 動詞と n-stance 動詞	99
6.3.2 v-stance 動詞と r-stance 動詞	100
6.3.3 Hegarty (1992) による観察	102
6.4 Cattell (1978) による動詞の 3 分類と既定性	105
6.5 さらに考察	108
6.5.1 v-stance 動詞と目的語位置からの it 外置	108
6.5.1.1 believe	108
6.5.1.2 expect	111
6.5.1.3 imagine	111

6.5.1.4 think.....	112
6.5.2 r-stance 動詞／n-stance 動詞と既定的 it.....	115
6.5.2.1 accept.....	116
6.5.2.2 resent	117
6.5.2.3 admit.....	118
6.5.2.4 realize	119
6.5.2.5 know	119
6.5.2.6 understand.....	122
6.6. おわりに	125
第 7 章 目的語位置からの it 外置 2 : it が義務的な場合	126
7.1 はじめに	126
7.2 take it that	127
7.2.1 他の実詞に相当する it	128
7.2.2 大竹 (2009) による分析	130
7.2.3 確認の機能と既定的 it	131
7.3 have it that	133
7.3.1 河野 (2016) による分析	134
7.3.2 have it that ... と have (it) in mind that	136
7.3.3 have it that ... と既定的 it	138
7.4 like/dislike it that ... など	141
7.4.1 複合他動詞と it	143
7.4.2 複合他動詞と like/dislike it that ... など	147
7.4.3 文主語構文と複合他動詞	148
7.5 おわりに	152
第 8 章 It says LOC 構文	153
8.1 はじめに	153
8.2 場所句に現れる名詞句の特徴	154
8.3 It says LOC 構文と letter	158
8.4 it と場所句の語順	161
8.5 おわりに	162
第 9 章 結論	164
添付資料 : 本研究で取り扱っている構文とその分類	166
参考文献	168
謝辞	173

第 1 章 序論

1.1 本研究の趣旨

本研究は、いわゆる「虚辞」の *it* を含む構文を取り扱う。統語論においては、「虚辞」の *it* は *expletive*, *dummy*, *pleonastic*, *epenthetic* などと呼ばれ、指示対象を持たない要素として扱われてきた。

本研究の目的は、次の (1) に示す Bolinger (1977) の考え方に基づいて、「虚辞」の *it* を含む構文を意味論的・語用論的に分析することである。(1) を見てみよう。

- (1) What I intend to show is that sentences with *it* differ in meaning from sentences without *it*, and that the difference can be assigned to *it* as a member of the set that includes *he*, *she*, and *they*. (Bolinger 1977: 66)

すなわち、Bolinger (1977) は、「虚辞」の *it* を含む文と含まない文には意味の違いがあり、その違いは「虚辞」の *it* が *he*, *she*, *they* といった前方照応の代名詞の一員であることに起因すると述べている。Bolinger (1977) の考え方を端的に理解するために、次の (2) を見てみよう。

- (2) a. ?I believed it that the election hurt them.
b. Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)

Bolinger (1977) によれば、(2a) のように、I believed の目的語に *it* を置き、that 節を外置した文は容認性が低い。一方、(2b) のように、Not for a moment did I believe であれば問題がない。(1) に示した Bolinger (1977) の考え方に従えば、(2a) の容認性が低いのは、*it* が前方照応の指示詞の一員であるにも関わらず、その前方照応性に適さない環境で用いられているためである。

本研究は、「虚辞」の *it* を前方照応の代名詞の一員であるとする Bolinger (1977) の考え方を踏襲し、「虚辞」の *it* を含む構文を意味論的・語用論的に分析する。

1.2 本研究の構成

第 2 章では、次の (3) に示す *it* 分裂文を取り扱っている先行研究を概観する。

- (3) a. I bought a red sweater.

- b. It was a red sweater that I bought. (Birner and Ward 2006)

(3b) の it 分裂文は、(3a) から名詞句 a red sweater を抜き出し、焦点化している。第 2 章で it 分裂文について概観する理由は、第 3 章にて it is that 節構文を it 分裂文の変種として取り扱うにあたり、it 分裂文が持つ特性を確認するためである。具体的には、主に Prince (1978) と Declerck (1988) に基づき、次の (4) を確認する。

- (4) a. it 分裂文は、前提となる要素の存在を必要とする。ただし、その前提となる要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はない。

(Prince (1978) 参照)

- b. it 分裂文は総記的含意 (exhaustiveness implicature) を持つ。ただし、その総記的含意は論理的含意 (entailment) ではないが、会話の含意 (conversational implicature) と言語規約的含意 (conventional implicature) の両方の性質を持っている。

(Declerck (1988) 参照)

第 3 章では、次の (5) に示す it is that 節構文を取り扱う。

- (5) I've been sitting here all evening and none of those youngsters has invited me to dance. — I suppose they only invite girls they already know. — No, it's not that. It's that I'm not pretty enough. (Declerck 1992: 209)

次の (6) に示すように、Bolinger (1972) は、it is that 節構文が why を含む疑問文に対する応答となり得ることを示し、補文標識 that が because の代わりとして働くため、it is because ... への言い換えが可能であると述べている。

- (6) Why didn't he take the plunge? Was it that (=because) he didn't have the money (that he didn't take the plunge)? (Bolinger 1972: 35)

このことを踏まえると、it is that 節構文には理由を提示する機能があると考えられる。第 3 章では、上記の Bolinger (1972) と、Bolinger (1977) による it 分裂文の分析に基づき、理由を提示する it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なし分析を試みる。it 分裂文の変種とは、すなわち、it is that 節構文には it 分裂文との類似点もあれば相違点もあるということである。具体的には、次の (7)

に示すことを主張する。

- (7) a. it 分裂文と同様に、it is that 節構文は前提として開放命題を必要とする。主語 it はその前提を指示し、その前提に含まれる変項を指定する値を焦点要素として取り立てることで、理由を提示する。
- b. it 分裂文とは異なり、it is that 節構文の it が指示する前提は、聞き手の意識にのぼっていると話し手が判断している事柄、すなわち given information (Prince 1978) に相当する。

第4章では、第3章で取り扱う it is that 節構文と、日本語の「の（だ）」を比較する。大竹 (2009) は、日本語の「の（だ）」に対応する英語の構文の1つとして、it is that 節構文を挙げている。このことは、「it is that 節構文は分裂文の変種であり、理由を提示する機能がある」と主張する本研究にとって問題となる。ただし、第4章で比較するのは、It is that ... と「…のだ」ではなく、否定形である It is not that ... と「…のではない」である。否定形の It is not that ... と「…のではない」を取り扱う理由は、否定形を比較することにより、両者の相違点がより際立つと考えるからである。第4章の目的は、It is not that ... を「…のではない」によって解釈することが困難な例を示し、「it is that 節構文は分裂文の変種である」という、第3章の主張を支持することである。具体的には、次の (8) のことを主張する。

- (8) It is not that ... を「…のではない」によって解釈することが困難な例が存在する。その理由は、It is not that ... が命題の真実性を否定しないのに対し、「…のではない」は命題の真実性を否定するからである。

さらに、(8) を踏まえたうえで、it is that 節構文はモダリティであると主張している八木 (2019) を批判的に検討する。

第5章では、文主語構文と主語位置からの it 外置を取り扱う。次の (9a) は文主語構文の例、(9b) は主語位置からの it 外置の例である。

- (9) a. That he hasn't phoned worries me.
- b. It worries me that he hasn't phoned.

(Huddleston and Pullum 2002: 1403)

Huddleston and Pullum (2002) によれば、次の (10) に示すように、that 節の内容

が新情報である場合は文主語構文は不適切であり、it 外置文を用いなければならない。

(10) 文脈：新聞記事冒頭

- a. It is amazing that the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France.
- b. #That the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France is amazing.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

一方、次の (11) に示すように、that 節の内容が談話に既出の情報である場合は、文主語構文と it 外置文のどちらも適切である。

- (11) a. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: It's a miracle that he did it at all.
- b. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: That he did it at all is a miracle.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

第 5 章の目的は、主に中右 (1983) による既定性の概念に基づき、次の (12) に示すことを主張することである。

- (12) 文主語構文は、「確定した話題」を叙述することで、前の文脈との結束力を生み出す有標の構文である。したがって、談話冒頭では不適切である。

さらに、次の (13) のように、it is that 節構文が法助動詞を伴っている形の例は、実際には it is that 節構文ではなく、主語位置からの it 外置の例であると主張する。

- (13) It may be that Minoan ships were built and repaired here.

(Longman Dictionary of Contemporary English)

第 6 章では、目的語位置からの it 外置の中でも、次の (14) のように、it が

随意的な事例を取り扱う。

- (14) a. She resents ___ that they appointed someone less qualified than her.
b. She resents it that they appointed someone less qualified than her.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)

resent の場合、(14a) のように that 節を直接従える場合もあれば、(14b) のように it + that 節を従える場合もある。次に (15) を見てみよう。

- (15) a. ?I believed it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
b. Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (*ibid.*)
c. Would you believe it that the election hurt them? (*ibid.*)
d. I positively do believe it that the election hurt them. (*ibid.*: 67)

Bolinger (1977) によれば、(14) に示した resent とは異なり、(15a) のように、believe が it + that 節を従えている場合は容認性が低い。しかし、(15b-d) のように、主節が否定や疑問、強い肯定などの環境にある場合には、believe は it + that 節を従えることができる。第 6 章の目的は、次の (16) を明らかにすることである。

- (16) a 目的語位置からの it 外置において、it が随意的な場合、it の有無は意味にどのように影響するか。
b. resent のように it + that 節を問題なく従える動詞と、believe のように特定の環境を要求する動詞には、どのような違いがあるか。

(16a) については、第 5 章で取り扱う主語位置からの it 外置と同様に、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示す。(16b) については、既定性の概念に加え、Cattell (1978) および Hegarty (1992) による動詞の 3 分類に基づいて分析を試みる。

第 7 章では、目的語位置からの it 外置の中でも、次の (17)-(21) に示す動詞や、(22) の V it ADJ that ... の形を取る例のように、it が義務的に要求される事例を取り扱う。

- (17) a. I take it that you are enjoying yourselves.
b. *I take ___ that you are enjoying yourselves.
(Quirk *et al.* 1989: 1184, fn)

- (18) a. Rumour has it that they're getting divorced.
 b. *Rumour has __ that they're getting divorced.
 (Huddleston and Pullum 2002: 963)
- (19) a. I like it that she has good manners.
 b. *I like __ that she has good manners. (Rothstein 1995: 514)
- (20) a. I just love it that you are moving in with us.
 b. *I just love __ that you are moving in with us. (Bolinger 1977: 68)
- (21) a. We welcome it that we are to have the benefit of your criticism.
 b. *We welcome __ that we are to have the benefit of your criticism.
 (ibid.)
- (22) a. I find it hardly surprising [that he tried to retract his statement].
 b. *I find __ hardly surprising [that he tried to retract his statement].
 (Huddleston and Pullum 2002: 963)

Kim and Sag (2005) は、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar, HPSG) の考え方にに基づき、語彙的構造 (lexical construction) によって目的語位置からの *it* 外置を説明しようと試みている。Kim and Sag (2005) は、目的語位置からの *it* 外置を許すのは、名詞句と *that* 節のどちらも従えることができる動詞であると主張している。しかし、(17)-(21) に示したような動詞は、名詞句は従えるが、*that* 節を従えることはできない。それにも関わらず、(17)-(21) の動詞は目的語位置からの *it* 外置が可能であるため、Kim and Sag (2005) による主張によって説明することはできない。Kim and Sag (2005) は、このような動詞に関しては、少数の例外として扱うに留めている。第 7 章では、第 6 章で取り扱う *it* が随意的な事例と同様に、*it* が義務的な事例においても *it* は統語的に導入される要素ではなく、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示す。

第 8 章では本研究が *It says* LOC 構文と呼ぶ、次の (23) に示すような構文を取り扱う。

- (23) a. It says in the Commandments that adultery is wrong.
 姦淫 [不義] はいけないと十戒で定められている。
 (新編英和活用大辞典)
- b. It says on the container to take two pills after every meal.
 容器に毎食後 2 錠ずつ服用するように書いてある。 (ibid.)
- c. {The Bible says / It says in the Bible} that God is love.
 聖書にいわく、神は愛なりと。 (ルミナス英和辞典)

- d. It says on the label ‘Produce of France’.

ラベルには「フランス産」と書かれている。

(Oxford Advanced Learner’s Dictionary)

Bolinger (1977) は、ラジオの会話からの例として、次の (24a) を挙げている。ただし、実際には場所句が *it* に先行している (24a) よりも、*it* が場所句に先行している (24b) のほうがやや普通の語順 (a somewhat more usual order) であるという。

- (24) a. In the Bible it says that ...

- b. It says in the Bible that ...

(Bolinger 1977: 81)

(23) においてそれぞれの辞書が示している日本語訳を見るかぎり、この構文における主語 *it* は単純に、場所句内の名詞句を指示しているようにも思える。実際に、(23c) では *The Bible says ...* と *It says in the Bible ...* が互いの言い換えとして扱われている。しかし、Bolinger (1977) によれば、次の (25) のような文を耳にすることははないという。

- (25) *In John’s letter it says that ...

(Bolinger 1977: 81)

すなわち、*It says* LOC 構文において、*in John’s letter* は場所句として不適切であるということになる。(25) において、*it* が単に *John’s letter* を指示しているのであれば、(25) は特に問題がないはずである。つまり、*It says* LOC 構文の *it* は、場所句内の名詞句を指示しているとは考えにくい。(25) が容認されないことについて、Bolinger (1977) は次の (26) のように述べている。

- (26) There is no syntactic reason for this but there is a semantic one: *it* is too general, *letter* is too specific.

(Bolinger 1977: 81)

つまり、*It says* LOC 構文において *in John’s letter* のような表現が場所句として不適切なのは、*it* が一般的 (general) すぎ、*letter* が特定の (specific) すぎるからであると Bolinger (1977) は述べている。第 8 章の目的は、次の (27) のことを明らかにすることである。

- (27) a. Bolinger (1977) が述べている「一般的」と「特定の」は何を意味しているか。

- b. 場所句が *it* に先行している場合よりも、*it* が場所句に先行している場合のほうが普通なのはなぜか。

(27a) に対しては次の (28a)、(27b) に対しては次の (28b) のことを主張する。

- (28) a. *It says* LOC 構文は、特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといった場合に用いられる。したがって、特定の書き手を明示することが可能である場合や、明示しても差し支えがないような場合には *it* はそぐわないため、その意味で *it* は「一般的」である。一方、*letter* は特定の書き手を明示しやすいため、その意味で「特定の」である。
- b. *It says* LOC 構文における *it* は、場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではない。それにもかかわらず、場所句を先行させると、*it* がその場所句に含まれる名詞句との前方照応性を強いられているように感じられ、その結果、不自然さを感じさせる。

第 9 章では結論として、各章のまとめを述べる。

第 2 章 it 分裂文

2.1 はじめに

本章では、it 分裂文を取り扱っている先行研究を概観する。it 分裂文は、it を主語に置き、文中からある要素を抜き出して焦点化する構文である。例として、次の (1) を見てみよう。

- (1) a. I bought a red sweater.
b. It was a red sweater that I bought. (Birner and Ward 2006)

(1b) の it 分裂文は、(1a) から名詞句 a red sweater を抜き出し、焦点化している。(1b) では名詞句が焦点化されているが、次の (2)-(7) に示すように、分裂文によって焦点化される要素は様々な範疇に渡る。

- (2) 名詞句 :
a. It's the president I'm referring to.
b. They made me secretary, but it wasn't secretary I'd wanted to be.
(Huddleston and Pullum 2002: 1418)
- (3) 前置詞句 :
a. It was with considerable misgivings that she accepted the position.
b. It's downstairs they want to play. (ibid.)
- (4) 副詞句 :
a. It was only gradually that I came to realise how much I was being exploited.
b. It isn't often they're as late as this. (ibid.: 1419)
- (5) 形容詞句 :
a. It's not lonely he made me feel—it's angry.
b. It wasn't green I told you to paint it. (ibid.)
- (6) 定型節 :
a. It's that he's so self-satisfied that I find offputting.
b. It's not whether you win or lose that matters, but how you play the game. (ibid.:1418)
- (7) 非定型節 :
a. It's certainly not to make life easier for us that they are changing the rules.
b. It was listening to Sue's story that made me realise how lucky we

have been.

(*ibid.*)

また、it 分裂文は、次の (8) に示すように、談話に既出の要素が省略される場合がある。

- (8) a. Who said that? — It was Bill (who said that).
b. It must have been John who did this, unless it was Bill (who did this).
(Declerck and Seki 1990: 15)

Declerck and Seki (1990) は、(8) のような it 分裂文を *reduced it-clefts* と呼んでいる。

本章の目的は、第 3 章にて *it is that* 節構文を it 分裂文の変種として取り扱うにあたり、it 分裂文が持つ特性を概観することである。具体的には、主に Prince (1978) と Declerck (1988) に基づき、次の (9) のことを確認する。

- (9) a. it 分裂文は、前提となる要素の存在を必要とする。ただし、その前提となる要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はない。
(Prince (1978) 参照)
b. it 分裂文は総記的含意 (*exhaustiveness implicature*) を持つ。ただし、その総記的含意は論理的含意 (*entailment*) ではないが、会話の含意 (*conversational implicature*) と言語規約的含意 (*conventional implicature*) の両方の性質を持っている。
(Declerck (1988) 参照)

2.2 Prince (1978) による it 分裂文の 2 分類

Prince (1978) や Birner and Ward (2006) が指摘しているように、it 分裂文が適切となるためには、開放命題 (*open proposition*) が前提として存在していなければならない。開放命題とは、変項を含む命題のことである。例として、次の (10) を見てみよう。

- (10) a. It was a red wool sweater that I bought.
b. I BOUGHT X. (Birner and Ward 2006: 294)

(10a) の it 分裂文は、(10b) の開放命題の存在を前提としている。つまり、(10a) は、「私が何かを買った」という命題が前提として存在している場合において

適切になるということである。そして、(10a) はその前提における変項 *x* を指定する値として、*a red wool sweater* を焦点化している。便宜上、*it* 分裂文において焦点化されている要素、すなわち (10a) であれば *a red wool sweater* を「焦点要素」と呼び、前提となっている要素、すなわち (10a) であれば *that I bought* を「前提要素」と呼ぶことにする。

it 分裂文の前提要素が、実際に前提としての性質を持っていることを確認するために、次の (11) と (12) を見てみよう。

- (11) a. Sue married Tom.
b. Sue didn't marry Tom. (Huddleston and Pullum 2002: 1415)
- (12) a. It was Tom that Sue married.
b. It wasn't Tom that Sue married. (*ibid.*)

it 分裂文でない (11a) の否定文である (11b) は、「Sue は Tom と結婚しなかった」と述べているだけである。したがって、(11b) には「Sue が誰かと結婚した」という前提は存在せず、Sue が誰とも結婚していない状況においても適切である。一方、*it* 分裂文である (12a) には「Sue が誰かと結婚した」という前提が存在し、(12a) の否定文である (12b) でもその前提が維持されている。さらに、次の (13) を見てみよう。

- (13) ! It was John who locked the door, though the door was never opened.
(Declerck 1988: 35)

(13) の *it* 分裂文では、「誰かがドアに鍵をかけた」ということが前提となっている。その前提が後半の “*though the door was never opened*” という部分によって否定されているため、(13) は全体として矛盾した文になっている。

Prince (1986) によれば、*it* 分裂文の前提要素の内容は、談話に既出の事柄であるとは限らない。Prince (1978) は、*it* 分裂文を 2 種類に分類している。1 つは、焦点要素のみが新情報であり、前提要素は談話に既出の事柄である *it* 分裂文である。もう 1 つは、焦点要素だけでなく、前提要素も情報的な重要性を持つ *it* 分裂文である。Prince (1986) は前者を *stressed focus it-cleft*、後者を *informative-presupposition it-cleft* と呼んでいる。続く 2.2.1 節と 2.2.2 節では、これら 2 種類の *it* 分裂文について見ていくことにする。

2.2.1 stressed focus *it*-cleft

本節では、焦点要素のみが新情報であり、前提要素は談話に既出の事柄であ

る stressed focus *it*-cleft について見ていく。例として、次の (14) を見てみよう。

- (14) a. ‘... So I learned to sew books. They’re really good books. It’s just the covers that are rotten.’ (S. Terkel, *Working*)
(Prince 1978: 896)
- b. Inexperienced dancers often have difficulty in ending the Natural Turn in the correct alignment ... It is usually the man who is at fault. (Birner and Ward 2006: 294)
- c. John only did the illustrations for the book. It was Mary who wrote the story. (*ibid.*)

(14a) では、直前の文脈において、話し手が本を縫っていることがわかるため、本に何らかの欠陥があるということが明らかである。(14b) でも、直前の文脈から、ナチュラル・ターンを正しい姿勢で終えられないダンサーがいることが明らかである。(14c) では、その本が存在するということから、誰かがその本の物語を書いたということが明らかである。このように、stressed focus *it*-cleft の場合、前提要素の内容は前の文脈からうかがい知ることができる。

また、次の (15) に示すように、stressed focus *it*-cleft の前提要素は談話に既出であり、情報的な重要性が低いため、しばしば省略される。

- (15) a. A: Did you turn the air-conditioning off?
B: No, it was Kim. (Birner and Ward 2006: 294)
- b. A: Who said that?
B: It was Bill (who said that). (Declerck and Seki 1990: 15)
- c. ‘Who made this mold? Was it the teachers? Was it the medicine man?’ (Colums)
(Prince 1978: 897)
- d. Haldeman: ‘I think he will do just everything he can not hurt the President.’
Nixon: ‘Yeah, that has to be true of everybody because it isn’t the man, it’s the office.’ (PT)
(Prince 1978: 897)
- e. [general description of routine]
‘It was usually two tricks a night. That was usually a hundred, a hundred and a quarter.’ (S. Terkel, *Working*)
(Prince 1978: 897)

2.2.2 informative-presupposition *it*-cleft

続いて、焦点要素だけでなく前提要素も情報的な重要性を持つ informative-presupposition *it*-cleft について見ていく。次の (16) を見てみよう。

- (16) a. ##‘It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1926, in a somewhat shocking movie for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.’ (PB)
(Prince 1978: 898)
- b. ‘The leaders of the militant homophile movement in America generally have been young people. It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights. (PG)
(Prince 1978: 898)
- c. The Indians were helpful in many ways. It was they who taught the settlers how to plant and harvest crops successfully in the New World. (Birner and Ward 2006: 295)

(16) の例では、*it* 分裂文の前提要素はどれも前の文脈からうかがい知ることができるような内容ではない。それにも関わらず、*it* 分裂文が用いられているのはなぜだろうか。Prince (1978) によれば、(16a) は新聞の埋め草からの例である。(16a) は “##” が表すように、記事冒頭に *it* 分裂文が現れている例であるため、前の文脈は存在しない。(16a) について、Prince (1978) は次の (17) のように述べている。

- (17) Were the first sentence not clefted, i.e. *Fifty years ago, H.F. gave ...*, it would seem as though the newspaper had just discovered (or were pretending to have discovered) the information in the *that*-clause; the *it*-cleft, in contrast, serves to mark it as a known fact, unknown only to the readership. (Prince 1978: 898)

つまり、*it* 分裂文の前提要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はないということになる。Prince (1978) は、informative-presupposition *it*-cleft の機能を、次の (18) のように説明

している。

- (18) Their function, or at least one of their functions, is TO MARK A PIECE OF INFORMATION AS FACT, known to some people although not yet known to the intended hearer. Thus they are frequent in historical narrative, or wherever the speaker wishes to indicate that s/he does not wish to take personal responsibility for the truth or originality of the statement being made. (Prince 1978: 899-900)

informative-presupposition *it*-cleft は、前提要素の内容を聞き手が知らない場合であっても、それを事実として提示するため、話し手がその前提要素の情報源として責任を負いたくない場合に用いられると言える。また、Prince (1978: 900) は informative-presupposition *it*-cleft が用いられるときの話し手の意図を、“Don’t argue with me—I didn’t invent this—and I’m aware that I didn’t invent this.” と表現している。

2.2.3 前提要素の性質

2.2.1 節では焦点要素のみが新情報であり、前提要素が談話に既出の事柄である stressed focus *it*-cleft について、2.2.2 節では焦点要素だけでなく前提要素も情報的な重要性が高い informative presupposition *it*-cleft について紹介した。では、*it* 分裂文の前提要素は、どのような性質を持っていると考えればよいだろうか。

次の (19) に示すように、Prince (1978) は旧情報を given information と known information に分けて定義している。

- (19) a. GIVEN INFORMATION: Information which the coöperative speaker may assume is appropriately in the hearer’s consciousness.
b. KNOWN INFORMATION: Information which the speaker represents as being factual and as already known to certain persons (often not including the hearer). (Prince 1978: 903)

2.2.2 節で見たように、*it* 分裂文の前提要素は話し手が事実であると捉えている事柄であればよく、聞き手の意識にのぼっている事柄である必要はない。すなわち、*it* 分裂文の前提要素は given information である必要はなく、known information でさえあればよいと言える。Prince (1978) による known information の定義は、次の (20) に示す中右 (1983) による「既定性」の概念にも関係している可能性がある。

- (20) ある事柄の知識（概念、命題）が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。 (中右 1983: 549)

既定性の概念についてはここでは深く立ち入らないが、第4章、第5章、第6章にて詳細に取り扱う。

2.2.4 縮約 *it* 分裂文

2.2.1 節にて、*stressed focus it-cleft* の前提要素は談話に既出であり、情報的な重要性が低いため、次の (21) のように、しばしば省略されることを示した。

- (21) a. Who said that? — It was Bill (who said that).
b. It must have been John who did this, unless it was Bill (who did this).
(Declerck and Seki 1990: 15)

(21) のように前提要素が省略された *it* 分裂文を、Declerck and Seki (1990) が *reduced it-clefts* と呼んでいることにならって、便宜上、「縮約 *it* 分裂文」と呼ぶことにする。本節では、Declerck and Seki (1990) による分析を概観し、縮約 *it* 分裂文もやはり、*it* 分裂文であることを確認する。

Declerck and Seki (1990) は、次の (22b) のように、前提要素の内容が直前の *if* 節からうかがい知れるような例を中心に扱っている。

- (22) a. It was a book that they gave him.
b. If they gave him something, it was a book.
(Declerck and Seki 1990: 23)

Meier (1988) が (22b) のような例を「*if* 分裂文 (*if clefts*)」と呼び、*it* 分裂文や擬似分裂文と区別しているのに対し、Declerck and Seki (1990) は、(22b) のような例は縮約 *it* 分裂文であると主張している。次の (23) に示すように、*it* 分裂文の前提要素は *if* 節に限らず、様々な種類の節として現れる。

- (23) a. Where such problems exist, it is always because of racial prejudices.
(Declerck and Seki 1990: 19)
b. Though flat characters do figure in such novels, it is only as objects of derision. (ibid.)

- c. Whoever was responsible for the accident, it was not the pedestrian. (ibid.: 20)
- d. Because the one who called had a foreign accent, it can't have been Bill. (ibid.)
- e. When we went somewhere, it was always to some small village or other. (ibid.)
- f. Since the chairman is no longer elected by the full assembly, it has always been a woman. (ibid.)
- g. As long as this faculty has had a dean, it has been a man. (ibid.)
- h. Until the chairman is elected by the full assembly, it will never be a woman. (ibid.)
- i. As to what I did, it was only to help you. (ibid.)

したがって、Meier (1988) のように「if 分裂文」という分類を新たに設けるのは適切ではなく、(22b) や (23) はすべて縮約 it 分裂文であると考えるのが妥当である。

縮約 it 分裂文が if 節に後続している例では、it が if 節内の要素を指示しているように見える場合がある。例として、次の (24) と (25) を見てみよう。

- (24) a. If they believe anybody, {it/*that/*this} is Tom.
- b. If there are two people that know the answer, {it/*that/*this} is John and Mary. (Declerck and Seki 1990: 21)
- (25) a. *If some boy will help you, he will be Tim.
- b. *If some girl will help you, she will be Betty.
- c. *If some people will help you, they will be your neighbors. (ibid.: 32)

(24a) であれば、it は if 節内の anybody を指示しているようにも見える。しかし、(24a) から明らかなように、it を this や that に置き換えることはできない。これは (24b) についても同様である。また、(25) に示したように、it を人称代名詞に置き換えることもできない。したがって、縮約 it 分裂文が if 節に後続し、it が if 節内の要素を指示しているように見える場合であっても、it はいわゆる「虚辞」の it であると考えるのが妥当である。

次に、Declerck and Seki (1990) は、it 分裂文と縮約 it 分裂文の統語的な共通性と、それら 2 つの構文と擬似分裂文との相違性を指摘している。次の (26)-(28) を見てみよう。

(26) it 分裂文 :

- a. I am sure it was Bill that she gave the money to.
- b. I am sure it was to Bill that she gave the money to.

(Declerck and Seki 1990)

(27) 縮約 it 分裂文 :

- a. If it is true that she gave the money to someone, then I am sure that it was Bill.
- b. If it is true that she gave the money to someone, then I am sure that it was to Bill. (ibid.)

(28) 擬似分裂文 :

- a. I am sure that the one she gave the money to was Bill.
- b. *I am sure that the one she gave the money to was to Bill. (ibid.)

it 分裂文の焦点要素として前置詞句が抜き出される場合、(26a) のように前置詞句内の名詞句だけが焦点要素に置かれる場合もあれば、(26b) のように前置詞句全体が置かれる場合もある。これは (27) の縮約 it 分裂文に関しても同様である。一方、擬似分裂文の場合、(28a) のように前置詞句内の名詞句だけが焦点要素に置かれていれば問題はないが、(28b) のように前置詞句全体が置かれることはない。また、it 分裂文と縮約 it 分裂文の共通性は、次の (29) と (30) ならびに (31) と (32) の対比からも明らかである。

(29) it 分裂文 :

- a. It was murder that he was often put up to by his wife.
- b. *It was to murder that he was often put up by his wife. (ibid.)

(30) 縮約 it 分裂文 :

- a. If there was one thing that he was often put up to by his wife, it was murder.
- b. *If there was one thing that he was often put up to by his wife, it was to murder. (ibid.)

(31) it 分裂文 :

- a. It was that promise that he went back on.
- b. *It was on that promise that he went back. (ibid.)

(32) 縮約 it 分裂文 :

- a. If there was one promise he went back on, it was that one.
- b. *If there was one promise he went back on, it was on that one.

(ibid.: 24)

(29a) と (30a) の *put up to* はイディオムであるため、(29b) と (30b) のように *to murder* を抜き出して焦点化することはできない。(31) と (32) の *go back on* に関しても同様である。

本節で示した Declerck and Seki (1990) の分析に基づけば、縮約 *it* 分裂文も *it* 分裂文であることは明らかである。

2.3 総記的含意

it 分裂文は、総記的含意 (*exhaustiveness implicature*) を持つと言われる。例として、Halliday (1967) が挙げている次の (33) を見てみよう。

- (33) a. It was John who broke the window.
b. John and nobody else broke the window. (Halliday 1967: 236)

(33a) の *it* 分裂文は (33b) を含意するという。つまり、(33a) には「ジョンが窓を割り、他の誰も窓を割らなかった」、言い換えれば「窓を割ったのはジョンだけである」という含意があるということである。本節では、主に Declerck (1988) に基づき、*it* 分裂文が持つ総記的含意は論理的含意 (*entailment*) ではないが、会話の含意 (*conversational implicature*) と言語規約的含意 (*conventional implicature*) の両方の性質を持っていること示す。

2.3.1 論理的含意

Declerck (1988) は、*it* 分裂文の総記的含意は、論理的含意ではないと主張している。次の (34) を見てみよう。

- (34) a. It was John who left the room.
b. Only one person left the room. (Declerck 1988: 29)

it 分裂文の総記的含意が論理的含意であるならば、(34a) は (34b) を論理的に含意するはずである。そして、(34a) が (34b) を論理的に含意するならば、次の (35) の三段論法が成り立つと予測されるが、実際には成り立たない。

- (35) Premise 1. If it was John who left the room, then only one person left the room.
Premise 2. Mary also left the room.
Conclusion. It was not John who left the room. (Declerck 1988: 29)

(35) の三段論法が成り立たないのは、結論における否定文が前提にそぐわないためである。次の (36) のように only を加えて総記的含意を明示化すれば、三段論法は成り立つ。

(36) Premise 1. If it was (only) John who left the room, then only one person left the room.

Premise 2. Mary also left the room.

Conclusion. It was not only John who left the room. ((35) を元に作成)

つまり、次の (37a) が (37b) のように only の意味を論理的に含意するならば、その否定文は (38b) の意味になるはずだが、実際には (38a) の意味にしかない。

(37) a. It was John who left the room.

b. It was only John who left the room.

(38) a. It was not John who left the room.

b. It was not only John who left the room.

it 分裂文は、肯定文であれば「焦点要素が前提要素の変項を指定する値である」ということを述べ、否定文であれば「焦点要素が前提要素の変項を指定する値ではない」ということを述べる文であり、総記的含意は論理的に含意されるわけではないと考えられる。

また、Horn (1981) は次の (39) を挙げている。

(39) a. #I know Mary ate a pizza, but it wasn't a pizza that she ate!

b. #I know Mary ate a pizza, but was it a pizza that she ate?

c. #I know Mary ate a pizza, but I've just discovered that it was a pizza that she ate!

d. #I know Mary ate a pizza, but if it was a pizza that she ate, then all is well. (Horn 1981: 130)

もし、it 分裂文が持つ総記的含意が論理的含意であれば、(39) は問題がないと予測される。例えば、(39a) であれば、「Mary がピザを食べたのは知っている」と述べ、それに続けて「彼女が食べたのはピザではなかった」と述べるのであれば冗長にはならないはずだが、実際には不適切である。(39b-d) に関し

ても同様である。さらに、(39c) に *only* を加えた次の (40) は適切である。

- (40) I know Mary ate a pizza, but I've just discovered that it was only a pizza
that she ate! (Horn 1981: 130)

only を含む (40) であれば、「メアリーがピザを食べたのは知っているが、彼女が食べたのはピザだけだったということに気づいた」と解釈されるため、冗長になることはない。したがって、(39) の *it* 分裂文は *only* の意味を論理的に含意するわけではない。このことも、*it* 分裂文の総記的含意が論理的含意ではないということを示している。

2.3.2 会話の含意と言語規約的含意

では、*it* 分裂文が持つ総記的含意はどのような要因により生じるのだろうか。Declerck (1988) は、*it* 分裂文の総記的含意は、*it* 分裂文が変項の値を指定する文であることに起因するとして、Grice (1975) に基づき、次の (41) のように述べている。

- (41) The Maxim of Quality prescribes that the speaker should specify the correct value(s) for the variable; the Maxim of Quantity ('Make your contribution as informative as required') prescribes that the speaker should give the complete (exhaustive) list of the values that satisfy the variable.
(Declerck 1988: 30)

つまり、「質の格率 (the Maxim of Quality)」によって、話し手は変項を指定する値として正しい値を提示することが求められ、「量の格率 (the Maxim of Quantity)」によって、変項を指定する値の総記的なリストを提示することが求められる、ということである。

it 分裂文が持つ総記的含意が会話の含意であるならば、取り消すことができる (cancelable) と予測される。しかし、Declerck (1988) は、*it* 分裂文の総記的含意は取り消すことができる場合もあればできない場合もあるため、言語規約的含意か会話の含意かを断言することは容易ではないと述べている。まず、*it* 分裂文の総記的含意が取り消されている例として、次の (42) を見てみよう。

- (42) a. It was not only John who kissed Mary. Bill and Fred did so too.
b. It is mainly tourists that come here.
c. It was especially the children that were afraid of her.

- d. It is primarily the workers that are dissatisfied with the government's policy.
- e. It was also John who ran away. (Declerck 1988: 33)

(42a-e) では、それぞれ **not only, mainly, especially, primarily, also** によって、焦点要素が変項を指定する値の集合の一部に過ぎないことが含意され、結果として総記的含意が取り消されている。

次に、総記的含意を取り消すことができない場合を見ていく。まずは、会話の含意が取り消されている例として、次の (43) を見てみよう。

- (43) John used to be a member of the club, and he still is. (Declerck 1988: 35)

(43) は **used to** によって「ジョンはもはやそのクラブのメンバーではない」ということが含意されるが、後半の **and he still is** によってその含意が取り消されている。すなわち、(43) における「ジョンはもはやそのクラブのメンバーではない」という含意は、会話の含意であると言える。Atlas and Levinson (1981) は、it 分裂文の総記的含意が取り消されている例として、次の (44) を挙げている。

- (44) It wasn't John that Mary kissed — it was Mart and Rick.
(Atlas and Levinson, 1981: 25)

たしかに、(44) は問題のない文である。しかし、2.3.1 節で見たように、そもそも否定の it 分裂文は総記的含意を持たない。したがって、(44) のような例を、it 分裂文の総記的含意が取り消されている例として論じるべきではない。さらに、次の (45) を見てみよう。

- (45) a. Was it Bill and Fred who kissed Mary? — No, it was only Bill.
b. Was it Bill who ran away? — No, it was John and Mary.
(Declerck 1988: 34)

(45a,b) も問題のない文であるが、Declerck (1988) は、これらも it 分裂文の総記的含意が取り消されている例ではないと述べている。Declerck (1988) は、it 分裂文の総記的含意を取り消すことができるか否かを論じる場合には、上記 (44) の場合と同様に、it 分裂文を発話する人物と、総記的含意を取り消す人物が同一人物である例を示さなければならないとしている。2.2 節にて、次の (46a) のように、it 分裂文の前提要素を否定しようとするすると矛盾が生じることを

示した。しかし、(46b) のように、it 分裂文を発話する人物と異なる人物であれば、その前提要素すらも否定することができてしまう。

- (46) a. ! It was John who locked the door, though the door was never opened.
b. It was John who closed the door. — No, he didn't. The door was closed all the time. (Declerck 1988: 35)

上記 (43) と同様に、it 分裂文を発話した人物と同じ人物が総記的含意を否定している例として、Declerck (1988) は次の (47) を挙げている。

- (47) a. ?* It was Bill who ran away, but not just him, John and Mary also ran away. (Declerck 1988: 34)
b. *It was Betty who came in last, although it was Mary too. (ibid.:35)

(47a,b) は全体として矛盾した文であるため、上記 (43) と同様の方法で it 分裂文の総記的含意を取り消すことはできないということを示している。

Declerck (1988) は、it 分裂文の総記的含意を取り消す唯一の方法は、上記 (42) のように not only, mainly, especially, primarily, also といった表現を用いる以外にないとして、次の (48) のように結論付けている。

- (48) This suggests that the implicature, although it arises from conversational principles, must be conventionalized to a (fairly high) degree. (Declerck 1988: 35)

すなわち、Declerck (1988) は、it 分裂文が持つ総記的含意は、会話の含意から生じたものではあるが、言語規約的含意化していると結論付けている。

2.4 おわりに

本章では、it 分裂文が持つ特性として、主に Prince (1978) と Declerck (1988) に基づき、次の (49) に示すことを概観した。

- (49) a. it 分裂文は、前提要素の存在を必要とする。ただし、その前提要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はない。 (Prince (1978) 参照)
b. it 分裂文は総記的含意を持つ。ただし、その総記的含意は論理的含意ではないが、会話の含意と言語規約的含意の両方の性質を

持っている。

(Declerck (1988) 参照)

次の第 3 章では、上記 (49) に示した it 分裂文の特性を踏まえて、it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なし、分析を試みる。

第3章 it 分裂文と it is that 節構文¹

3.1 はじめに

本章の目的は、it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なして分析することである。it is that 節構文とは、次の (1) に示すような構文である。

- (1) I've been sitting here all evening and none of those youngsters has invited me to dance. — I suppose they only invite girls they already know. — No, it's not that. It's that I'm not pretty enough. (Declerck 1992: 209)

次の (2) に示すように、Bolinger (1972) は、it is that 節構文が why を含む疑問文に対する応答となり得ることを示し、補文標識 that が because の代わりとして働くため、it is because ... への言い換えが可能であると述べている。

- (2) Why didn't he take the plunge? Was it that (=because) he didn't have the money (that he didn't take the plunge)? (Bolinger 1972: 35)

このことを踏まえると、it is that 節構文には理由を提示する機能があると考えられる。²

本章では、Bolinger (1972) と、3.3.1 節で紹介する Bolinger (1977) による it 分裂文の分析に基づき、理由を提示する it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なして分析を試みる。³ it 分裂文の変種とは、すなわち、it is that 節構文には it 分裂文との類似点もあれば相違点もあるということである。具体的には、次の (3) に示すことを主張する。

- (3) a. it 分裂文と同様に、it is that 節構文は前提として開放命題を必要とする。主語 it はその前提を指示し、その前提に含まれる変項を指定する値を焦点要素として取り立てることで、理由を提示する。
b. it 分裂文とは異なり、it is that 節構文の it が指示する前提は、聞き手の意識にのぼっていると話し手が判断している事柄、すな

¹ 本章の内容は、佐藤 (2015b) に大幅に加筆・修正を加えたものである。また、一部に佐藤 (2015a) の内容を含んでいる。

² 本研究は、「理由」と「原因」を区別せず、ひとまとめにして「理由」と呼ぶ。

³ 本研究は、理由を提示する it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なすが、第2章で取り扱ったような従来の it 分裂文と区別するために、便宜上、it is that 節構文という呼称を用いる。添付資料の「本研究で取り扱っている構文とその分類」もあわせて参照されたい。

わち given information (Prince 1978) に相当する。

3.2 it is that 節構文と区別すべき例

本題に入る前に、本節では、一見すると理由を提示する it is that 節構文と類似しているが、区別されなければならない例があることを示す。

3.2.1 thus や so を伴う例

3.1 節で示したように、Bolinger (1972) は、it is that 節構文における補文標識 that は because の代わりとして働くため、it is because ... への言い換えが可能であると述べている。Bolinger (1972) によれば、that が because の代わりとして働くことができるのは、2つの文が because によって結ばれる関係にあることは、because がなくとも容易に推論が可能だからである。次の (4) を見てみよう。

- (4) a. I couldn't buy it. I didn't have the money.
b. I bought a house. I was living in Paris. (Bolinger 1972: 37, fn.14)

(4a) を見れば、2つの文が I couldn't buy it because I didn't have the money. という関係にあることは容易に推論が可能である。一方、(4b) の場合、2つの文が I bought a house when I was living in Paris. という関係にあることを推論するのは、(4a) の場合と比べて困難であると感じられる。

さらに、次の (5) に示すように、because はダッシュ “—” に置き換えることができるが、when は置き換えることができない。

- (5) a. I couldn't buy it — I didn't have the money.
b. *I bought a house — I was living in Paris. (Bolinger 1972: 37, fn.14)

このことも、2つの文が because によって結ばれる関係にあることは容易に推論が可能であることを示している。

大竹 (2009) は、it is that 節構文が thus や so を伴って現れることを指摘し、it is that 節構文には結果を提示する機能もあると述べている。例えば、次の (6) は、大竹 (2009) が挙げている thus と so を伴っている例である。

- (6) a. Her mother “didn't much care if her daughters were married but cared deeply that we get university degrees”, and thus it was that, by dint of the judicious trading of family heirlooms, Elli Strassinopoulos was able to bring both girls to London while they were in their teens, Ar-

ianna destined for Cambridge and Agapi for Rada.

(*The Sunday Times Magazine*: 1995/01/22)

(大竹 2009: 58)

- b. Writers, on the other hand, live in a floating world, where ideas swim up to audition all the time. So it is that out of the Niagara Falls, where this diary found me last week, the bubble of a story has suddenly surfaced.

(*The Times Magazine*, 1993/11/13)

(大竹 2009: 58)

しかし、筆者の知る限り、*It is that ...* という形の文が結果を提示している例は、*thus* や *so* といった表現を伴っている例ばかりである。次の (7) にいくつかの例を示す。

- (7) a. Thus it is that the Tamar, beautiful as the nymph whose name she bears, winds her way from the rugged north coast between the hills, [...]. (BNC)
- b. Thus it is that some of the Khans may perceive influence where I have exerted none.’ Alexei mastered a stare of disbelief.’ (BNC)
- c. Thus it was that Britain and Spain produced two distinct political responses to the crisis. (BNC)
- d. So it is that we can apply to research of different disciplinary provenance general criteria of appraisal approved by the wider culture of intellectual enquiry. (BNC)
- e. So it was that Uncle Albert closed his eyes, rested his chin on his hand, and began to have a Big Think. (BNC)
- f. So it was that the affairs of Bedford’s House of Industry came under scrutiny by a Mr. Adey who wrote to the then mayor, Dr. George Witt, [...]. (BNC)

一方、これまで見てきたように、理由を提示する *it is that* 節構文の場合は、理由を提示していることを明示する表現が伴わなくとも、理由を提示することができる。

また、次の (8) に示すように、*it is that* 節構文は *It is not that ... It is just that ...* や *It is not that ..., but that ...* といったように、否定文に続いて肯定文が現れる傾向がある。

- (8) a. It is not that they are extreme, or personally off-putting. It is just that their claim to power is completely out-of-date. (BNC)
- b. It is not that he doesn't care, just that his sense of values are different — not better, not worse, just different. (BNC)
- c. It is not that such people are necessarily 'inadequate', but that they feel themselves to be inadequate. (BNC)
- d. It is not that they are not capable of competing; it is simply that there have been no great black performers in these areas in history (due to lack of opportunities and facilities) and no tradition exists. (BNC)
- e. It is not that we are afraid to do so but simply that the occasion never really arises. (BNC)
- f. It is not that he lies about them, rather that only a patient and omnivorous prospector would have found the particular treasures which he quotes. (BNC)

そのため、Quirk *et al.* (1989) は *it is that* 節構文を「相関構文 (correlative construction)」と呼んでいる。しかし、上記 (6) や (7) から分かるように、*thus* や *so* を伴う例には、否定文に続いて肯定文が現れるという傾向は見られない。

以上のことから、本研究は、(6) や (7) の例は *it is that* 節構文とは別の構文であるという立場をとる。⁴

3.2.2 副詞 *just* を伴う例

次の (9) に示すよう、*it is that* 節構文に副詞 *just* が介在している例が存在する。

- (9) I didn't mean to upset you. It's just that I had to tell somebody.
(Oxford Advanced Learner's Dictionary)

Bolinger (1972) は、副詞 *just* を伴う例に関して、*it is that* 節構文とは別の構文である場合があることを指摘している。副詞 *just* の有無による違いとしては、次の (10) と (11) に示すように、補文標識 *that* の省略可能性が挙げられる。

- (10) a. *It's ___ he can't make up his mind.

⁴ *thus* や *so* を伴う例を *it is that* 節構文と同じ構文として取り扱っている研究としては、大竹 (2009) や八木 (2019) を参照されたい。

- b. It's just — he can't make up his mind. (Bolinger 1972: 36)

Bolinger (1972) によれば、(10a) のように副詞 *just* を伴わない例では、*because* の代わりとして働く補文標識 *that* を省略することは許されない。一方、(10b) のように、副詞 *just* を伴う例では省略が許される。また、次の (11a,b) も (10b) と同様に *just* を伴っており、補文標識 *that* を省略することができる。

- (11) a. She felt her face going red — “I’m sorry Rob, it’s just that I’m, um, overwhelmed.” (*Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*)
b. Your hair is all right; it’s just that you need a haircut. (*ibid.*)
(12) a. She felt her face going red — “I’m sorry Rob, it’s just — I’m, um, overwhelmed.” ((11a) を元に作成)
b. Your hair is all right; it’s just — you need a haircut. ((11b) を元に作成)

筆者のインフォーマントによれば、(12a,b) のように *that* を省略した文は、非常にくだけた言い方ではあるが、可能であるという。⁵

また、次の (13) に示すように、*it’s just that* や、*that* が省略された *it’s just* に固有の特徴として、補文を従えずに単独で用いられ、緩和表現のように機能するという点が挙げられる。

- (13) a. ‘What’s the matter baby?’
Brooke asked as she rubbed my back. I swallowed hard. I wanted to tell her so bad. But I knew I couldn’t. I didn’t have the heart.
‘Um—’ I answered. ‘Nothing Brooke. It’s just that ... you know I love you right?’
‘Of course I do. And I love you too.’
‘It’s just that.’
‘Come on baby, speak to me, speak to me.’
‘It’s just that. I feel like a loser, you know, not being able to find out who is responsible for all this madness.’

⁵ 実際には、補文標識 *that* を省略した例を容認できないとするインフォーマントもいた。しかし、そのインフォーマントは Bolinger (1972) が容認可能であるとしている (10b) の例も容認しなかったため、補文標識 *that* の省略に関しては話者の間で許容度に違いがあるようである。また、そのようなインフォーマントであっても、(12a) の例には “um” という間投詞が現れていることにより、くだけた場面であることがうかがえるので、容認度が高いと述べている。

- (A. Ogunware, *Chiller: Friend at Day, Killer by Midnight*)
- b. ‘They *hate* each other, okay? They take this trip every year just so they can show each other up. You think they trust each other?’
 ‘I don’t know. It’s just—’ (G. Forman, *The Lock Artist*)
- c. A: He’ll do what he needs to do. He told me he would.
 B: Is that all he told you?
 A: What do you mean?
 B: Nothing. It’s just ... it’s just ... How can you trust him?
 (The Vampire Diaries, 4-8)

(13a) の *it’s just that* や (13b) の *it’s just* は、日本語の「ただ…」や「ちょっと…」のように緩和表現として機能していると推察される。

このように、副詞 *just* を伴う例は、*just* を伴わない例とは異なる振る舞いをする場合がある。*just* を伴う例すべてが *it is that* 節構文とは別構文であるとまで主張するつもりはないが、本節で示したような例には注意しておかなければならない。

3.2.3 法助動詞を伴う例

さらに、理由を提示する *it is that* 節構文と区別されなければならない例として、法助動詞を伴う次の (14) のような例が挙げられる。

- (14) a. There is no doubt that Islam increasingly is perceived as the philosophical and ethical foundation for good governance of Indonesia in the future. It may be that we are witnessing in the modernist Islamist ideas of Indonesia a glimpse of the future of political Islam elsewhere in the Muslim world. (Los Angeles Times, 1998/05/15)
 (大竹 2009: 107)
- b. But if he willingly went along with Singer, then what is he doing running the company now? It could be that he is the only man alive who knows where everything is in the indisputable mess that Tel-ewest has become. Or it might be that some are impressed that he has managed to maintain some sort of working relationship with the banks. (The Observer, 2002/11/10)
 (大竹 2009: 107)

大竹 (2009) は、*it is that* 節構文が *thus* や *so* を伴う例と同様に、法助動詞を伴

う例に関しても *it is that* 節構文の一種であると主張している。

しかし、次の (15) に示すように、法助動詞を伴う例でも、副詞 *just* を伴う例と同様に、補文標識 *that* の省略が可能である。

- (15) a. *It's ___ he can't make up his mind.
b. It could be ___ he didn't have the money. (Bolinger 1972: 36)

さらに、次の (16) に示すように、法助動詞を伴う例と伴わない例は、*that* 節をさらに後続させられるかどうかの違いがある。

- (16) a. It was that he didn't have the money that he didn't take the plunge.
b. ?It could be that he didn't have the money that he didn't take the plunge. (Bolinger 1972: 36)

(16a) のように、法助動詞を伴わない例では、*it is that* 節構文がどのような事柄に対する理由を提示しているのかを明示するために、さらに *that* 節を後続させることが可能である。一方、(16b) のように、法助動詞を伴う例では、*that* 節をさらに後続させると容認度が下がる。

また、次の (17) に示すように、法助動詞を伴う例と伴わない例は、補文前置についても異なる振る舞いを見せる。

- (17) a. *He didn't have the money, it was.
b. He didn't have the money, it could be/it happened/it seemed. (Bolinger 1972: 37, fn.13)

(17a) のように、法助動詞を伴わない例では補文前置は不可能だが、(17b) のように、法助動詞を伴う例では補文前置が可能である。

以上のことから、法助動詞を伴う例についても、本研究は *it is that* 節構文とは別の構文であるという立場を取る。法助動詞を伴う例に関しては、第 5 章にて、主語位置からの *it* 外置の例であると主張する。

3.2.4 「*it* が明確な指示対象を持つ」とされる例

it is that ... という形をとる例の中に、*it* が前の文脈の名詞句を指示しているように見える例がある。そのような例では、*if* 節に続いて *it is that ...* が現れる傾向がある。例として、次の (18) を見てみよう。

- (18) If there is a theme here, it is that these presidents, far from riding on the back of history, are instead driven by forces beyond their control. (COCA)
(八木 2019: 155)

八木 (2019) は、(18) を「it が明確な指示対象を持つ場合」であると述べている。つまり、八木 (2019) に基づけば、(18) の it は二重下線で示した a theme を指示しているということになる。次の (19) に示す例についても同様に、it は二重下線で示した名詞句を指示しているように見える。

- (19) a. If books of the summer have something in common, it's that they tend to break rules: [...]
(TIME, 2014/07/14)
- b. Gridlock, polarization, obstructionism — if there's one thing Washington can agree on, it's that Washington can't agree on anything.
(The Daily Yomiuri, 2012/05/02)
- c. If I have any criticisms of this section it is that it underestimates the difficulties of writing software and ignores the influence the historical development of computing has on the acceptance of new ideas (what Seymour Papert calls the QWERTY phenomenon). (BNC)
- d. Yes, well, I dare say we shall get along reasonably well together, son. If there's one thing I might request, it's that you, let us say, steer clear of my young daughter.
(S. Cheatle, *Straight Up*)
(Declerck 1992: 218)

しかし、(18) や (19) のような例は、第 2 章で示した、Meier (1988) が「if 分裂文 (*if cleft*)」と呼ぶ例である。第 2 章で紹介したように、Declerck and Seki (1990) は、「if 分裂文」は実際には縮約 it 分裂文であるとして、次の (20) を挙げている。

- (20) a. If they believe anybody, {it/*that/*this} is Tom.
b. If there are two people that know the answer, {it/*that/*this} is John and Mary.
(Declerck and Seki 1990: 21)
- (21) a. *If some boy will help you, he will be Tim.
b. *If some girl will help you, she will be Betty.
c. *If some people will help you, they will be your neighbors. (*ibid.*: 32)

(20) においても、it は二重下線で示した要素を指示しているようにも見える。

しかし、(20) から明らかなように、「if 分裂文」の *it* は *this* や *that* に置き換えることができない。また、(21) のように、*it* を人称代名詞に置き換えることもできない。したがって、(20) の *it* は二重下線で示した名詞句を指示しているわけではなく、*it* 分裂文の *it* と同様に、いわゆる「虚辞」の *it* であると考えられる。つまり、このような例は、前提要素が *if* 節内に現れている *it* 分裂文であり、(18) や (19) に関しても同様に、*it* は *if* 節内の名詞句を指示しているわけではなく、*it* 分裂文の *it* であると考えられる。

もし、八木 (2019) が主張するように、(18) や (19) において、*it* が二重下線で示した名詞句を指示しているのであれば、*it* は単なる前方照応の指示詞であり、本研究で取り扱う必要はないと思われる。もし、Declerck and Seki (1990) が挙げている (20) と同様に、(18) や (19) も *it* 分裂文の *it* であるならば、前提要素の内容は *if* 節内に既出であり、省略されているため、第 2 章で紹介した *stressed focus it-cleft* (Prince 1978) に相当する。どちらにしても、(18) や (19) は *it is that* 節構文と同一の構文ではない。

3.3 提案

本節では、まず 3.3.1 節にて、Bolinger (1977) による *it* 分裂文の分析を概観する。続く 3.3.2 節にて、*it* 分裂文と *it is that* 節構文の類似点を示し、3.3.3 節では両者の相違点を示す。3.3.4 節では、Bolinger (1977) による *it* 分裂文の分析を *it is that* 節構文に応用して分析を試みる。3.3.5 節では、本研究の主張と大竹 (2009) の主張を比較する。

3.3.1 Bolinger (1977) による *it* 分裂文の分析

本節では、本研究が依拠する、Bolinger (1977) による *it* 分裂文の分析を概観する。Bolinger (1977) は、*it* 分裂文における *it* を前方照応的であると分析している。Bolinger (1977) が *it* 分裂文の *it* を前方照応的であるとする理由は、「既出の根拠 (a prior basis)」を欠いている文を *it* 分裂文にすることが困難であるためである。まずは、次の (22) を見てみよう。

- (22) a. A: When will we know?
B: It's tomorrow that we'll know.
- b. A: When will you tell me?
B: *It's tomorrow that I'll tell you. (Bolinger 1977: 71)

(22a) のように、When will we know? という問いに対して、*it* 分裂文を用いて It's tomorrow that we'll know. と答えるのは適切である。しかし、(22b) のよう

に、*When will you tell me?* という問いに対して、*it* 分裂文を用いて *It's tomorrow that I'll tell you.* と答えるのは不適切であるという。Bolinger (1977) はこのことについて詳細に議論しているわけではないので、筆者なりの説明を加えたい。まず、(22a) においては、話者 A と話者 B がある事柄についていつか知ることになっているということが、すでに二人の話者が共有する前提として存在している場面であると理解できる。一方、(22b) における話者 A の「いつあなたは私に教えてくださいか」という質問は、話者 B にとって予期せぬ質問であり、全く新しい情報を求めている。「話者 A と話者 B がなんらかの事柄についていつか知ることになっている」という前提が存在する (22a) においては、*it* 分裂文の主語 *it* がその前提を指示する。そして、その前提における未知の情報である「いつか」が具体的にいつであるかを指定する *tomorrow* が焦点要素として取り立てられている。一方、(22b) では、話者 A が話者 B にとって予期せぬ質問をして、全く新しい情報を求めているため、主語 *it* が指示する前提が存在しないため、*it* を主語に立てることができないと考えられる。

さらに、次の (23) を見てみよう。

(23) a. A: Who came?

B: It was John.

b. A: Who else came?

B: Mary. /*It was Mary.

(Bolinger 1977: 72)

(23a) の文脈であれば、主語に *it* を立てるのは自然であるが、(23b) の文脈では主語に *it* を立てることはできないという。ここでも、筆者なりの説明を加えていく。(23a) は、「誰かが来た」という事柄がすでに話し手と聞き手が共有する前提として存在している場面であると理解できる。一方、(23b) では、話者 A の「他に誰が来ましたか」という質問は、話者 B にとって予期せぬ質問であり、全く新しい情報を求めている。「誰かが来た」という前提が存在する (23a) においては、主語 *it* がその前提を指示することができる。そして、その前提における未知の情報である「誰か」が具体的に誰であるかを指定する *John* が焦点要素として取り立てられている。ここで、*It was John who came.* と発話することも可能であるはずだが、*who came* の部分は談話に既出であるため、省略されている。つまり、(23a) は第 2 章で紹介した縮約 *it* 分裂文の例である。一方、(23b) では、「誰かが来た」という事柄であれば、すでに話し手と聞き手が共有する前提として存在しているかもしれないが、*who else* は話者 A の発話の時点ではじめて現れたものである。したがって、(23b) では、主語 *it* が指示する前提が存在しないため、*it* を主語に立てることはできないと考えられる。ただ

し、Bolinger (1977) によれば、(23b) の話者 A の問いを反復疑問文、すなわち、Who else (did you say) came? (他に誰が来たって (言ったの) ?) という意味に解釈すれば、It was Mary. という応答が可能になるという。この場合には、「他に誰かが来た」という事柄が、すでに話し手と聞き手が共有する前提として生じているため、それを指示する it を主語に立てることが可能となるからであると考えられる。

Bolinger (1977) による「既出の根拠」という概念は、Prince (1986) や Birner and Ward (2006) が開放命題によって説明している前提と同様のことを意味していると考えられる。第 2 章で述べたように、開放命題とは変項を含む命題のことである。Birner and Ward (2006) によれば、次の (24a) の it 分裂文が適切となるのは、(24b) の開放命題が話し手と聞き手が共有する前提として存在している場面である。

- (24) a. It was a red wool sweater that I bought.
 b. I BOUGHT X. (Birner and Ward 2006: 294)

(24a) の it 分裂文で焦点化されている a red wool sweater は、(24b) の開放命題における変項 x の値を指定している。すなわち、(24a) の it 分裂文は「話者が何かを買った」という事柄が話し手と聞き手が共有する前提として存在していない場面では不適切である。Prince (1986) や Birner and Ward (2006) は、it 分裂文の主語 it が前方照応的であるとまで述べているわけではない。しかし、開放命題が前提として存在している場面において it 分裂文が適切となるのであれば、主語 it がその前提を指示していると考えるのは自然であるように思われる。

さらに、it is that 節構文には、単独では解釈できず、談話冒頭で用いることができないという特性がある (Declerck (1992) 、Otake (2002) 、大竹 (2009) 参照)。例として、大竹 (2009) が挙げている次の (25) を見てみよう。

- (25) a. Oh! {I have no money /*It is that I have no money}.
 b. Hi! {I'm back /*It's that I'm back}.
 c. [土筆が顔を出しているのを見て]
 {Spring has come /*It is that spring has come}.
 d. [話し手が脚を搔きながら]
 {I was bitten by a mosquito /*It is that I was bitten by a mosquito}.
 (大竹 2009: 49)

(25a) の Oh! や (25b) の Hi! は、これらの例が談話冒頭であることを示してい

る。(25a,b) に加え、(25c,d) のように非言語的文脈が与えられている場合であっても、それが話題となっていなければ *it is that* 節構文を用いることはできない。このことは、*it* 分裂文の主語 *it* と同様に、*it is that* 節構文の主語 *it* も前方照応的であることを示していると言える。

3.3.2 *it is that* 節構文と *it* 分裂文の類似点

本節では、*it is that* 節構文を *it* 分裂文の変種であると分析するにあたり、両者の類似性を示す。まず、3.2.3 節で紹介したことだが、次の (26) のように、*it is that* 節構文はどのような事柄に対して理由を提示しているのかを明示するために、*that* 節をさらに後続させることが可能である。

(26) It was that he didn't have the money that he didn't take the plunge.

(Bolinger 1972: 35)

2 番目の *that* 節は、*it* 分裂文における前提要素に相当すると考えられる。Bolinger (1972) は (26) の例を「かなり正常である (reasonably normal)」と判断している。⁶ さらに、Delahunty (1981) は次の (27) の実例を挙げている。

(27) I wonder if it was that they hadn't room enough for them up in the house
that they put them out here in the woods?

(E. Somerville and M. Ross, *The Real Charlotte*)

(Delahunty 1981: 182)

(27) においても、(26) と同様に、*it is that* 節構文がどのような事柄に対して理由を提示しているのかを明示するために、*that* 節がさらに後続している。また、Declerck (1992) は次の (28) の例を挙げている。

(28) How is it possible that she has such a grip on the boy? ?Is it that he is infatuated with her that (is the reason why) she has so much power over him?

(Declerck 1992: 217)

Declerck は (28) の例について、「ややぎこちないが、完全に非文法的という

⁶ *it is that* 節構文に理由を提示する機能があるからといって、主語の *it* が単に *the reason* の意味であると考えすることはできない。それは、次の (i) に示すように、*The reason is that ...* の場合は *that* 節をさらに後続させることが不可能だからである。

(i) * *The reason was that he didn't have the money that he didn't take the plunge.*

(Bolinger 1972: 37, fn.15)

わけではない (rather awkward, but not quite ungrammatical) 」と判断している。(26)-(28) は、it 分裂文と同様に、it is that 節構文も前提要素を明示することができるということを示している。

次の (29) に示すように、it 分裂文においては、前提要素が談話に既に登場している事柄である場合、すなわち stressed focus *it*-cleft (Prince 1978) の場合には、前提要素がしばしば省略される。

- (29) a. A: Did you turn the air-conditioning off?
B: No, it was Kim. (Birner and Ward 2006: 294)
- b. A: Who said that?
B: It was Bill (who said that). (Declerck and Seki 1990: 15)

例えば、(29a) において、話者 B は No, it was Kim who turned the air-conditioning off. と発話することも可能であるはずである。しかし、who turned the air-conditioning off の部分は談話に既に登場しているため、省略されている。言い換えれば、明示せずとも聞き手には理解が可能であり、省略しなければ冗長な文になってしまうということである。(29b) に関しても同様である。実際、Declerck and Seki (1990) は次の (30) に疑問符を付けている。

- (30) ?If anyone can do it, it's John who can do it. (Declerck and Seki 1990: 26)

Declerck and Seki (1990) によれば、(30) は非文法的ではないが、やや容認性が低いという。Declerck and Seki (1990) は、Grice (1975) に基づき、(30) の容認性が低いのは「量の確率 (the maxim of quantity)」と「様態の確率 (the maxim of manner)」に違反しているからであると分析している。Declerck (1992) が、上記 (28) の例に関して「ややぎこちない」と述べていることも、(30) の容認度が低いことに関係していると思われる。つまり、it 分裂文の前提要素が談話に既出の事柄である場合に省略されるのと同様に、it is that 節構文の前提要素も談話に既出であり、明示せずとも聞き手には理解が可能なので、省略するほうが冗長な文にならないということである。⁷

次に、Koops (2007) によれば、not や just などをつかわない It is that ... という文が単独で用いられることは稀であると報告している。ただし、It is not that ... に It is that ... が後続する例は散見されると述べている。このことは、Bolinger

⁷ あるいは、It is that S₁ that S₂ という形は、文法的には可能であっても、that 節が 2 つ並ぶために据わりが悪いと感じられる可能性もある。

(1977) が挙げている次の (31) の例と関係があると思われる。

- (31) a. ?It's that he's a Republican that I find so objectionable.
b. It isn't that he's a Republican that I find so objectionable.
c. It's just (only, merely, simply) that he's a Republican that I find so objectionable. (Bolinger 1977: 67)

(31a-c) は、いずれも *that* 節を焦点要素に持つ *it* 分裂文である。*not* や *just*などを伴う (31b,c) は問題がないが、それらを伴わない (31a) は容認性が低いという。Bolinger (1977) には詳細な説明がなく、(31a) の容認性が低い理由は定かではないが、このことも *it* 分裂文と *it is that* 節構文の類似性を示している。

最後に、第 2 章にて、*it* 分裂文が総記的含意を持つことを示した。*it is that* 節構文にも総記的含意があるかどうかを示すのは困難ではあるが、次の (32) を見てみよう。

- (32) a. It was only that I felt keen to avoid, as they say, a misunderstanding. (TMC)
b. It's just that lately the laughs come kind of hard. (TMC)
c. "It's not only that we've picked up a lot of the top brains," said Police General Chamras Mandukananda. (TMC)
d. "It's not just that we're afraid Florida doesn't care enough about children," says Pat Stripling, 60, head of Grandparents Raising Grandchildren in Miami, who is lobbying for juvenile-justice reform this spring. (TMC)
e. It's also that the odds of a movie of Troy's scope making money have never been longer. (TMC)
f. It is partly that the teachers were asking for a depth of cataloguing, a level of retrieval, that is very expensive. (TMC)

(32a,b) では *only* と *just* によって、総記的含意が明示化されていると考えられる。(31c-f) では、*not only*, *not just*, *also*, *partly* によって、*that* 節の内容が変項を指定する値の集合の一部に過ぎないことを示している。したがって、*it is that* 節構文も *it* 分裂文と同様に総記的含意を持つと考えることは可能である。

3.3.3 *it is that* 節構文と *it* 分裂文の相違点

本節では、*it is that* 節構文と *it* 分裂文の相違点を示す。第 2 章で紹介したよ

うに、Prince (1978) は、it 分裂文を stressed focus *it*-cleft と informative presupposition *it*-cleft の 2 種類に分類している。次の (33) を見てみよう。

- (33) a. ‘... So I learned to sew books. They’re really good books. It’s just the covers that are rotten.’ (S. Terkel, *Working*)
(Prince 1978: 896)
- b. ##‘It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1926, in a somewhat shocking movie for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.’ (PB)
(Prince 1978: 898)

(33a) は stressed focus *it*-cleft の例である。stressed focus *it*-cleft の場合、前提要素の内容は前の文脈に既出であり、情報的な重要性が低い。(33b) は、informative presupposition *it*-cleft の例である。informative presupposition *it*-cleft の場合、前提要素は文脈に既出の事柄ではなく、情報的な重要度が高い。また、informative presupposition *it*-cleft は、(33b) のように談話冒頭でも用いられる。つまり、it 分裂文の前提要素は、話し手が知っている事柄であればよく、聞き手も知っている事柄である必要はない。このことから、Prince (1978) は、it 分裂文の前提要素は、次の (34b) の known information に相当するとしている。

- (34) a. GIVEN INFORMATION: Information which the coöperative speaker may assume is appropriately in the hearer’s consciousness.
- b. KNOWN INFORMATION: Information which the speaker represents as being factual and as already known to certain persons (often not including the hearer). (Prince 1978: 903)

では、it is that 節構文の前提要素の場合はどうだろうか。まず、次の (35) を見てみよう。

- (35) He was shot in his house. — It is that he knew too much.
(Declerck 1992: 209)

Declerck (1992) が挙げている (35) の例に関して、Koops (2007) は、英語母語話者が「文法的ではあるが不自然である (grammatical but unnatural)」と判断する傾向にあることを報告している。筆者のインフォーマントも、(35) は実際の

談話としては不自然であると判断し、代案として次の (36) を提示した。

(36) He was shot in his house. I wonder why. — It is that he knew too much.

(36) の文脈であれば、it is that 節構文を用いることができるという。このことは、it is that 節構文の主語 it が話し手と聞き手が共有する前提を指示することを示していると思われる。(35) のように He was shot in his house. という発話だけでは、「なんらかの理由で彼は自宅で撃たれた」という事柄が話し手と聞き手が共有する前提として生じているという保証はない。しかし、(36) のように I wonder why. という発話があれば、he にあたる人物が自宅で撃たれた理由が話題にのぼることで、「なんらかの理由で彼は自宅で撃たれた」という前提が聞き手の意識にのぼっていることが保証され、話し手と聞き手が共有する前提となる。つまり、(36) の場面において話し手は、次の (37) の開放命題が前提として聞き手の意識にのぼっていると判断しているということである。

(37) He was shot in his house because x.

そして、主語 it が (37) の前提を指示し、その前提における変項 x を指定する値を、焦点要素として that 節に取り立てることが可能となる。すなわち、it is that 節構文は、前提要素が聞き手の意識にのぼっていることが保証される場面でなければ用いることができないと考えられる。したがって、it 分裂文とは異なり、it is that 節構文の前提要素は (34) における given information に相当すると推察される。

3.3.4 it is that 節構文の分析

本節では、ここまでの議論を踏まえ、3.3.1 節で示した Bolinger (1977) による it 分裂文の分析を it is that 節構文へと応用し、分析を試みる。

まず、次の (38) を見てみよう。(38) は男性と女性が言い争いをしている場面であり、その争点は女性が男性のことを嫌っている理由である。

(38) ‘You hate me because I have the cash, you hate me because I’m not tied to a counter in a shop or slaving down the mines for it. [...]’
[...]
‘It’s not because you’re loaded that I worry after you,’ she shouted.
‘It’s that I think you’re gay! [...]’ (BNC)

女性が男性のことを嫌っている理由が話題になっていることに加え、*It's not because* の文に続いて *it is that* 節構文が用いられている。このことから、*it is that* 節構文が理由を提示していることがわかる。男性は「自分が金持ちであるという理由で女性に嫌われている」と考えているが、女性は男性が金持ちだからという理由で男性のことを嫌っているわけではない。つまり、男性と女性の認識には相違点がある。したがって、女性と男性は、その相違点を変項とする次の (39) の命題を前提として共有している。

(39) The woman hates the man because x.

そして、*It's that I think you're gay!* という文の主語 *it* が (39) の前提を指示し、その前提に含まれる変項 *x* を指定する値が焦点要素として *that* 節内に取り立てられている。

続いて、次の (40) の例を見てみよう。(40) は Terry がドレスを試着し、Ellie がその姿を見て意見を述べている場面である。

(40) Unzipping the long bag, Terry hung the white frothy dress on the outside of the wardrobe then stared at it depressingly.
'It makes me look like a cake!' she pronounced dramatically.
'Well, put it on and let me see.'
With a total lack of enthusiasm, Terry stripped down to her bra and pants, and climbed apathetically into the dress.
'There! You see? It's awful!'
Leaning back against the wall, her arms folded, Ellie stared at it critically.
'It isn't that the dress is awful,' she finally pronounced.
'It's that it doesn't suit you. [...]' (BNC)

鞆から取り出したドレスを見ながらがっかりしている Terry の様子や、*It makes me look like a cake!* という発言などから、Terry はドレスを気に入っていないということがうかがえる。そして、ドレスを着た自分の姿を Ellie に見せ、*It's awful!* と発言する。つまり、Terry は「ドレスがひどいという理由で、自分のドレス姿がひどい」と考えている。しかし、その様子を見ている Ellie は「ドレスそのものがひどい」とは思っておらず、二人の認識には相違点がある。したがって、Terry と Ellie はその相違点を変項 *x* とする次の (41) の命題を前提として共有している。

(41) Terry looks awful because x.

まず、Ellie は *It isn't that the dress is awful.* と発話することで、(41) における変項 x を指定する値が、「ドレスがひどいこと」ではないということを伝えている。さらに、*It's that it doesn't suit you.* という発話により、変項 x を指定する値が、「そのドレスが Terry には似合わないこと」であるということを伝えている。

さらに、次の (42) を見てみよう。(42) は、主人公である少女の父親と、主人公の恋人の Adam がバスケットボールをしに出かけ、Adam が主人公のもとに帰ってきた場面である。

(42) Adam was covered with a sheen of sweat and looking a little dazed.

“What happened?” I asked. “Did the old man whoop you?”

Adam shook his head and nodded at the same time.

“Well, yes, but it's not that. I got stung by a bee on my palm while we were playing. [...]”
(G. Forman, *if i stay*)

(42) における *Well, yes, but it's not that.* という文は、文代用形の *that* を含んでいる。⁸ この文の *that* の内容を補えば、*Well, yes, but it's not that the old man whooped me.* となるだろう。このような例も、理由を提示する *it is that* 節構文として分析することが可能である。Adam が汗にまみれ、少しぼうっとしている様子を見た主人公は、*What happened?* や *Did the old man whoop you?* という質問を投げかけ、Adam の様子を話題にする。しかし、Adam の様子がおかしい原因は「主人公の父親が Adam を追い立てたこと」ではないため、主人公と Adam の認識には相違点がある。したがって、主人公と Adam は、その相違点を変項とする次の (43) の命題を前提として共有している。

⁸ 佐藤 (2015b) においては、この *that* を補文標識 *that* であると見なしていた。しかし、Declerck (1991) は、次の (ii) における下線部の *that* は文代用形であると述べている。

(ii) I've been sitting here all evening and none of those youngsters has invited me to dance. – I suppose they only invite girls they already know. -No, it's not that. It's that I'm not pretty enough.
(Declerck 1992: 209)

つまり、(ii) において、*that* は二重下線部の要素を指示しているということになる。このことは、*it is that* 節構文の補文標識 *that* が *because* として機能するという Bolinger (1972) の主張にとって問題となる。*it is that* 節構文が理由を提示することができるのは、補文標識 *that* が *because* として機能するからではなく、理由を提示していることが推論によって理解可能だからであると考えべきだろう。つまり、3.2.1 節で述べたように、次の (iii) が、*I couldn't buy it because I didn't have the money.* の意味に解釈されるのと同様の仕組みによって、*it is that* 節構文が理由を提示していると解釈されると考えるべきである。

(iii) I couldn't buy it. I didn't have the money.
(Bolinger 1972: 37, fn.14)

- (43) Adam is covered with a sheen of sweat and looking a little dazed
because x.

主人公の問いかけに対して、Adam は、Well, yes, but it's not that. と発話する。it は (43) の前提を指示し、「主人公の父親が Adam を追い立てたこと」が (43) の前提に含まれる変項 x を指定する値ではないと述べている。ただし、(43) の変項を指定する真の値は、it is that 節構文ではなく、I got stung by a bee on my palm while we were playing. という文によって示されている。(42) の例において重要なのは、二重下線で示した部分である。主人公に Did the old man whoop you? と問いかけられた Adam は、首を横に振りながらうなずいている。首を横に振るという行為は、(43) の変項を指定する値が「主人公の父親が Adam を追い立てたこと」ではないということを伝える行為である。それに対して、うなずくという行為は、「主人公の父親が Adam を追い立てたこと」が真実であるということを示す行為である。つまり、Adam は、「主人公の父親が Adam を追い立てたことは事実だが、自分の様子がおかしいのはそのことが理由ではない」ということを伝えるために、首を横にふりながらうなずいていると考えられる。

3.3.5 大竹 (2009) と本研究の分析の比較

本節では、これまでに示した本研究の分析と、大竹 (2009) の分析を比較する。大竹 (2009: 65-66) は、it is that 節構文の基本的意味を、「先行情報が話し手の知識にすでに獲得されていることを指示表現 it で積極的に表示したうえで、その情報を自分の持ち合わせている知識と関連付けて同定し、解釈すること」であると説明している。例として、次の (44) を見てみよう。

- (44) I can't eat the chicken. It's not that I can't eat it, it's just that I've got a piece of gum in my mouth and I don't know what to do with it.

(The Guardian, 2002/09/02)

(大竹 2009: 66)

大竹 (2009) は、(44) に対して、次の (45) のように説明している。

- (45) つまり、“I can't eat the chicken”(「私はその鶏肉を今食べられません」) と発した話し手は、すぐにその発話が聞き手にあいまいに解釈されたり、誤って解釈される可能性を予測し、「話し手がその鶏肉を食べることができない」という情報は「話し手が鶏肉を食べ物として日常的

に好まない」という事情とは結びついて解釈されないことを *It is not that* 節構文で表現する。次いで、*It is that* 節構文で「話し手がその鶏肉を食べることができない」という冒頭の情報が、実は「話し手の口の中にガムがあり、それをどうしたらよいかわからない」という情報と結びついているに過ぎないことを話し手が断定するという情報伝達の構図をとっている。このように *It is that* 節構文は先行情報が話し手の知識にすでに獲得されていることを指示表現 *it* で積極的に表示したうえで解釈を与える。そのため先行することがらの聞き手には容易には知りたい心情や事の内実を披瀝する場面で多用される。

(大竹 2009: 66-67)

(45) の説明から、大竹 (2009) は、*it is that* 節構文の主語 *it* は、先行文脈そのものを指示していると考えていることがわかる。例えば、(44) であれば、*it* は前の文脈の *I can't eat the chicken.* という文を指示しているということになるだろう。

本研究の主張に基づいて、(44) を分析してみよう。(44) において話し手は、「今はその鶏肉を食べることができない」という意味で *I can't eat the chicken.* と発話したものの、「鶏肉を食べないので、今はその鶏肉を食べることができない」と聞き手が解釈する可能性があることに気づいたと理解できる。すなわち、話し手と聞き手の間に、次の (46) の前提が生じていると話し手は考えている。

(46) The speaker can't eat the chicken because X.

it is that 節構文の主語 *it* は (46) の前提を指示し、変項 *x* を指定する値が「私が鶏肉を食べられないこと」ではなく、「口にガムが入っていること」であることを伝えている。

また、3.3.1 節で述べたように、大竹 (2009) によれば、*it is that* 節構文は言語的文脈を必要とするため、次の (47a,b) のような談話冒頭や、(47c,d) のように非言語的文脈しか与えられていない場面では、*it is that* 節構文を用いることができない。

- (47) a. Oh! {I have no money /*It is that I have no money}.
- b. Hi! {I'm back /*It's that I'm back}.
- c. [土筆が顔を出しているのを見て]
 {Spring has come /*It is that spring has come}.

d. [話し手が脚を搔きながら]

{I was bitten by a mosquito /*It is that I was bitten by a mosquito}.

(大竹 2009: 49)

大竹 (2009) に基づけば、(47) において *it is that* 節構文を用いることができないのは、*it* が指示する言語的文脈が存在しないからであると説明される。一方、本研究の主張では、*it* が指示する変項を含む前提が存在しないために *it is that* 節構文を用いることができないという説明になる。

3.4 さらに考察

本節では、これまでに示した本研究の主張に基づき、先行研究で示されている *it is that* 節構文に関わる問題について考察する。

本研究は、*it is that* 節構文の主語 *it* は話し手と聞き手が共有する前提を指示すると主張した。一方、Declerck (1992) は主語 *it* が指示対象を持たない「虚辞」とであると主張している。Declerck は、*it is that* 節構文の主語 *it* が指示対象を持たない「虚辞」である証拠として、次の (48) に示す *It is because ...* との違いを挙げている。

- (48) a. Nobody has invited me to dance. It/this/that is because I am not pretty enough.
b. Nobody has invited me to dance. It/*this/*that is that I am not pretty enough.
(Declerck 1992: 209)

(48a) のように、*It is because ...* であれば、主語は *it* だけでなく *this* や *that* が可能であるが、(48b) のように、*it is that* 節構文では *it* しか許されない。この現象をどのように説明すればよいだろうか。

3.3.2 節で示したように、*it is that* 節構文は *It is that S₁ that S₂* という形が可能である。次の (49) に示すように、*It is because ...* も同様の形が可能である。

- (49) It's because you stood up for yourself that you were sacked.
(Huddleston & Pullum 2002: 1418)

さらに、次の (50) の例を見てみよう。

- (50) We drank Pepsi out of these old-fashioned bottles that Dad had found at some ancient country store, and I swear they tasted better than the regular

kind. Maybe it was because it was so hot, or that the party was so last minute, or maybe because everything tastes better on the grill, but it was one of those meals that you know you'll remember. (G. Forman, *if i stay*)

(50) では、because it was so hot と that the party was so last minute が、1 つの it was を共有している。つまり、It was because ... の文と it is that 節構文が、一つの it を共有しているということである。また、3.3.4 節で分析した次の (51) や、次の (52) のような例に関しても同様である。

(51) ‘You hate me because I have the cash, you hate me because I’m not tied to a counter in a shop or slaving down the mines for it. [...]’
[...]

‘It’s not because you’re loaded that I worry after you,’ she shouted.

‘It’s that I think you’re gay! [...]’ (BNC)

(52) Perhaps it’s because the lyrical, jazz-inflected animated special A Charlie Brown Christmas remains Yuletide TV’s high point after 34 years. Perhaps it’s because the snowscapes of Schulz’s youth in Minnesota, America’s Scandinavia, were the most evocative setting for his wry, unsentimental, slightly Bergmanesque take on childhood’s pleasures and cruelties — a season of chilly beauty, ice skating and snowballs in the back of the head. Or perhaps it is just that his protagonist, persistent Everyloser Charlie Brown, has for nearly 50 years appeared to suffer from seasonal affective disorder. (TMC)

(51) と (52) では、because 節と that 節が 1 つの it を共有しているわけではないが、it is because の文と it is that 節構文が明らかに対応しているため、それらが別の it を有していると考えるのは適切ではない。(49)-(52) を踏まえれば、It is because ... の主語 it は指示対象を持たない「虚辞」ではなく、it is that 節構文の it と同様、話し手と聞き手が共有している前提を指示していると考えられるべきである。

It is because ... の it は、It is because S₁ that S₂ という形でない限りは、指示詞の it である可能性も残る。その場合には、次に述べる this/that is because ... と同様の分析が可能である。it (指示詞) /this/that is because ... における it/this/that は直前の文脈、例えば、(48a) であれば Nobody has invited me to dance. を指示している。*this/*that is that ... が許されないのに対し、this/that is because ... が許されるのは、後者の場合は because が存在するため、this/that が指示する直前

の文脈と because に続く文が、結果と理由の関係を結ぶことができるからである。*this/*that is that ... が許されないのは、this/that が指示する直前の文脈と that 節が、コピュラの be によって結ばれてしまうからである。すなわち、(48b) であれば、That nobody has invited me to dance is that I am not pretty enough. という解釈になってしまうからであると考えられる。このことは、it is that 節構文の it が先行文脈そのものを指示しているとする大竹 (2009) の主張にとって問題となるだろう。

最後に、Ikarashi (2014) によれば、it is that 節構文は聞き手にとって既知の情報を提示することはできない。次の (53) を見てみよう。

(53) A: The sun is rising.

B: *It's (just) that the earth is turning. (Ikarashi 2014: 166)

「太陽が昇っている」という話者 A の発話に対し、話者 B が「地球がまわっているからだ」という理由を it is that 節構文を用いて提示することはできないという。ただし、話者 A が「太陽が昇るのは太陽が動いているからだ」と考えている人物であることを話者 B が知っているという状況であれば、it is that 節構文を用いることが可能になるという。このことを、本研究の主張に基づいて分析してみよう。

「太陽が昇っているのは地球がまわっているからだ」という事柄は、周知の事実であるため、聞き手もそのことを知っていると考えるのが普通である。つまり、話し手と聞き手は、次の (54) の前提を共有していると考えられる。

(54) The sun is rising because the earth is turning.

話し手と聞き手の認識には相違点がないため、(54) の前提には変項が存在しない。したがって、it is that 節構文が値を指定する変項が存在しないため、it is that 節構文を用いることができないと考えられる。

一方、話者 A が「太陽が昇るのは太陽が動いているからだ」と考えている人物であることを話者 B が知っていれば it is that 節構文を用いることができるのは、話し手と聞き手の認識に相違点が生じるからである。この場合、話し手と聞き手は、その相違点を変項とする次の (55) を前提として共有している。

(55) The sun is rising because x.

(55) の前提であれば、it is that 節構文が値を指定する変項が存在しているため、

it is that 節構文を用いることができ、変項 x を指定する値が「地球がまわっていること」であると述べるのが可能となるのである。

3.5 おわりに

本章では、Bolinger (1977) による it 分裂文の分析に基づき、it is that 節構文を it 分裂文の変種と見なして分析した。具体的には、主に次の (56) のことを示した。

- (56) a. it 分裂文と同様に、it is that 節構文は前提として開放命題を必要とする。主語 it はその前提を指示し、その前提の変項を指定する値を焦点要素として取り立てることで、理由を提示する。
- b. it 分裂文とは異なり、it is that 節構文の it が指示する前提は、聞き手の意識にのぼっていると話し手が判断している事柄、すなわち given information (Prince 1978) に相当する。

第4章 it is that 節構文と「の（だ）」

4.1 はじめに

本章では、第3章で取り扱った *it is that* 節構文と、日本語の「の（だ）」を比較する。大竹 (2009) は、日本語の「の（だ）」に対応する英語の構文の1つとして、*it is that* 節構文を挙げている。このことは、「*it is that* 節構文は分裂文の変種であり、理由を提示する機能がある」と主張している本研究にとって問題となる。ただし、本章では、*It is that ...* と「…のだ」ではなく、否定形である *It is not that ...* と「…のではない」を比較する。次の (1a) は肯定の *it is that* 節構文の例であり、(1b) は否定形の *It is not that ...* の例である。

- (1) a. I've been sitting here all evening and none of those youngsters has invited me to dance. — I suppose they only invite girls they already know. — No, it's not that. It's that I'm not pretty enough.
(Declerck 1992: 209)
- b. It isn't that he lied exactly, but he did tend to exaggerate.
(*Oxford Advanced Learner's Dictionary*).

否定形の *It is not that ...* と「…のではない」を取り扱う理由は、否定形を比較することにより、両者の相違点がより際立つと考えるからである。

本章の目的は、*It is not that ...* を「…のではない」によって解釈することが困難な例を示し、「*it is that* 節構文は分裂文の変種である」という、第3章の主張を支持することである。具体的には、次の (2) のことを主張する。

- (2) *It is not that ...* を「…のではない」によって解釈することが困難な例が存在する。その理由は、*It is not that ...* が命題の真実性を否定しないのに対し、「…のではない」は命題の真実性を否定するからである。

さらに、(2) を踏まえたうえで、*it is that* 節構文はモダリティであると主張している八木 (2019) を批判的に検討する。

4.2 大竹 (2009) による *it is that* 節構文と「の（だ）」の分析

まず、本節では大竹 (2009) による *it is that* 節構文と「の（だ）」の分析を概観する。大竹 (2009) は、「の（だ）」を『知覚 (*perception*) 領域に関わる「の（だ）」』と『認識 (*cognition*) 領域に関わる「の（だ）」』の2つに分類している。次の (3a,b) は、大竹 (2009) が『知覚領域に関わる「の（だ）」』

とする例である。

- (3) a. まもなく、川に出た。川は真赤な色をしている。これは、高山の土が水に押し流されているのである。
(松本清張『波の塔』)(田野村 1993)
(大竹 2009: 34)
- b. 「あの音は何でしょう。」
「庭とすれすれの所を小田急線が走っているんです。」
(松本清張『雑草群落』)(田野村 1993)
(大竹 2009: 34)

大竹 (2009: 34) は、『知覚領域に関わる「の（だ）」』は、「知覚に基づく具体的な事象を叙述する」と述べている。

次の (4a,b) は、『認識領域に関わる「の（だ）」』の例である。

- (4) a. 「さう考へるのは、あの辺の雪を知らないものの想像で、事実は決して困らないのです。」
(野上弥生子『真知子』)(田野村 1993)
(大竹 2009: 34)
- b. アフリカの原始生活をする部族の中には、蠅やゴキブリを食べる種族もあるが、それは、伝染病の媒体であることを知らずに、抵抗力の強さにまかせて、習慣的に食べているのである。
(樋口清之『食物と日本人』)
(大竹 2009: 34)

大竹 (2009: 34) によれば、『認識領域に関わる「の（だ）」』は、「認識に基づく抽象的な命題を叙述する」という。

大竹 (2009) は、後者の『認識領域に関わる「の（だ）」』に対応する構文として、*it is that* 節構文を挙げている。次の (5) を見てみよう。(5b) は、大竹 (2009) による (5a) の対訳である。

- (5) a. “But why after seeing Skip did you not want to help him? Especially in light of what’s been uncovered about Dr. Smith.”
“It’s not that I didn’t want to help him, Mrs. Reardon. It’s that I can’t help him.”
(M. H. Clark, *Let Me Call You Sweetheart*)
(大竹 2009: 44)

- b. 「だけど、Skip に会った後、彼のことを助けたいと思わなかったの？ Dr. Smith のことがわかっていたのなら、なおさらよ」
 「Mrs. Reardon、彼のことを助けたくなかったんじゃない。私には助けることができないんだ。」 (大竹 2009: 44)

(5a) とその対訳の (5b) を比較してみると、たしかに (5b) は (5a) の解釈として適切であるように見える。

次に、大竹 (2009) による It is not that ... の分析を紹介する。大竹 (2009) によれば、It is not that ... の機能は、先行する事柄に関する聞き手の誤った解釈を話し手が予測し、否定することである。次の (6) と (7) を見てみよう。

- (6) a. My father was actually the chairman of the local Conservative Association, so, as you can imagine, he had pretty definite view and rather strong political ambitions. It's not that he was lacking in compassion for other people at all — he was actually a very nice, kind man.
 (The Times Magazine, 1994/2/5)
 (大竹 2009: 183)
- b. 私の父は実際に地方の保守党議長だったので、ご想像の通り、定見とかなり強い政治的野心がありました。父は他人に対する情けを全く欠いていたのではありません—父は実際にとってもやさしく親切な人でした) (大竹 2009: 184)
- (7) a. News that does not make the heart sing: the Victoria & Albert Museum is to dedicate an exhibition to Kylie Minogue, featuring 200 costumes and accessories. It is not that I don't think that fashion can also be art. But Kylie's clothes? Cute and peachy as her bottom undoubtedly is, she is not, and never has been, at the cutting edge of design.
 (The Observer, 2006/10/29)
 (大竹 2009: 184)
- b. 胸を高鳴らせないニュース: Victoria & Albert Museum が 200 点の衣装とアクセサリーを目玉とする Kylie Minogue の展示会を開催する。私はファッションも芸術になり得ると思わないのではない。でも Kylie の衣装でしょう？彼女のズボンは確かに可憐ですてきだけれども、彼女は現在も、そしてこれまでもデザインの最先端ではないのだ) (大竹 2009: 184.)

大竹 (2009: 184) によれば、(6a) の It is not that ... は、「父親が政治家である

という情報から、聞き手が父親を冷淡な思いやりのない人間であると解釈する可能性を予め打ち消している」。(7a) の *It is not that ...* は、「あるアパレルメーカーの展示会開催が胸を高鳴らせないニュースであると伝える話し手の言葉から、ファッションが芸術にもなり得ると話し手が考えていないと聞き手が解釈するのを見込んで否定している」。また、(6b) および (7b) から明らかなように、大竹 (2009) は *It is not that ...* を「…のではない」を用いて解釈することで、両者の類似性を指摘している。

ただし、重要なことは、大竹 (2009) が *It is not that ...* と「…のではない」の使用条件が異なることも指摘しているということである。まず、次の (8a) のように、「…のではない」は話し手以外の人物が提示した事柄を受けることができる。一方、(8b) のように、*It is not that ...* は話し手以外の人物が提示したことがらを受けることはできない。

- (8) a. [B がアイスクリームに手をつけない様子を見た A の発話]
 A: アイスクリームは嫌いなんですか？
 B: いえ、嫌いなんじゃありません。ただ減量中なんです。
 (大竹 2009: 198)
- b. A: Do you hate ice cream?
 B: No. {I don't hate ice cream / *It's not that I hate ice cream /
 *Not that I hate ice cream}. I'm just dieting.¹ (ibid.)

次に、(9) のように、「…のではない」は非言語的文脈を受けることができる。一方、(10) のように、*It is not that ...* は非言語的文脈を受けることはできない。

- (9) a. [落書きを見つけた母親が話し手に視線を向ける場面]
 僕が書いたんじゃないよ。 (大竹 2009: 198)

¹ (8b) や、これ以降のいくつかの例では、*Not that ...* という、*It is not that ...* から *It is ...* を省略したかのように見える文が現れている。しかし、Declerck (1992) は、*Not that ...* の使用が可能であっても、*It is not that ...* が使用できない場合があることを指摘している。次の (i-a) の文脈では *Not that ...* の使用は可能であるが、(i-b) に示すように、*It is not that ...* の使用は不適切である。

(i) a. I shan't ever vote socialist after this. Not that I ever did.
 b. ! I shan't ever vote socialist after this. It is not that I ever did.
It is ... が存在しないことはわずかな違いであるようにも思えるが、筆者のインフォーマントも (i-b) を不自然であると判断している。Declerck (1992) は、(i-b) が不自然なのは、‘The reason why I shan't ever vote socialist after this is not that I ever did.’ と解釈されるからであると分析している。4.3.1 節で紹介する Declerck (1992) による *it is that* 節構文の分析もあわせて参照されたい。*Not that ...* は「虚辞」の *it* を含まないので、本研究では取り扱わないが、*It is not that ...* / *Not that ...* と「…のではない」の比較については、大竹 (2009) に詳しい。

- b. [お化け屋敷に入るときに身震いする様子を聞き手に見つかってしまう場面]
 怖いんじゃないよ。寒くてちょっと震えただけだよ。 (*ibid.*)
- (10) a. [落書きを見つけた母親が話し手に視線を向ける場面]
 {I didn't do it / *It's not that I did it / *Not that I did it}.
 (大竹 2009: 199)
- b. [お化け屋敷に入るときに身震いする様子を聞き手に見つかってしまう場面]
 {I'm not terrified / *It's not that I'm terrified /
 *Not that I'm terrified}. (*ibid.*)

最後に、次の (11) のように、「…のではない」には禁止を表す用法がある。しかし、(12) のように、It is not that ... には禁止を表す用法はない。

- (11) a. 変なことを言うんじゃない。
 b. 最後まで気を抜くんじゃないよ。 (田野村 1990: 88)
 (大竹 2009: 199)
- (12) A: You like her, eh?
 B: {Don't be silly / *It's not that you're silly / *Not that you're silly}!
 (大竹 2009: 199)

4.3 提案

本節では、まず次の 4.3.1 節にて、It is not that ... を「…のではない」によって解釈することが困難な例を示すとともに、it is that 節構文を指定文であるとする Declerck (1992) の主張を紹介する。4.3.2 節では、「…のではない」に命題の真実性を否定する働きがあることを示す。4.3.3 節では、「…のではない」によって解釈することが困難な例を、第 3 章の主張に基づいて分析する。

4.3.1 it is that 節構文は指定文である

4.2 節で紹介したように、大竹 (2009) は It is not that ... と「…のではない」の類似性を示すとともに、それらの相違点についても指摘している。しかし、It is not that ... と「…のではない」の相違点は、大竹 (2009) が紹介しているものだけではない。まず、Erdmann (1990) が挙げている、次の (13) を見てみよう。

- (13) I shall not talk about the orphanage: again, fairness is probably impossible.

It was not that I was beaten (though I was) or starved (though I was always hungry); it was just that nobody loved me. (I. Murdoch, *a word child*)
(Erdmann 1990: 153)

(13) は、話し手が自らの悲惨な孤児院時代について述べている場面である。(13) の下線部を「…のではない」によって解釈すると、およそ次の (14) のようになるだろう。

(14) *私は体罰を受けていたのではなかったし（受けていたが）、飢えていたのでもなかった（いつも空腹だったが）。 (拙訳)

(14) を見てみると、「体罰を受けていたのではなかった」と「受けていた」、「飢えていたのでもなかった」と「いつも空腹だった」がそれぞれ矛盾しているように感じられる。これはどのような理由によるものだろうか。

Declerck (1992) は、*it is that* 節構文は指定文 (specificational sentence) であって、措定文 (predicational sentence) ではないと述べている。まず、Declerck (1992) の説明をもとに、指定文と措定文について概観しておきたい。まずは、指定文の例として、次の (15) を見てみよう。

(15) A: Who's the committee's chairman?
B: Mr. Burns is the chairman. (Declerck 1992: 210)

(15) の B の発話における Mr. Burns は、*the x who is the committee's chairman* における変項 x の値を指定している。この B の発話は、*The following person is the chairman: Mr. Burns.* と等価である。つまり、「誰が会長であるか」というと、Mr. Burns である」という意味である。このように、変項の値を指定する文を指定文と呼ぶ。また、指定文には、*it* 分裂文に置き換えることが可能であるという特徴がある。たとえば、(15) における B の発話は *It is Mr. Burns who is the chairman.* もしくは縮約 *it* 分裂文の *It is Mr. Burns.* と置き換えられる。

次に、措定文の例として、次の (16) を見てみよう。

(16) The house is beautiful. (Declerck 1992: 210)

(16) の文は変項の値を指定しているのではなく、*the house* の特性を述べている文である。このような文を措定文と呼ぶ。しかし、(16) の文も *the house* もしくは *beautiful* に強勢が置かれれば指定文として解釈される。*the house* に強勢が

置かれれば、It is the house that is beautiful (not e.g. the garden). と解釈される。つまり、「何が美しいかという、（庭ではなく）その家である」という解釈である。beautiful に強勢が置かれれば It is beautiful that the house is (not ugly). と解釈される。つまり、「その家はどのようなかという、（醜いではなく）美しい」という解釈である。

ここで、it is that 節構文は指定文であるという主張に立ち戻る。it is that 節構文が指定文であるとする、否定形である It is not that ... ではどうだろうか。Declerck (1992) は、Delahunty (1990) が挙げている次の (17) をもとに、重要な指摘をしている。

- (17) a. It is not that one fears treachery, though of course one does.
(I. Murdoch, *The Black Prince*)
(Delahunty 1990: 23)
- b. ?One does not fear treachery, though of course one does.
(Delahunty 1990: 23)

it is that 節構文が指定文であるとする、否定形である It is not that ... は、「変項を指定する値が that 節の事柄ではない」ということを示すだけであり、that 節の命題の真実性までは否定しないはずである。(17a) は、「人が裏切りを恐れること」が変項を指定する値ではないということを述べているのであり、「人は裏切りを恐れない」とまで述べているわけではない。このように考えれば、though of course one does と矛盾しないことを説明できる。一方、It is not that ... の例ではない (17b) の場合は、「人は裏切りを恐れない」と解釈され、though of course one does との矛盾が生じるため、容認度が下がるのである。

また、「it is that 節構文は指定文である」という Declerck (1992) の主張は、第3章における「it is that 節構文は it 分裂文の変種である」という主張を支持する。というのも、指定文を it 分裂文に置き換えられることから明らかなように、it 分裂文は指定文であるからである。

(17) と同様の説明を、上記 (13) にも適用することができる。(13) を次の (18) に再掲する。

- (18) I shall not talk about the orphanage: again, fairness is probably impossible.
It was not that I was beaten (though I was) or starved (though I was always hungry); it was just that nobody loved me. (I. Murdoch, *a word child*)
(Erdmann 1990: 153)

It is not that ... は that 節の事柄の真実性を否定しない。したがって、(18) は「私が虐待を受けていたこと」や「私が飢えていたこと」が変項を指定する値ではないということを述べているのであり、「体罰を受けていなかった」「飢えていなかった」とまで述べているわけではない。だからこそ、though I was や though I was always hungry との矛盾が生じないのである。では、(13)=(18) の解釈として不自然であった (14) を見てみよう。(14) を次の (19) に再掲する。

(19) 私は体罰を受けていたのではなかったし(受けていたが)、飢えていたのでもなかった(いつも空腹だったが)。(拙訳)

(19) において、「体罰を受けていたのではなかった」と「受けていた」、「飢えていたのでもなかった」と「いつも空腹だった」がそれぞれ矛盾しているように感じられるのは、It is not that ... とは異なり、「…のではない」が命題の真実性を否定するからであると考えられる。続く 4.3.2 節では、「…のではない」が命題の真実性を否定しているように感じられる理由を考察する。

4.3.2 「…のではない」は命題の真実性を否定する

野田 (1997) が述べているように、「…のではない」には事態の成立以外の部分を否定の作用域とする働きがある。次の (20) を見てみよう。

- (20) a. 頭が痛いんじゃない。お腹が痛いんだ。
(野田 1997: 108 を一部改変)
b. 頭が痛いんじゃない。眠たいんだ。(野田 1997: 108)

(20a) では、「頭が」と「お腹が」が対比されている。「頭が痛いんじゃない」という文は、「頭が」の部分否定しているものであり、「身体のどこかが痛い」という事態は否定されていない。そして、「お腹が痛いんだ」という文によって、痛いのは「頭」ではなく「お腹」だと述べている。(20b) では、「頭が痛い」と「眠たい」が対比されている。「頭が痛いんじゃない」という文では、「頭が痛い」という部分が否定されているものであり、「身体に何かが起きている」という事態が否定されているわけではない。(20) に加えて、次の (21) のような例も可能だろう。

(21) 頭が痛いんじゃない。頭がかゆいんだ。

(21) では、「痛い」と「かゆい」が対比されている。「頭が痛いんじゃない」

という文では、「痛い」が否定されているのであり、「頭が何らかの状態にある」という事態は否定されていない。

ここで重要なことは、(20) と (21) のいずれの例においても、「頭が痛い」という命題の真実性が否定されているという点である。(20a) であれば、「痛いのは頭ではない」のだから、結果として「頭は痛くない」ということを意味する。(20b) では、「身体に起きているのは頭が痛いということではない」のだから、やはり「頭は痛くない」ということを意味する。(21) では、「頭の状態は痛いという状態ではない」のだから、これもやはり「頭は痛くない」ということを意味する。つまり、「…のではない」は、結果として命題の真実性を否定していると解釈されるのである。

4.3.3 It is not that ... と「…のではない」の比較

ここで再び、4.3.1 節で示した次の (22a) と、その対訳である (22b) に立ち戻ろう。

- (22) a. I shall not talk about the orphanage: again, fairness is probably impossible. It was not that I was beaten (though I was) or starved (though I was always hungry); it was just that nobody loved me.
(I. Murdoch, *a word child*)
(Erdmann 1990: 153)
- b. *私は体罰を受けていたのではなかったし（受けていたが）、飢えていたのでもなかった（いつも空腹だったが）。 (拙訳)

4.3.1 節で述べたように、(22a) は「私が体罰を受けていたこと」や「私が飢えていたこと」を否定しているわけではない。しかし、(22b) の場合はどうだろうか。4.3.2 節で主張したように、「…のではない」は命題の真実性を否定していると解釈される。「私は体罰を受けていたのではなかった」という文は、例えば次の (23) のように解釈されるだろう。

- (23) a. 私は体罰を受けていたのではなかった。教育を受けていたのだ。
b. 私は体罰を受けていたのではなかった。体罰を与えていたのだ。
c. 私は体罰を受けていたのではなかった。大切に扱われていたのだ。

(23) では、下線部がそれぞれ対比されている。(23) のいずれの解釈においても、「私が体罰を受けていた」という命題の真実性そのものが否定されるため、「受

けていた」という部分との矛盾が生じるのである。「飢えていたのでもなかった」についても同様である。

(22a) のような例を解釈する場合、第 3 章で主張した「it is that 節構文は it 分裂文の変種であり、理由を提示する機能がある」という主張に基づいた解釈のほうが適切である。つまり、(22a) は、話し手の孤児院時代が悲惨であったことの理由を述べているという解釈である。具体的には、次の (24) のようになるだろう。

(24) (私の孤児院時代が悲惨だったのは) 私が体罰を受けていたからではなかったし (受けていたが)、飢えていたからでもなかった (いつも空腹だったが)。(拙訳)

(24) は、「体罰を受けていた」ことや「飢えていた」ことが悲惨な孤児院時代の理由ではないことを示しているだけであり、命題の真実性までは否定しない。したがって、「受けていた」や「いつも空腹だった」との矛盾を生じさせることなく解釈できる。

4.4 さらに考察

本節では、4.3.3 節で分析した (22a) の例と同様に、It is not that ...を「…のではない」によって解釈しようとする問題が生じる例を分析していく。

まず、次の (25) を見てみよう。(25) は、姉妹の Ivy が男性といちゃついているところを Rachel が目撃し、Ivy が家族を辱しめていると Rachel が感じている場面である。

(25) “[...] But I was actually thinking that our sister, Ivy, is embarrassing the family. Just look at her.” Rachel gestured with her hand to the two that stood talking.

Mathew grinned. “It’s Ivy being Ivy. If she was not flirting, she would scarcely be acting like herself. And then I would be worried.”

Rachel shook her head. “It’s not that she’s flirting with a man, it’s just that she is flirting with a man who has already promised himself to some other woman.”

(E. Surland, *Between Innocence and Despair*)

(25) の下線部を「…のではない」によって解釈すると、次の (26) のようになる。

- (26) 彼女は男といちゃついているんじゃない。彼女はすでに他の女性に誓いを立てている男といちゃついているのよ。(拙訳)

Mathew の *If she was not flirting, she would scarcely be acting like herself.* という発話からも明らかなように、Ivy は Rachel と Mathew の眼前で男といちゃついている。しかし、(26) の解釈では、「男といちゃついていない」と述べているように感じられるため、「彼女は男といちゃついているんじゃない」という部分と、「彼女はすでに他の女性に誓いを立てている男といちゃついている」という部分が矛盾しているように感じられる。この矛盾を避けるために、第3章の主張に従って (25) を解釈すると、次の (27) のようになる。

- (27) (家族が辱しめられているのは) 彼女が男といちゃついているからじゃない。すでに他の女性に誓いを立てている男といちゃついているからよ。

(27) は、「彼女が男といちゃついている」ということが「家族が辱しめられている」ことの理由ではないということを述べているだけであり、「彼女が男といちゃついている」という命題の真実性は否定していない。したがって、矛盾を生じさせずに解釈することができる。つまり、Rachel の首を横に振るという行為 (*Rachel shook her head.*) は、Ivy が男といちゃついていることを否定しているのではなく、「彼女が男といちゃついていること」が変項を指定する値ではないことを示す行為である。また、Matthew の *It's Ivy being Ivy. If she was not flirting, she would scarcely be acting like herself. And then I would be worried.* という発話から、男性といちゃつくという行為は Ivy らしい行為であることが察せられる。したがって、(27) のように解釈することで、「男といちゃつくこと自体は別に構わないが、すでに他の女性に誓いを立てている男といちゃつくことは許せない」という Rachel の考えも正しく理解できる。

次に、(28) を見てみよう。(28) は、話し手の女性が男性の身軽さに惹きつけられている場面である。

- (28) His grace, his quick eyes, the muscles along his forearms working. [Mostly the way he moved his body. The men she knew seemed cumbrous compared to him.] It wasn't that he hurried. In fact, he didn't hurry at all.²

(R. J. Waller, *The Bridges of Madison Country*)

² (28) において “[]” で括られている部分は、大竹 (2009: 197) においては省略されている部分である。しかし、本研究ではこの部分も理解の助けになると考え、掲載することとした。

(28) の下線部を「…のではない」を用いて解釈すると、次の (29) のようになる。

(29) 彼は急いでいたのではなかった。実際、彼はまったく急いでいなかった。
(拙訳)

(29) の解釈においては、矛盾が生じているということはない。しかし、「彼は急いでいたのではなかった」と「彼はまったく急いでいなかった」は同じような意味であるため、冗長に感じられる。ここでも、第3章の主張に従い、上記 (28) を次の (30) のように解釈してみよう。

(30) (彼が身軽に感じられたのは) 彼が急いでいたからではなかった。実際、彼はまったく急いでいなかった。
(拙訳)

It wasn't that he hurried. という文は、「彼が身軽に感じられた理由が急いでいたということではなかった」ということを示しているだけであり、「彼が急いでいた」という命題の真実性までは否定しない。そこで、さらに *In fact, he didn't hurry at all.* と続けることで、「彼が急いでいた」という命題の真実性をあらためて否定していると考えられる。このことを考慮して (30) のように解釈すれば、2つの文の意味の違いが明らかになり、*In fact, he didn't hurry at all.* という文の存在理由も説明できる。

最後に、第3章の主張であっても解釈が困難な例を見たい。次の (31) は、科学に関するおかしい質問に元科学者である著者が真剣に答える、という内容の本からの例である。(31) は、「地球と地球上のすべてのものが突如回転を止めたにも関わらず、地球を取り巻く大気が速度を保った場合には何が起こるか」という質問に答えている場面である。結果としては、時速 1,000 マイルもの突風が吹くという。著者はその危険性を、Ron White というコメディアンがハリケーンについて述べたことを引用して説明している。

(31) If the Earth stopped and the air didn't, the result would be a sudden thousand-mile-per-hour wind.

[...]

No buildings would be safe; even structures strong enough to survive the winds would be in trouble. As comedian Ron White said about hurricanes,

“It’s not *that* the wind is blowing, it’s *what* the wind is blowing.”

(R. Munroe, *What If?*)

まず、(31) の下線部を「…のではない」を用いて解釈すると、次の (32) のようになる。

(32) 風が吹いているのではない。風が吹き飛ばしているものだ。(拙訳)

(32) の解釈では、「風が吹いている」という命題の真実性が否定されているように感じられる。したがって、時速 1,000 マイルもの突風が吹くと述べているこの場面にはそぐわない。さらに、後半の「風が吹き飛ばしているものだ」という部分との対応を欠いている。しかし、(31) は第 3 章の主張に従って解釈することも困難である。第 3 章の主張に従って解釈すると、次の (33) のようになる。

(33) 風が吹いているからではない。風が吹き飛ばしているものだ。(拙訳)

(33) の解釈も、「風が吹き飛ばしているものだ」という部分との対応を欠いている。これは、(31) において *that the wind is blowing* と *what the wind is blowing* が対応付けられているからである。つまり、*what the wind is blowing* と同様に、*that the wind is blowing* も名詞節として解釈しなければならないということである。たとえば、次の (34) のような解釈が適切であるように思われる。

(34) (危険なのは／問題なのは) 風が吹いていることではない。風が吹き飛ばしているものだ。(拙訳)

しかし、(34) の解釈を、「it is that 節構文は it 分裂文の変種で、理由を提示する機能がある」という本研究の主張に従って導くことはできない。したがって、(31) を it is that 節構文に含めるのであれば、it is that 節構文の機能を拡張する必要がある。例えば、(34) の解釈は、次の (35) の it 分裂文から導き出される。

(35) It’s not whether you win or lose that matters, but how you play the game.
(Huddleston and Pullum 2002: 1418)

したがって、it is that 節構文が理由を提示するのは、結果と理由の関係を推論するのが容易であるという理由によるものであって、文脈によっては理由を提

示する以外の機能を有する可能性があるということである。(31)については、「…のではない」による解釈が困難であることを示すにとどめ、詳細な分析については今後の課題としたい。

4.5 八木 (2019) による主張の問題点

本節では、ここまでの議論を踏まえて、it is that 節構文はモダリティであると主張している八木 (2019) を批判的に検討する。八木 (2019) は、It is that ... を「断定のモダリティ」、It is not that ... を「否定のモダリティ」と呼び、その意味機能を次の (36) のように説明している。

- (36) 事実をありのまま表現する場合には、話し手の認識を言語化する表現としてのモダリティは必要ない。聞き手を前に “You are right.” と言えば話し手の断定を述べているのであり、それ以上に断定しているという合図は不要である。“You may be right.” “You must be right.” “It seems that you are right.” などとは違った断定の意味は十分に伝わる。

だが、会話の流れの中で、相手の誤解を解く必要が生じた場合、「P ではなくて、Q なんだ」という必要が起り得る、それに対応する表現が “it is not P; it is (just) Q” である。 (八木 2019: 156-157)

まず、八木 (2019) がどのような意味で「断定のモダリティ」という言葉を用いているのかを知るために、Curme (1931) が挙げ、八木 (2019) が引用している次の (37) を見てみよう。

- (37) a. He used to grumble at his ill-luck and his small bag. It (=the cause of his ill-luck) was not that he lacked skill with his gun. He was a good shot, but he absolutely disregarded caution in stalking.
(McClure's Magazine, 1925/09)
(Curme 1931: 187)
- b. The queer part of it is Miss Waters didn't seem to be really mean. It (=the cause of her trouble-making) was just that she couldn't mind her own business.
(American Magazine, 1925/09)
(Curme 1931: 187)

Curme (1931) は、It is that ... の it は「状況の it (situation it)」であると述べている。また、(37a,b) からわかるように、Curme (1931) は It is that ... の it に the cause of ... の意味があると分析している。(37a,b) に関して、八木 (2019) は次の (38)

のように述べている。

- (38) しかし、[(37a,b)] を考えると、特に状況の *it* の解釈をする必要はない。*it* には指示対象がなく、ただ *it is that* が *that* 節の内容を断定すると解釈をしても不都合はない。 (八木 2019: 153)

すなわち、八木 (2019) は、「断定のモダリティ」という言葉によって、*It is that ...* は「*that* 節の内容を断定する」と主張していることがわかる。一方、*It is not that ...* は「否定のモダリティ」なのだから、「*that* 節の内容を否定する」と主張していることになる。しかし、本章では、*It is not that ...* と「…のではない」を比較することにより、*It is not that ...* が命題の真実性を否定しないということを示した。つまり、*it is that* 節構文は命題の真偽判断に関与しないということである。このことは、八木 (2019) による「*It is that ...* は断定のモダリティである」という主張にとって問題となるだろう。

さらに、第3章で扱った次の (39) の例も問題となる。

- (39) Adam was covered with a sheen of sweat and looking a little dazed.
“What happened?” I asked. “Did the old man whoop you?”
Adam shook his head and nodded at the same time.
“Well, yes, but it’s not that. I got stung by a bee on my palm while we were playing. [...]” (G. Forman, *if i stay*)

What happened? や *Did the old man whoop you?* と問われた Adam は、「首を横に振りながらうなずく」という行為をしている。つまり、Adam は「主人公の父親が Adam を追い立てた」という命題が変項を指定する値ではないことを示すために首を横に振り、その命題の真実性を肯定するためにうなずいている。(39) の *it’s not that* を「否定のモダリティ」としてしまうと、「首を横に振りながらうなずく」という Adam の行為を説明することができない。

さらに、(38) の説明にあるように、八木 (2019) は *it is that* 節構文の *it* に指示性を認めないという立場をとる。しかし、第3章で述べたように、*it is that* 節構文は前の文脈との繋がりを必要とする構文である。八木 (2019) の主張に従って、*it* に何ら指示性を認めず、なおかつ *It is that ...* の機能を単に「*that* 節の内容を断定する」とした場合、*it is that* 節構文が前の文脈との繋がりを必要とするという事実をどのように説明するのか疑問である。

4.6 おわりに

本章では、It is not that ... を「…のではない」によって解釈することが困難な例を示し、「it is that 節構文は分裂文の変種である」という、本研究第3章の主張を支持した。具体的には、次の (40) のことを主張した。

- (40) It is not that ... を「…のではない」によって解釈することが困難な例が存在する。その理由は、It is not that ... が命題の真実性を否定しないのに対し、「…のではない」は命題の真実性を否定するからである。

さらに、(40) を踏まえたうえで、it is that 節構文はモダリティであると主張している八木 (2019) を批判的に検討した。

第5章 文主語構文と主語位置からの it 外置¹

5.1 はじめに

本章では、文主語構文と主語位置からの it 外置を取り扱う。次の (1a) は文主語構文の例、(1b) は主語位置からの it 外置の例である。

- (1) a. That he hasn't phoned worries me.
b. It worries me that he hasn't phoned.

(Huddleston and Pullum 2002: 1403)

Huddleston and Pullum (2002) によれば、次の (2) に示すように、that 節の内容が新情報である場合は文主語構文は不適切であり、it 外置文を用いなければならない。

(2) 文脈：新聞記事冒頭

- a. It is amazing that the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France.
b. #That the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France is amazing.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

一方、次の (3) に示すように、that 節の内容が談話に既出の情報である場合は、文主語構文と it 外置文のどちらも適切である。

- (3) a. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: It's a miracle that he did it at all.
b. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: That he did it at all is a miracle.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

本章の目的は、主に中右 (1983) による既定性の概念に基づき、次の (4) に示すことを主張することである。

¹ 本章の内容は、佐藤 (2019) に大幅に加筆・修正を加えたものである。

- (4) 文主語構文は、「確定した話題」を叙述することで、前の文脈との結束力を生み出す有標の構文である。したがって、談話冒頭では不適切である。

また、第3章において、次の(5)のように、it is that 節構文が助動詞を伴っている形の例があることを紹介した。

- (5) It may be that Minoan ships were built and repaired here.
(Longman Dictionary of Contemporary English)

本章では、(5) のような例は it is that 節構文ではなく、主語位置からの it 外置の例であると主張する。

5.2 本研究で取り扱わない例

本章の目的は、文主語構文と it 外置文が交代可能な事例を分析することで、文主語構文が有標の構文であるのに対し、it 外置文が無標の構文であることを示すことである。したがって、it 外置文が許されない事例や、文主語構文が許されない事例は取り扱わない。

まず、it 外置文が許されない事例について、次の(6)と(7)を見てみよう。

- (6) a. [That John owns the gun] proves [that Mary is innocent].
b. *It proves [that Mary is innocent] [that John owns the gun].
(Stowell 1981: 214)
- (7) a. [That she survived at all] shows [that she must have been very fit].
b. *It shows [that she must have been very fit] [that she survived at all].
(Huddleston and Pullum 2002: 1406)

(6a)と(7a)では、主語と目的語がどちらも that 節から成っている。このような場合、(6b)と(7b)から明らかなように、主語に it を置いて that 節を外置することはできない。

もう一つ、it 外置文が許されない事例として、次の(8)を見てみよう。

- (8) a. That he is here is the problem.
b. *It is the problem that he is here.
c. It is a problem that he is here. (Williams 1980: 529)

(8a) のように、文主語構文が指定文である場合、(8b) のように主語に *it* を置いて *that* 節を外置文することはできない。(8c) のように、*a problem* であれば措定文として解釈されるので、*it* 外置文が可能である。

次に、文主語構文が許されない場合について、次の (9) と (10) を見てみよう。

- (9) a. That he was wrong is obvious.
b. It is obvious that he was wrong. (Huddleston and Pullum 2002: 961)
- (10) a. *Isn't that he is wrong obvious?
b. Isn't it obvious that he is wrong? (*ibid.*: 962)

(9a,b) のように、平叙文の場合には文主語構文と *it* 外置文のどちらも許される。一方、(10a,b) では疑問倒置が起こっている。このような場合、(10a) のように文主語構文は許されず、(10b) のように主語に *it* を置いて *that* 節を外置しなければならない。

以上のような事例については、本研究では原則として取り扱わないこととする。

5.2 既定性 (中右 (1983))

本節では、まず 5.2.1 節にて中右 (1983) による既定性の概念を紹介する。5.2.2 節では、既定性の概念に基づいて文主語構文および *it* 外置文を分析するとともに、未解決の問題があることを示す。

5.2.1 既定性の概念

中右 (1983) は、既定性の概念によって、文主語構文と *it* 外置文を含む様々な現象の説明を試みている。中右 (1983) における既定性の定義を次の (11) に示す。

- (11) ある事柄の知識 (概念、命題) が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。 (中右 1983: 549)

(11) を踏まえて、まずは文主語構文について見ていこう。次の (12) に示すように、文主語の命題は常に既定的であるという。

(12) 文主語は常に既定的命題から成る。

(中右 1983: 580)

5.1 節で紹介したように、Huddleston and Pullum (2002) は、文主語は新情報ではなく、旧情報でなくてはならないと述べている。これは、文主語は確定した話題であるとする (12) の仮説と一致している。² 文主語が確定した話題であることを示す証拠として、中右 (1983) は主節現象の例を挙げている。中右 (1983) によれば、主節現象は主張の焦点を形作るため、あらかじめ確定した話題である文主語内に生じることとはできない。³ 次の (13) と (14) を見てみよう。

(13) a. *That never in his life has he had to borrow money is true.

b. *That over the entrance should you hand the gargoyle was written in the plans. (Hooper and Thompson 1973: 476)

(中右 1983: 584)

(14) a. It's true that never in his life has he had to borrow money.

b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle. (Hooper and Thompson 1973: 476)

(13) は文主語内に主節現象が生じている例であり、この場合は容認されない。一方、(14) は *that* 節が外置されているため、主節現象が生じていても問題がない。ここで注意すべきことは、文主語の命題は既定的ではあるが、叙実的ではないということである。次の (15) を見てみよう。

(15) a. That Smith had arrived, {which I don't believe / which I doubt very much}, was reported by the UPI. (中右 1983: 585)

b. That he was motivated by pure altruism is a complete myth.

(Huddleston and Pullum 2002: 1405)

(15a) では挿入句 *which I don't believe* もしくは *which I doubt very much* によって、(15b) では述語 *is a complete myth* によって、話し手が文主語の命題の真実性に疑義を唱えている。(15a,b) が矛盾した文にならないということは、話し手は文主語の命題を真実であるととらえているわけではなく、ただその命題が話し手にとって確定した話題として存在しているということを示している。

² Prince (1981, 1992, 1998) によれば、主語位置に新情報を置くことは避けられる傾向がある。このことも、文主語は旧情報でなくてはならないという Huddleston and Pullum (2002) や、文主語は確定した話題であるとする中右 (1983) の主張に関係していると思われる。

³ 主節現象については、Hooper and Thompson (1973) も参照されたい。

よく知られているように、seem などの述語は、文主語構文を許さず、it 外置文の使用を強制する。次の (16) と (17) を見てみよう。

- (16) a. *That he was wrong seems.
b. It seems that he was wrong. (Huddleston and Pullum: 2002: 1368)
- (17) a. *That he was dying turned out.
b. It turned out he was dying. (*ibid.*: 1406)

中右 (1983) は、文主語構文を許さない動詞について、それらの動詞には「叙述機能がなく、提示機能しかない」と仮定することで説明している。中右 (1983) における叙述機能および提示機能の定義は、次の (18) に示すとおりである。

- (18) a. 叙述機能：主語についての属性を叙述する機能
b. 提示機能：ある事態の存在を談話の世界にはじめて持ち込む機能
(中右 1983: 580-583 参照)

そして、次の (19) に示すように、提示の対象になっている命題は外置されなければならない。

- (19) 補文命題が文主語として成り立つのは、それが叙述 (predication) の対象になっているときである。一方、それが提示 (presentation) の対象になっているときには外置されなければならない。
(中右 1983: 581)

したがって、seem のように、it 外置文を強制する動詞は提示機能しか持たないため、that 節は外置されなければならないということになる。また、そのままでは文主語構文を許さない述語であっても、情報量が増えることで叙述機能を持つようになり、文主語構文が可能となる場合がある。次の (20) と (21) を見てみよう。

- (20) a. *That the president has been indicted will be announced.
b. It will be announced that the president has been indicted.
c. That the president has been indicted will not be announced.
(中右 1983: 582)
- (21) a. *That she slipped arsenic into his tea is said.
b. It's said that she slipped arsenic into his tea.

- c. That she slipped arsenic into his tea is said by everybody in the town.
(*ibid.*)

(20a) と (21a) の文主語構文は許されないが、(20c) では not によって、(21c) では by everybody in the town によって情報量が増えることで、述語が叙述機能を持つようになり、文主語構文が可能となっている。

次の (22a) のように文主語構文が不可能であれば、それに対応する it 外置文 (22b) における that 節は非既定的であり、述部には提示機能しかない。一方、(23a) のように文主語構文が可能である場合は、それに対応する it 外置文 (23b) における that 節の既定性や述部の機能は曖昧であるという。

- (22) a. *That he is happy is believed.
b. It is believed that he is happy. (中右 1983: 583)
- (23) a. That he is happy is widely believed.
b. It is widely believed that he is happy. (*ibid.*)

以上のことから、文主語構文および it 外置文を分類すると、下の表 1 のようになるだろう。便宜上、それぞれに①－④の番号を付与した。

表 1 中右 (1983) に基づく文主語構文と it 外置文の分類

構文	文主語の可否	that 節の既定性	述部の機能	例	番号
文主語構文		既定的	叙述	(23a)	①
it 外置文	×	非既定的	提示	(22b)	②
	○	既定的	叙述	(23b)	③
		非既定的	提示		④

5.2.2 既定性に基づく分析

本節では、中右 (1983) の既定性の概念に基づき、文主語構文および it 外置文の分析を試みるとともに、未解決の問題があることを示す。

5.2.2.1 文主語構文が許されない場合

中右 (1983) にしたがって、5.1 節で示した次の (24) を分析してみよう。

- (24) 文脈：新聞記事冒頭
- a. It is amazing that the real problems surrounding NATO's planned

bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France.

- b. #That the real problems surrounding NATO's planned bombing raid on Serbia were never addressed during the marathon peace talks now underway in France is amazing.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

(24) の文脈は新聞記事冒頭であるため、書き手は読み手に対して that 節の内容の真実性を主張しなければならない。したがって、that 節の命題を非既定的命題として提示する it 外置文が適切である。一方、文主語構文は、that 節の内容を確定した話題、すなわち既定的命題として叙述することになり、不適切であると考えられる。(24a) の it 外置文は、表 1 の④に、(24b) の文主語構文は①に該当する。以上のことから、it 外置文④が使用される理由は明らかである。つまり、文主語構文①では that 節の命題を既定的命題として提示することになってしまうため、それを避けて it 外置文④を用いることで、that 節の命題を非既定的命題として提示するということである。

5.2.2.2 文主語構文と it 外置文のどちらも可能である場合

上記 (24) のように、文主語構文が許されない場合であれば、it 外置文の機能は明らかである。しかし、5.1 節で示した次の (25) のような場合はどうか。

- (25) a. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: It's a miracle that he did it at all.
b. A: Jeffrey didn't turn in his term paper until a week after the deadline.
B: That he did it at all is a miracle.

(Huddleston and Pullum 2002: 1404)

(25) を中右 (1983) に従って分析してみよう。(25) の文脈では、Jeffrey が学期末レポートを提出したことは、談話に既出であり、話し手 A も B も知っていることであると理解できる。したがって、話し手 B は that 節を既定的命題として叙述すべきであるので、文主語構文①と it 外置文③のどちらも適切であると分析される。しかし、表 1 に示したように、文主語構文①と it 外置文③は、どちらも that 節の命題は既定的であり、述語の機能は叙述機能である。中右 (1983) に基づく分析だけでは、両者の違いは不明なままである。

5.3 文主語構文の特異性

文主語構文①と it 外置文③の機能を明確に区別することは、非常に困難である。というのも、これまで見てきたように、文主語構文①が適切であれば、it 外置文③も必ず適切であり、文主語構文①を用いなければならない場面というのは存在しないからである。それでも、本節では文主語構文①の機能をできる限り特徴付けるよう試みる。

5.3.1 文末重心の原理

まず、文主語構文①と it 外置文③のどちらも許される場合に it 外置文③が選択される理由には、that 節の長さが関与している可能性がある。すなわち、文末重心の原理 (the principle of end-weight, Quirk *et al.* (1972)) に従い、長い that 節を後置するために it 外置文が用いられるという可能性である。しかし、Huddleston and Pullum (2002) は次の (26) の例を挙げている。

- (26) But, we must never forget, most of the appropriate heroes and their legends were created overnight, to answer immediate needs. ... Most of the legends that are created to fan the fires of patriotism are essentially propagandistic and are not folk legends at all. ... Naturally, such scholarly facts are of little concern to the man trying to make money or fan patriotism by means of folklore. That much of what he calls folklore is the result of beliefs carefully sown among the people with the conscious aim of producing a desired mass emotional reaction to a particular situation or set of situations is irrelevant. (Huddleston and Pullum 2002: 1405)

(26) の文主語は非常に長いものであるが、それでも it 外置文ではなく文主語構文が選択されている。したがって、文主語構文が可能であるにも関わらず it 外置文が選択される理由を、単純に that 節の長さだけに求めることはできないだろう。

また、that 節の長さだけでなく、情報の新しさ (newness) が関与している可能性も考えられる。長さと言語の新しさを区別している研究としては、Arnold *et al.* (2000) が挙げられる。Arnold *et al.* (2000) はコーパスデータに基づき、語数と言語の新しさが、与格交代 (dative alternation) と重名詞句移動 (heavy NP shift) の出現に与える影響を調査している。Arnold *et al.* (2000) は、与格交代については give ... to ... を含む例を、重名詞句移動については bring ... to ... と take ... into account を含む例を調査している。結果としては、語数だけでなく、情報の新しさも与格交代および重名詞句移動に関係していると報告している。

つまり、与格交代は主題 (theme) が新情報で着点 (goal) が旧情報である場合に起こりやすく、重名詞句移動は目的語が新情報で前置詞句が旧情報である場合に起こりやすいということである。Arnold *et al.* (2000) が調査したデータ数などを表 2 に示しておく。

表 2 Arnold *et al.* (2000) による調査

構文	データ数	表現	例
与格交代	223	bring ... to ...	It is enough to bring tears to the eyes of the Statue of Justice that stands silently in front of the Supreme Court of Canada.
重名詞句 移動	167	take ... into account	It takes into account the need not to be overtaken by the constant evolution of the labour market.
	269	give	The bank was told it should give its business to a friend of the Government.

(Arnold *et al.* 2000: 35 参照)

Arnold *et al.* (2000) は、与格交代における主題と着点の長さの関係を、「主題よりも着点のほうが長い場合」、「主題と着点がほぼ同じ長さの場合」、「着点よりも主題のほうが長い場合」の 3 種類に分類している。具体的な分類方法は、次の (27) に示す。

- (27) a. 主題 < 着点 :
 主題の語数 - 着点の語数 = - 2 以下
- b. 主題 = 着点 :
 主題の語数 - 着点の語数 = - 1 ~ 1
- c. 主題 > 着点 :
 主題の語数 - 着点の語数 = 2 以下 (Arnold *et al.* 2002: 36 参照)

重名詞句移動における目的語と前置詞句の長さの関係については、「目的語よりも前置詞句のほうが非常に長い場合」、「目的語よりも前置詞句のほうがやや長い場合」、「目的語と前置詞句が同じ長さの場合」、「前置詞句よりも目的語のほうが長い場合」、「前置詞句よりも目的語のほうが非常に長い場合」

の 5 種類に分類している。具体的な分類方法は、次の (28) に示す。

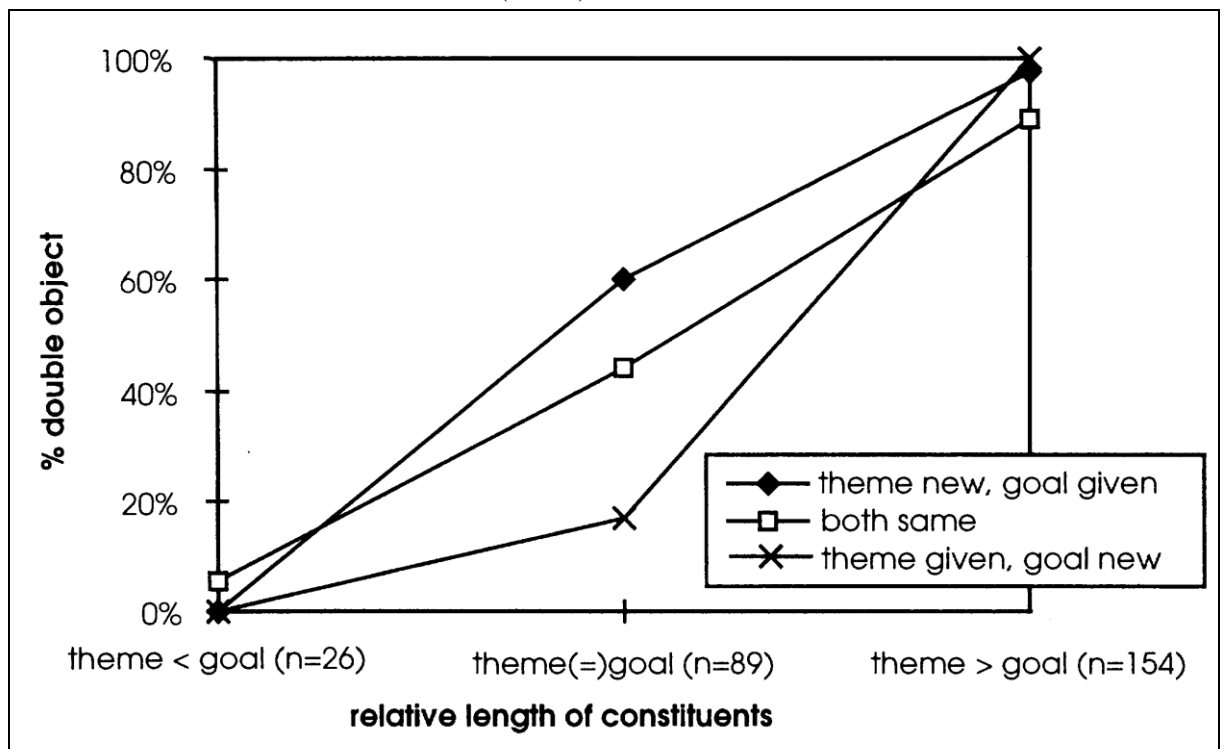
- (28) a. 目的語 ≪ 前置詞句 :
目的語の語数 - 前置詞句の語数 = 4 以下
- b. 目的語 < 前置詞句 :
目的語の語数 - 前置詞句の語数 = - 1 ~ - 3
- c. 目的語 = 前置詞句 :
目的語の語数 - 前置詞句の語数 = 0
- d. 目的語 > 前置詞句 :
目的語の語数 - 前置詞句の語数 = 1 ~ 3
- e. 目的語 ≫ 前置詞句 :
目的語の語数 - 前置詞句の語数 = 4 以上

(Arnold *et al.* 2002: 36 参照)

情報の新しさについては、新情報 (new) と旧情報 (given) の 2 種類に分類しており、文脈から推論可能 (inferable) な場合は旧情報に含まれている。

まずは、与格交代の調査結果を図 1 に示す。

図 1 : Arnold *et al.* (2000) による与格交代の調査結果

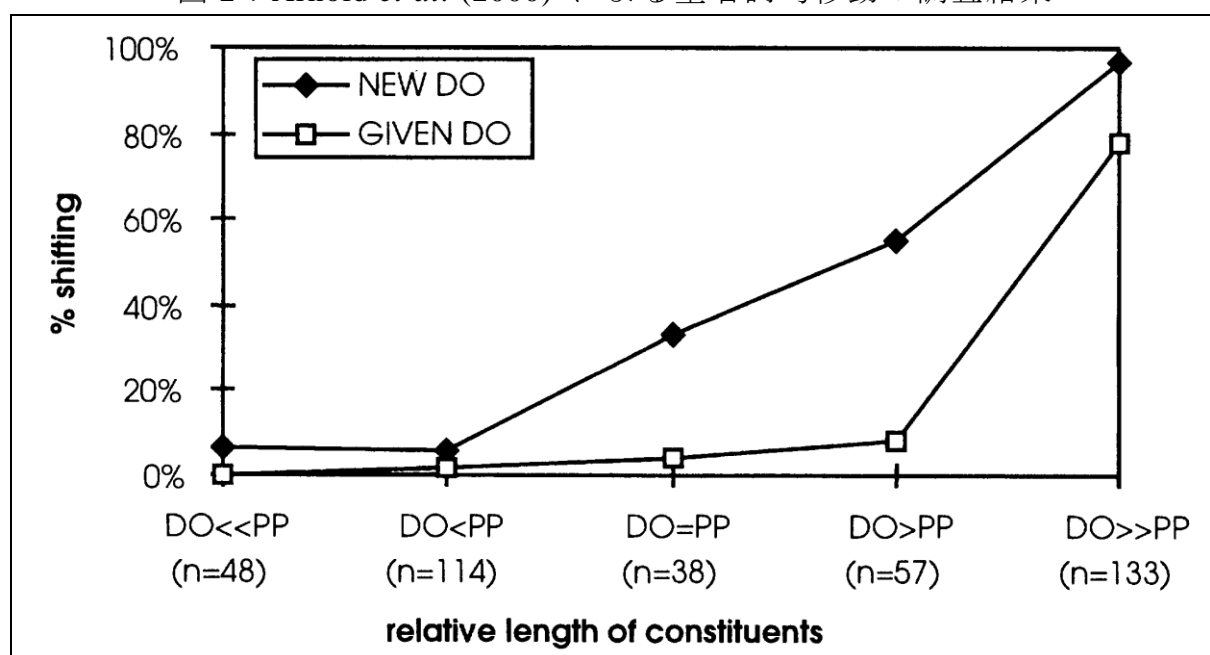


(Arnold *et al.* 2000: 37)

図 1 を見ると、たしかに、与格交代は主題が新情報で着点が旧情報である場合に起こりやすいといえる。しかし、それは主題と着点の語数が同程度の場合においてであり、主題が着点よりも長ければ、情報の新しさに関係なく与格交代は起こりやすいということがわかる。反対に、着点が主題よりも長ければ、情報の新しさに関係なく、与格交代は起こりにくいということがわかる。

続いて、重名詞句移動の調査結果を図 2 に示す。

図 2 : Arnold *et al.* (2000) による重名詞句移動の調査結果



(Arnold *et al.* 2000: 37)

図 2 を見ると、重名詞句移動は目的語が新情報で前置詞句が旧情報である場合に起こりやすいことがわかる。しかし、与格交代の場合と同様に、目的語のほうが前置詞句よりも非常に長ければ、重名詞句移動は起こりやすいということがわかる。反対に、前置詞句のほうが目的語よりも長ければ、情報の新しさに関係なく、重名詞句移動は起こりにくいということがわかる。

もし、文末重心の原理に従い、文主語構文を避けて *it* 外置文が使用されるのであれば、上記 (26) のように、文主語の *that* 節が述語に比べて長い場合には、*it* 外置文が好まれるはずである。しかし、(26) だけでなく、次の (29) に示すように、*that* 節が述語に比べて長い文主語構文は、特に珍しくはない。

- (29) a. That there was a pattern for her in Lermontov's novel is conceivable:
[...] (BNC)
- b. That the bishops were affected by the opposition of the medical

profession to the scheme — clearly they stood to lose money and independence if such a scheme were implemented — seems likely.

(BNC)

c. That this will require some radical reflexivity on the part of the insider is obvious, [...]

(BNC)

d. That this person should harbour aggressive feelings towards you is unimaginable, [...]

(BNC)

したがって、文末重心の原理に従って文主語構文を避けて it 外置文が使用されると考えるよりも、文主語構文には it 外置文にはない機能があり、その機能のために文主語構文が使用されると考えるのが妥当である。

5.3.2 談話における結束性

では、文主語構文にはどのような機能があるのだろうか。Collins (1994) は次の (30) の例を挙げている。(30) は that 節主語ではなく to 不定詞節主語の例ではあるが、Collins (1994) が述べていることは参考になるだろう。

(30) I'm a detective story writer, which means essentially that I tell lies for a living. I tell lies about myself, I especially tell lies about other people and lies about places ... But I write in the first person, as you see, and my technique is to try to tell convincing lies. Lies are very potent things, as Dr. Goebbels told us, and detective story writers are very clever people.

Agatha Christie is said to have been able to solve The Times Cryptic crossword in two minutes flat. I made that up about Agatha Christie, but it sounds good.

But to be a clever liar is not enough; (*The Corpus of Australian English*)
(Collins 1994: 21)

Collins (1994) によれば、(30) において it 外置文が用いられていない理由には、談話における結束性 (discourse cohesion) が関与している可能性があるという。Collins (1994) は、(30) の場面において it 外置文である it is not enough to be a clever liar という文を用いることも可能であると述べている。しかし、to 不定詞節主語の場合は、前の文脈の要素を to 不定詞節主語が取り上げることで、前の文脈との結束力が強まるという利点があるのだという。

Collins (1994) にはこれ以上の説明はないが、Prince (1997) が左方転位 (left-dislocation) に関して同様の分析を行っている。Prince (1997) は、左方転位

の機能の一つに set-inference triggering function という機能があると述べている。次の (31) を見てみよう。

- (31) ‘She had an idea for a project. She’s going to use three groups of mice. One_i, she’ll feed them_i mouse chow, just the regular stuff they make for mice. Another_i, she’ll feed them_i veggies. And the third she’ll feed junk food.’ (Prince 1997: 125)

(31) では、one および another が文頭に転位されている。このことにより、前の文脈にそれらの上位集合、ここでは three groups of mice が存在し、one および another がその集合の要素であることを聞き手に推論させる機能があるという。

前の文脈とのつながりを生み出す構文としては、左方転位以外にも話題化 (topicalization) や倒置 (inversion) が挙げられる。まず、話題化について、次の (32)-(35) を見てみよう。

- (32) a. A: You want to see Stardust Memories?
B: I saw Stardust Memories yesterday.
b. A: You want to see Stardust Memories?
B: Stardust Memories I saw Ø yesterday. (Prince 1981: 251)
- (33) a. A: You see every Woody Allen movie as soon as it comes out.
B: No—I saw Stardust Memories (only) yesterday.
b. A: You see every Woody Allen movie as soon as it comes out.
B: No—Stardust Memories I saw Ø (only) yesterday. (ibid.)
- (34) a. A: Why are you laughing?
B: I saw Stardust Memories yesterday. It was very funny.
b. A: Why are you laughing?
B: #Stardust Memories I saw Ø yesterday. It was very funny. (ibid.: 251-252)
- (35) a. A: Sue told me that you had been away.
B: Yeah. Oh, by the way, I saw Stardust Memories yesterday.
b. A: Sue told me that you had been away.
B: #Yeah. Oh, by the way, Stardust Memories I saw Ø yesterday. (ibid.: 252)

話題化される要素は前の文脈に既出であるか、少なくとも前の文脈に関連した要素が存在しなければならない。(32) では、*Stardust Memories* は前の文脈に既

出であり、(33) では前の文脈に関連した要素である。このような場合には話題化が可能である。一方、(34) と (35) のように、前の文脈に関連した要素が存在しなければ、(34b) と (35b) から明らかなように話題化は不適切となる。また、上記 (32) と (33) から明らかなように、話題化は随意的であり、話題化が可能な場面であっても、話題化を用いなければならないということはない。文主語構文の場合も、上記 (25) や次の (36) から明らかなように、文主語構文が可能であっても、文主語構文を用いなければならないということはなく、it 外置文を用いてもよい。

- (36) In the effort to enhance its attractiveness, men and women submit their skin to systematic stretching, scraping, gouging, soaking and burning ... To give it a ‘healthy’ tan, the skin is ritualistically exposed to excessive and injurious doses of sunlight and wind.

{That the skin survives these daily torments is a remarkable tribute to its toughness. / It is a remarkable tribute to its toughness that the skin survives these daily torments.}

(Huddleston and Pullum 2005: 248)

次に、倒置について、次の (37) と (38) を見てみよう。

- (37) We have complimentary soft drinks, coffee, Sanka, tea, and milk. Also complimentary is red and white wine. We have cocktails available for \$2.00.

(ミッドウェイ・エアラインズの客室乗務員の発話)

(Birner 1994: 245)

- (38) a. A: Hey, mom, have you seen my gym shirt? I’m in a big hurry to get to the bus stop.

B: Your gym shirt is in the hall closet.

- b. A: Hey, mom, have you seen my gym shirt? I’m in a big hurry to get to the bus stop.

B: #In the hall closet is your gym shirt.

(Birner 1994: 245)

倒置についても、やはり前置される要素は前の文脈に既出の要素である。(37) のように、倒置によって前置される要素が前の文脈に既出であれば適切である。一方、(38) のように前の文脈に既出でない場合は、(38b) のように倒置は不適切である。

左方転位や話題化、倒置は、ある要素を前置することで、その要素と前の文脈とのつながりを生み出す構文であると言える。このことは、文主語構文にも

関係していると考えられる。すなわち、文主語構文は、that 節を前置することで、it 外置文にはない前の文脈とのつながりを生み出す構文であるということである。さらに、これまでも触れてきたように、文主語構文は it 外置文と比較して、使用可能な場面が制限されている。このことから、文主語構文は左方転位などの構文と同様に、有標の構文であると考えられる。その反対に、使用可能な場面に制限がない it 外置文は、形式的には「虚辞」の it を主語に立ててはいるが、無標の構文であると考えられる。また、Kaltenböck (2000) の調査によれば、that 節が主語になっている例は 743 例中 12 例で、全体の 1.6%であったのに対し、it を主語に立てて that 節を外置している例は 731 例で、全体の 98.4%を占めていたという。この出現頻度の差も、文主語構文の有標性と、it 外置文の無標性を示している。

ここで、Huddleston and Pullum (2002) が挙げている次の (39) をもう一度見てみよう。

- (39) But, we must never forget, most of the appropriate heroes and their legends were created overnight, to answer immediate needs. ... Most of the legends that are created to fan the fires of patriotism are essentially propagandistic and are not folk legends at all. ... Naturally, such scholarly facts are of little concern to the man trying to make money or fan patriotism by means of folklore. That much of what he calls folklore is the result of beliefs carefully sown among the people with the conscious aim of producing a desired mass emotional reaction to a particular situation or set of situations is irrelevant. (Huddleston and Pullum 2002: 1405)

(39) において、that 節が非常に長いにも関わらず文主語構文が可能である理由は、that 節の内容が前の文脈のまとめになっているからであると Huddleston and Pullum (2002) は説明している。これは、Collins (1994) の説明と共通するところがある。つまり、(39) の文主語構文も、前置された that 節が前の文脈に既出の事柄を取り上げてまとめることで、前の文脈との結束力を強めていると考えられる。また、5.2 節で述べたように、中右 (1983) によれば、文主語構文は既定的命題を述語によって叙述する構文である。したがって、確定した話題である既定的命題を前置するだけでなく、叙述述語、すなわち (39) であれば is irrelevant を後置することで際立たせる効果もあると考えられる。

5.4 さらに考察

文主語は前の文脈に既出の事柄を単に抜き出したものではなく、前の文脈の

「まとめ」であるという点も重要であるように思われる。Allan (1986) が挙げている次の (40) を見てみよう。

- (40) a. Of course Maud is backward. It is apparent to everyone that Maud is backward!
b. ??Of course Maud is backward. That Maud is backward is apparent to everyone! (Allan 1986: 100)

that 節が直前の文脈をそのまま抜き出している場合、(40a) のように it 外置文であればよいが、(40b) のように文主語構文の場合は容認性が低い。Allan (1986) によれば、もし (40b) が実際に用いられるようなことがあれば、Of course Maud is backward. と That Maud is backward is apparent to everyone! という2つの文の間に長い休止 (a long pause) が必要であるという。もし、文主語の命題が単に旧情報であればよいなら、(40b) は特に問題がないはずである。(40) を説明するために重要なのは、やはり文主語構文が前の文脈との結束力を強める構文であるということだと思われる。はっきりとしたことは言えないが、That Maud is backward. という命題は談話に登場したばかりであり、まだ話題として確定していないと考えられる。つまり、文主語構文は単に旧情報を主語に持つ構文ではなく、前の文脈との結束力を強める構文であるため、直前の文脈に登場したばかりの要素をそのまま抜き出したのでは据わりが悪いと考えられる。実際に、筆者が調査した限りでは、直前の文脈をそのまま抜き出した文主語構文は存在しない。

ここで、実例として次の (41) を見てみよう。

- (41) Sherlock Holmes was a man who seldom took exercise for exercise's sake. Few men were capable of greater muscular effort, and he was undoubtedly one of the finest boxers of his weight that I have ever seen; but he looked upon aimless bodily exertion as a waste of energy, and he seldom bestirred himself save when there was some professional object to be served. Then he was absolutely untiring and indefatigable. That he should have kept himself in training under such circumstances is remarkable, but his diet was usually of the sparest, and his habits were simple to the verge of austerity.
(Arthur Conan Doyle, *The Yellow Face*)

(41) では、文主語構文の前の文脈で、シャーロック・ホームズは運動らしい運動をしないものの、優れた拳闘家であることが述べられている。そして、that

節の内容は直前の文脈をそのまま抜き出したものではなく、いわば前の文脈の内容をまとめあげたものになっている。また、ここでも *that* 節は述語 *is remarkable* と比較して明らかに長く、文末重心の原理に違反して文主語構文を用いる理由があることがうかがえる。

続いて、次の (42) を見てみよう。

- (42) Fifty degrees below zero meant eighty-odd degrees of frost. Such fact impressed him as being cold and uncomfortable, and that was all. It did not lead him to meditate upon his frailty as a creature of temperature, and upon man's frailty in general, able only to live within certain narrow limits of heat and cold; and from there on it did not lead him to the conjectural field of immortality and man's place in the universe. Fifty degrees below zero stood for a bite of frost that hurt and that must be guarded against by the use of mittens, ear-flaps, warm moccasins, and thick socks. Fifty degrees below zero was to him just precisely fifty degrees below zero. That there should be anything more to it than that was a thought that never entered his head.
- (Jack London, *To Build a Fire*)

(42) では、文主語構文の前の文脈で、華氏マイナス 50 度は単に「寒い」とか「不快だ」とかいうだけではなく、それ以上のことを意味するということが述べられている。そして、ここでも *that* 節の内容は直前の文脈をそのまま抜き出したものではなく、前の文脈の内容をまとめあげたものである。

最後に、次の (43) を見てみよう。

- (43) That the crass inversion of reality caricatured in these aspects of the popular image of Hitler was in large measure a product of the deliberate distortions of Nazi propaganda has been made abundantly clear in the preceding chapters.
- (Ian Kershaw, *The 'Hitler Myth'*)

(43) の場合は、*in the preceding chapters* とあるように、*that* 節の内容はこれまでの章で述べられてきたことであり、やはり直前の文脈をそのまま抜き出したものではない。また、(41) ほどではないが、(42) と (43) の文主語も、述語に比べて長いものになっている。

以上をまとめると、文主語構文の機能は次の (44) のようになる。

- (44) 文主語構文は、「確定した話題」を叙述することで、前の文脈との結

束力を生み出す有標の構文である。したがって、談話冒頭では不適切である。

文主語構文に対して *it* 外置文は、これまでに述べたように、*that* 節の命題を提示したり叙述したりする際に用いられる無標の構文である。*it* 外置文が非既定的な命題を提示するのか、既定的な命題を叙述するのかは、場面によって異なる。新聞記事冒頭のように、*that* 節の内容の真実性を主張したい場面では、*it* 外置文は非既定的な命題を提示する機能を発揮する。前の文脈に既出の事柄を叙述したい場面では、*it* 外置文は既定的な命題を叙述する機能を発揮する。ただし、*seem* のように提示機能しか持たない述語が用いられている場合には、*it* 外置文には場面に関わらず常に非既定的な命題を提示する機能しかない。

5.5 主語位置からの *it* 外置における *it*

ここでは、主語位置からの *it* 外置における *it* の指示対象について考察する。Bolinger (1977) によれば、主語位置からの *it* 外置における *it* の指示性は弱く、そのため、次の (45a) のように縮約したり、(45b) のように省略したりすることが可能である。

- (45) a. 'Sfunny you didn't know.
b. Funny you didn't know. (Bolinger 1977: 73)

ここまで示したように、*it* 外置文の *that* 節の内容は、旧情報／既定的命題だけでなく、新情報／非既定的命題であってもよい。さらに、これも既に示したことだが、文主語構文が有標の構文であるのに対し、*it* 外置文は無標の構文である。したがって、*it* 外置文の前方照応性は弱く、(45) のように縮約や省略が可能であると考えられる。

それでも、Bolinger (1977) は、*it* 外置文には命題の既知性が関与していると述べている。次の (46) と (47) を見てみよう。

- (46) a. ?It would be inexcusable that they should run away.
b. It would be inexcusable that they should do such a thing. (Bolinger 1977: 74)
- (47) a. ?It would be regrettable that they should resign on the spur of the moment.
b. It would be regrettable that they should resign on the spur of the moment like that. (ibid.)

(46b) では、*such a thing* によって、*that* 節の命題の既知性が高い場面であると理解できる。(46b) は、「彼らがあることをするかもしれない」ということが話題になっており、それに対して「彼らがそのようなことをしたら、許されないだろう」と述べていると考えられる。(47b) の場合は、*like that* によって命題の既知性が高まっている。(47b) は、「彼らがことのはずみで辞めてしまうかもしれない」ということが話題になっており、「彼らがそのようにことのはずみで辞めてしまったら、残念なことだろう」と述べていると推察される。(46b) や (47b) のように、*that* 節の内容の既知性が高い場面のほうが、(46a) や (47a) のような場合よりも *it* 外置文がより適切になるということである。

さらに、次の (48) と (49) に示すように、*it* 外置文の *it* が省略されるのは、*It seems that ...* と *It turns out that ...* の場合に多いようである。

- (48) a. Seems you can't trust anyone nowadays. (BNC)
- b. Seems that the practice is quite legal this side of the English Channel, at least for hungry British troops passing through. (BNC)
- c. Seems they want you to address the European Commission on European industrial development. (BNC)
- d. Seems the box was delivered by none other than Mr Neville Creed. (BNC)
- e. Seems IBM and Microsoft Inc among others have managed to get themselves knocked off the US Government's GSA list for not providing enough pricing information — everything will have to be bid. (BNC)
- (49) a. Turns out he was running the place for charity! (BNC)
- b. Turns out that one of them, Hurricane, went on to team up with co-MC Kool-Tee and DJ Kippy-O to form A Funky Rhythmical Organisation Of Sound — better known as The Afros. (BNC)
- c. Turns out they've done damn-all since Flannan Isle in the First Year. (BNC)
- d. Turns out his Dad is a head master in the Bathgate area so I says 'Oh what's the school called?' (BNC)
- e. Turns out he's both. (BNC)

seem と *turn out* は、文主語構文を許さない述語である。すなわち、*that* 節は常に新情報／非既定的であるため、*it* の前方照応性が不要となり、省略が起こ

りやすいと考えられる。

以上のことから、主語位置からの *it* 外置における *it* は、前方照応性が全くないということはないが、希薄化していると結論づけたい。

5.6 It AUX be that ...

第3章において、次の (50) のように、*it is that* 節構文が助動詞を伴っている形の例があることを紹介した。便宜上、このような例を *It AUX be that ...* と呼ぶことにする。

(50) It may be that Minoan ships were built and repaired here.

(*Longman Dictionary of Contemporary English*)

大竹 (2009) は、*It AUX be that ...* を *it is that* 節構文に法助動詞が共起したものであると分析している。大竹 (2009) が挙げている例を次の (51) にいくつか示しておく。

(51) a. There is no doubt that Islam increasingly is perceived as the philosophical and ethical foundation for good governance of Indonesia in the future. It may be that we are witnessing in the modernist Islamist ideas of Indonesia a glimpse of the future of political Islam elsewhere in the Muslim world.

(*Los Angeles Times*, 1998/05/15)

(大竹 2009: 107)

b. But if he willingly went along with Singer, then what is he doing running the company now? It could be that he is the only man alive who knows where everything is in the indisputable mess that Telwest has become. Or It might be that some are impressed that he has managed to maintain some sort of working relationship with the banks.

(*The Observer*, 2002/11/10)

(大竹 2009: 107)

c. “It’s like they want to prove they’re all thumbs so they won’t upstage the big guy,” he said. That could be it. It could also be that this plum is looking more like a prune.

(*TIME*, 1996/05/20)

(大竹 2009: 108)

d. Millicent had never had any such fears for Dorrie before, and competent. It must be that what had happened this year made anything

seem possible.

(*The New Yorker*, 1992)

(大竹 2009: 108)

一方で、Quirk *et al.* (1985) や Declerck (1992) は、It AUX be that ... は it 外置文に分類されると述べている。本研究も同様に、It AUX be that ... を it 外置文であるとして分析を試みる。続く 5.6.1 節において It AUX be that ... と it is that 節構文の相違点を、5.6.2 節において It AUX be that ... と it 外置文の類似点を示す。

5.6.1 It AUX be that ... と it is that 節構文の相違点

まず、次の (52) を見てみよう。

- (52) a. It was that he didn't have the money that he didn't take the plunge.
b. ?It could be that he didn't have the money that he didn't take the plunge. (Bolinger 1972: 36)

(52a) のように、it is that 節構文は、that 節をさらに後続させることが可能であるが、(52b) のように、It AUX be that ... の場合は容認性が下がるという違いがある。

次に、(53) を見てみよう。

- (53) a. *It's ___ he can't make up his mind.
b. It could be ___ he didn't have the money. (Bolinger 1972: 36)

(53a) のように、it is that 節構文は補文標識 that を省略することができないが、(53b) のように、It AUX be that ... では省略することができる。It AUX be that ... の補文標識 that が省略可能であるという点は、次の (54) のように、It seems ... や It turns out ... などの it 外置文との共通点でもある。

- (54) a. It seems ___ this gentleman was waiting for the doctor.
(Collins コウビルド新英英辞典)
b. It turns out ___ Levy is talking in metaphorical terms. (*ibid.*)

さらに、次の (55) を見てみよう。

- (55) a. *He didn't have the money, it was.
b. He didn't have the money, it could be/it happened/it seemed.

(55a) のように、it is that 節構文は補文を前置することは許されないが、(55b) のように、It AUX be that ... では補文の前置が可能である。また、(55b) からわかるように、これも it happened ... や it seemed ... のような it 外置文との類似点でもある。最後に、第 3 章で紹介したように、Koops (2007) によれば、Declerck (1992) が示している次の (56) のような例は、実際の談話としては不自然である。

(56) He was shot in his house. — It is that he knew too much.

(Declerck 1992: 209)

しかし、Koops (2007) によれば、(56) の文脈であっても、It may be that he knew too much. であれば問題がないという。また、Declerck (1992) も Koops (2007) と同様の指摘をしている。Declerck (1992) は次の (57) の例を挙げ、It AUX be that ... は it is that 節構文とは異なり、先行文脈を必要とせず、単独で解釈することが可能であると述べている。

(57) It may be that I'm late home tonight.

(Declerck 1992: 212)

つまり、it is that 節構文に比べて、It AUX be that ... は前方照応性が弱いと考えられる。このことも、It AUX be that ... が it is that 節構文と別の構文である可能性を示唆している。

最後に、これも第 3 章で示したことだが、次の (57) に示すように、it is that 節構文は It is not that ... It is just that ... や It is not that ..., but that ... といったように、否定文に続いて肯定文が現れる、相関構文 (correlative construction, Quirk *et al.* (1989)) としての特徴が見られる。しかし、It AUX be that ... にはそのような特徴は見られない。

- (57) a. It is not that they are extreme, or personally off-putting. It is just that their claim to power is completely out-of-date. (BNC)
- b. It is not that he doesn't care, just that his sense of values are different — not better, not worse, just different. (BNC)
- c. It is not that such people are necessarily 'inadequate', but that they feel themselves to be inadequate. (BNC)
- d. It is not that they are not capable of competing; it is simply that there

- have been no great black performers in these areas in history (due to lack of opportunities and facilities) and no tradition exists. (BNC)
- e. It is not that we are afraid to do so but simply that the occasion never really arises. (BNC)
- f. It is not that he lies about them, rather that only a patient and omnivorous prospector would have found the particular treasures which he quotes. (BNC)

5.6.2 It AUX be that ... と主語位置からの it 外置の類似点

まず、次の (58) と (59) を見てみよう。

- (58) *That Minoan ships were built and repaired here may be.
- (59) a. *That he was wrong seems. (Huddleston and Pullum: 2002: 1368)
- b. *That he was dying turned out. (ibid.: 1406)

(58) から明らかのように、It AUX be that ... は文主語を許さない。これは、(59) に示す It seems that ... や It turns out that ... などと同様である。意味を考えてみても、It AUX be that ... は、It seems that ... などと同様に、that 節の命題の真実性に対する推定判断を表すだけの表現である。したがって、It AUX be that ... の主節は叙述機能を持たないため、文主語が不可能な it 外置文であると考えるのは自然である。

次に、(60) を見てみよう。

- (60) a. Maybe they just didn't want to ask too many questions, because they rented us a room without even asking to see our papers.
(Collins コウビルド新英英辞典)
- b. Could be he is right. (ランダムハウス英和辞典)

おそらく、(60a) のような maybe という表現は、It may be that ... から派生したものであると思われる。というのも、(60b) のように、It could be that ... から派生したと思われる could be という表現も存在するからである。maybe とは異なり、could be の場合は could と be の間に空白が置かれている。しかし、かつては maybe も could be と同様に may be であったことを示す例がある。次の (61) に、Oxford English Dictionary における maybe/may be の例を、全てではないが古いものから順に示す。

- (61) a. May be [a1400 Vesp. Mai fall] sum goost away him ledde.
(a1400 (a1325) *Cursor Mundi* (Trin. Cambr.) 17553)
- b. Maybe he heares the King Does whet his Anger to him.
(1623 W. SHAKESPEARE & J. FLETCHER *Henry VIII* iii. ii. 92)
- c. May be some Fairies child..Has pist upon that side.
(a1627 T. MIDDLETON & W. ROWLEY *Old Law* (1656) iii. 38)
- d. This, may be, was the reason some imagin'd Hell there.
(1661 J. GLANVILL *Vanity of Dogmatizing* 175)
- e. Impossible! it can't be me. Or may be I mistook the Word.
(1730 J. SWIFT *Apol. Lady Carteret* 4)
- f. Some Doctors crack o' healin pow'r, And may-be kill instead o' cure.
(1787 W. TAYLOR *Scots Poems* 10)
(*Oxford English Dictionary*)

Oxford English Dictionary における maybe/may be の初出は (61a) で、この時点では may be の形をとっている。(61b) では、スペースが省かれた maybe が現れているが、その後も (61c-e) のように may be の形で用いられている。また、(61f) では、ハイフンを用いた may-be の形が現れている。

さらに、could be について、次の (62) を見てみよう。

- (62) a. 'Could be that any of the other partners used it?' he suggested. (*BNC*)
- b. Could be that he's right. (*BNC*)

(62) では、It could be that ... から it が省略されているが、補文標識 that は残されている。このことは、could be が It could be that ... から派生したことを裏付けている。(60) や (62) は、It AUX be that ... と、It seems that ... や It turns out that ... との類似性を示している。というのも、5.5 節で述べたことだが、次の (63) に示すように Seems ... や Turns out ... という文も存在するからである。

- (63) a. Seems you can't trust anyone nowadays. (*BNC*)
- b. Turns out, he'd lost my phone number. (G. Flynn, *Gone Girl*)

また、次の (64) に示すように、maybe は文中に現れ、挿入句的に用いられる。そして、(65) に示すように、it may be が挿入句的に用いられている例も珍しくない。

- (64) a. Some, maybe, even are more interested in how Casey Stengel's Boston Bees are going to do next season. (TMC)
- b. But, admits Author Sargeant, it has vitality and, maybe, a future. (TMC)
- c. The new book is an effort to persuade couples, maybe, to consider — the author is excruciatingly tactful — reducing the strain on the earth's resources by having only one child. (TMC)
- d. There's a lesson here, maybe, about the disproportion between human ability — mental or muscular — and our capacity for moral reflection. (TMC)
- e. Everyone, maybe, except Howard, whose career disappointments have been precious few. (TMC)
- f. Democrats dismissed the amount as trivial-enough to buy, maybe, a pizza a week. (TMC)
- (65) a. Each age, it may be, gets its own appropriate evil. (TMC)
- b. Kennedy, it may be, learned concealment from his father and denial from his mother. (TMC)
- c. Publicity before the trial should be restricted, it may be, to official statements by police or state's attorney. (TMC)
- d. You, it may be, will continue in your more individualistic methods. (TMC)
- e. It was down home in Miami Beach with the folks who, it may be, really run America. (TMC)
- f. Emanating from hurt and the pain of failure and unfairness, the fantasy of revenge became, it may be, even stronger than the imperative of sex. (TMC)

さらに、次の (66) に示すように、it seems や it turns out も挿入句的に用いられる場合がある。

- (66) a. But Latin, it seems, is here to stay. (TMC)
- b. English newspapers warned against \$2 haircuts, “and as for food,” noted the Manchester Guardian, “you can not, it seems, sustain life on less than about \$1 a meal — even of the cheapest cafeteria type. (TMC)
- c. Nature, it seems, has finally got a bellyful of us. (TMC)

- d. But glaciers, it turns out, can move with surprising speed, and so can nature. (TMC)
- e. Because the dinner, it turns out, is no mere Bible study, 12-step meeting or other pendant to Sunday service at a Denver megachurch. (TMC)
- f. But all those sprays and lasers and high-tech microscopes, it turns out, are expensive. (TMC)

以上見てきたように、It AUX be that ... には、5.6.1 節で示した it is that 節構文との相違点に加えて、主語位置からの it 外置との類似点が見られる。したがって、It AUX be that ... を it is that 節構文であると見なすのは適切ではなく、主語位置からの it 外置の例であると見なすべきである。

5.6.3 It AUX be that ... に現れる助動詞

大竹 (2009) は、次の (67)-(74) に示すように、could, may, might, must, cannot は It AUX be that の助動詞位置に現れるのに対し、can, will, should, ought to は現れないと述べている。

- (67) a. It could be that John is there already.
b. John could be there already. (Hurford 1973)
- (68) a. It may be that we made a mistake.
b. We may have made a mistake. (ibid.)
- (69) a. It must be that you are mistaken.
b. You must be mistaken. (ibid.)
- (70) a. It might be that the plane arrived late.
b. The plane might have arrived late. (ibid.)
- (71) a. It cannot be that I know your long-lost nephew.
b. I cannot know your long-lost nephew. (ibid.)
- (72) a. *It can be that Tom's illness is fatal.
b. Tom's illness can be fatal. (大竹 2009: 111)
- (73) a. *It will be that the neighbors are at home now.
b. The neighbors will be at home now. (ibid.)
- (74) a. *It {should / ought to} be that he is sick.
b. He {should / ought to} be sick. (ibid.)

一方、八木 (2019) は、次の (75) の例を挙げ、can と should であれば It AUX

be that ... に現れる場合があることを指摘している。

- (75) a. It is also true that not everyone can be a disciple, since disciple-ship also presupposes a special call from Jesus. It does not depend on the will of the individual. It can be that someone wants to follow Jesus but is not made his disciple. (COCA)

(八木 2019: 159)

- b. GIBSON: Why do you think that's true?

MR. SHERMAN: Because some of the interviews that I've seen where juniors indicated that they felt that — they looked for reasons to acquit. Well, it should be that they should be looking for reasons to convict. (COCA)

(八木 2019: 159)

ただし、筆者が調べた限りでは、may や could に比べて、can や should が It AUX be that ... に現れることは稀である。したがって、It AUX be that ... に現れる助動詞として適切かどうかの判断には個人差がある可能性がある。

それでも、八木 (2019) は、will と ought to はやはり、It AUX be that ... には現れないと述べている。八木 (2019) の調査によれば、it will be that ... と it ought to be that ... という形の文においては、必ず主語 it は前の文脈に既出の要素を指示しているという。例えば、八木によれば、次の (76) では、it は二重下線で示した要素を指示しているため、It AUX be that ... の該当例であるとは言えないという。

- (76) a. If there's any good to come of this, it will be that the current system will be overhauled and new procedures will be put in place to protect the public as the system was intended to do in the first place. (COCA)

(八木 2019: 160)

- b. TAVIS: If you don't make but one resolution this year, it ought to be that you are not going to be a constant, perennial, that is, underearner.

(COCA)

(八木 2019: 160)

ただし、第2章と第3章で触れたように、(76) の例は縮約 it 分裂文であると思われる。詳しくは第2章と第3章を参照されたい。どちらにしても、(76) の例が It AUX be that ... の例でないことには変わりがない。

したがって、現時点では、will と ought to は It AUX be that ... には現れないということになる。また、It could be that ... は特に珍しくもないのに対し、It can be that ... は大竹 (2009) が不適切であると判断するほどに稀であることなど、It AUX be that ... に現れる助動詞についてはさらなる調査が必要である。

5.7 おわりに

本章では、中右 (1983) による既定性の概念に基づいて文主語構文と主語位置からの it 外置を比較し、文主語構文の機能を次の (77) のように説明した。

- (77) 文主語構文は、「確定した話題」を叙述することで、前の文脈との結束力を生み出す有標の構文である。したがって、談話冒頭では不適切である。

また、5.5 節では、主語位置からの it 外置の it の指示性が希薄化していることを示した。さらに、5.6 節では、It AUX be that ... と it is that 節構文の相違点ならびに It AUX be that ... と主語位置からの it 外置の類似点を示し、It AUX be that ... が主語位置からの it 外置の例であることを示した。

第 6 章 目的語位置からの it 外置 1 : it が随意的な場合

6.1 はじめに

本章では、目的語位置からの it 外置の中でも、it が随意的な事例を取り扱う。例として、次の (1) を見てみよう。

- (1) a. She resents __ that they appointed someone less qualified than her.
b. She resents it that they appointed someone less qualified than her.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)

resent の場合、(1a) のように that 節を直接従える場合もあれば、(1b) のように it + that 節を従える場合もある。次に (2) を見てみよう。

- (2) a. ?I believed it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
b. Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (*ibid.*)
c. Would you believe it that the election hurt them? (*ibid.*)
d. I positively do believe it that the election hurt them. (*ibid.*: 67)

Bolinger (1977) によれば、(1) に示した resent とは異なり、(2a) のように、believe が it + that 節を従えている場合は容認性が低い。しかし、(2b-d) のように、主節が否定や疑問、強い肯定などの環境にある場合には、believe は it + that 節を従えることができる。

本章の目的は、次の (3) のことを明らかにすることである。

- (3) a. 目的語位置からの it 外置において、it が随意的な場合、it の有無は意味にどのように影響するか。
b. resent のように it + that 節を問題なく従える動詞と、believe のように特定の環境を要求する動詞には、どのような違いがあるか。

(3a) については、第 5 章で取り扱った主語位置からの it 外置と同様に、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示す。(3b) については、既定性の概念に加え、Cattell (1978) および Hegarty (1992) による動詞の 3 分類に基づいて分析を試みる。

6.2 既定的 it

Kiparsky and Kiparsky (1970) によれば、目的語位置からの it 外置における it

は、「叙実的 it (factive it)」である。すなわち、この場合の it は the fact の随意的縮約形 (an optional reduction of *the fact*) であると主張している。したがって、叙実動詞は it + that 節を従えることができるが、ほとんどの話者は非叙実動詞が it + that 節を従えている例を容認しないという。Kiparsky and Kiparsky (1970) による叙実動詞と非叙実動詞の分類は、表 1 に示すとおりである。

表 1 : Kiparsky and Kiparsky (1970) による叙実動詞・非叙実動詞の分類

叙実動詞		非叙実動詞	
regret	ignore	suppose	believe
be aware (of)	make clear	assert	conclude
gasp	mind	allege	conjecture
comprehend	forget (about)	assume	intimate
take into consideration	deplore	claim	deem
take into account	resent	charge	fancy
bear in mind	care (about)	maintain	figure

(Kiparsky and Kiparsky 1970: 145)

まず、叙実動詞の例として、次の (4) を見てみよう。

- (4) a. Bill resents it that people are always comparing him to Mozart.
b. They didn't mind it that a crowd was beginning to gather in the street.
(Kiparsky and Kiparsky 1970: 165)

Kiparsky and Kiparsky (1970) にしたがえば、(4a) の resent と (4b) の mind はどちらも叙実動詞であるため、it + that 節を従えることができると説明される。次に、非叙実動詞の例として、次の (5) を見てみよう。

- (5) a. *Bill claims it that people are always comparing him to Mozart.
b. *They supposed it that a crowd was beginning to gather in the street.
(*ibid.*)

(5a) の claim と (5b) の suppose は非叙実動詞であるため、it + that 節を従えることができないと説明される。

しかし、6.1 節で紹介した次の (6) のような例は、Kiparsky and Kiparsky (1970) の主張にとって問題となるだろう。

- (6) a. Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
 b. Would you believe it that the election hurt them? (*ibid.*)
 c. I positively do believe it that the election hurt them. (*ibid.*: 67)

(6) では、Kiparsky and Kiparsky (1970) が非叙実動詞に分類している believe が it + that 節を従えている。したがって、「叙実動詞であれば it + that 節を従えることができる」とは言えるかもしれないが、「叙実動詞でなければ it + that 節を従えることはできない」とまでは言えないということになる。つまり、動詞の叙実性による説明だけでは、it が随意的な事例すべてを説明することはできない。

さらに、中右 (1983) は、目的語位置からの it 外置における it を叙実的 it であるとする Kiparsky and Kiparsky (1970) の主張に異を唱えている。まず、Kiparsky and Kiparsky (1970) が挙げている (7) を見てみよう。

- (7) a. I had expected ___ that there would be a big turnout (but only three people came).
 b. I had expected it that there would be a big turnout (but this is ridiculous—get more chairs). (Kiparsky and Kiparsky 1970: 166)

Kiparsky and Kiparsky (1970) によれば、(7a) は叙実的 it を含まないので、「たくさんの出席者が来る」という予測が実現したかどうかに関しては中立的である。一方、叙実的 it を含む (7b) は、その予測が実現したことを含意する。しかし、中右 (1983) によれば、Kiparsky and Kiparsky (1970) が主張する it の叙実性は、語用論的推論にすぎないという。次の (8) を見てみよう。

- (8) A: They said that there would be a big turnout.
 B: I had expected it that there would be a big turnout, but only three people came. (中右 1983: 575)

Kiparsky and Kiparsky (1970) の主張に従えば、(8) の話者 B による発話は (7b) と同様に叙実的 it を含むので、「たくさんの出席者が来る」という予測が実現したことを含意するはずである。しかし、(8) では but only three people came と続けることによって、その含意が取り消されている。Lysvåg (1975) が挙げている次の (9a) に関しても、中右 (1983) は同様の議論をしている。

- (9) a. We had expected it that the guests would come late, so we had made careful preparations. (Lysvåg 1975: 133)
 b. ... but contrary to our expectations, most of the guests came on time. (中右 1983: 578)

もし (9a) が叙実的 *it* を含むのであれば、「客が遅れて来る」という予測が実現したことを含意するはずである。しかし、中右 (1983) によれば、(9a) に続けて (9b) のように *but contrary to our expectations, most of the guests came on time* と続けても矛盾は生じないという。

さらに、中右 (1983) は、次の (10a,b) の最小対立例を挙げている。

- (10) a. I never believed it that the president was involved in that operation, and in fact he wasn't.
 b. *I never knew it that the president was involved in that operation, and in fact he wasn't. (中右 1983: 579)

(10a) と (10b) の違いは、動詞が *believe* であるか *know* であるかという点だけである。(10a,b) がどちらも叙実的 *it* を含むのであれば、*and in fact he wasn't* と続けると矛盾が生じるはずである。しかし、動詞が *believe* である (10a) であれば問題がないが、動詞が *know* である (10b) では矛盾が生じるため、不適切であるという。したがって、(10a,b) の容認性の違いは、*it* が持つ叙実性ではなく、動詞が持つ叙実性によるものであると考えられる。

以上のことから、中右 (1983) は、目的語位置からの *it* 外置における *it* は叙実的 *it* ではないと主張している。中右 (1983) によれば、上記 (9a) の文は、例えば誰かが次の (11) のように述べたのを受けて行われた発話であるという。

- (11) They told us that the guests would come late. (中右 1983: 576)

したがって、中右 (1983) によれば、目的語位置からの *it* 外置における *it* は叙実的 *it* ではなく、既定的 *it* である。第 5 章で紹介した中右 (1983) による既定性の定義を、次の (12) に再度示す。

- (12) ある事柄の知識（概念、命題）が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。 (中右 1983: 549)

つまり、目的語位置からの *it* 外置において、*it* が随意的な動詞が *it* + *that* 節を従えている場合、話し手は *that* 節の内容の真実性を前提としているわけではなく、「*that* 節の事柄の知識が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識にある」ということになる。

中右 (1983: 576) は、「主節の焦点化がはっきりしているときには、*that* 補文の命題内容は既定的前提をもち、そのために *it* をたてることができる」と述べている。中右 (1983) は、次の (13) に示す Bolinger (1977) の例を引用し、どのような手段によって主節が焦点化されるのかを説明している。

- (13) a. Not for a moment did I believe (it) that the election hurt them.
(Bolinger 1977: 66)
- b. I positively do believe (it) that the election hurt them.
(*ibid.*: 67)
- c. Would you believe (it) that the election hurt them? (*ibid.*: 66)
- d. Who would have thought (it) things would turn out this way?
(*ibid.*: 70)
- e. When did you find (it) out that the check was bad? (*ibid.*: 69)

(13a) では、否定倒置によって主節が焦点化されている。(13b) では、*positively* と強調の *do* によって、主節が焦点化されている。(13c) では *would* に、(13d) と (13e) では疑問詞 *who* と *when* に焦点が置かれている。中右 (1983: 576) は (13) について、「このように、主節のどこかに話し手の発話の焦点があるときには、補文命題には既定的前提があり、したがってその代わりに目的語として *it* をたて、*that* 補文を外置することができる」と述べている。このことは、第 5 章で紹介した中右 (1983) による文主語構文に関する説明と共通するところがある。次の (14) と (15) を見てみよう。

- (14) a. *That the president has been indicted will be announced.
b. It will be announced that the president has been indicted.
c. That the president has been indicted will not be announced.
(中右 1983: 582)
- (15) a. *That she slipped arsenic into his tea is said.
b. It's said that she slipped arsenic into his tea.
c. That she slipped arsenic into his tea is said by everybody in the town.
(*ibid.*)

(14a) のように、*will be announced* という述語は提示機能しか持たないため、文主語構文を許さないが、(14c) では *not* によって叙述機能を持つようになり、文主語構文が可能となっている。(15c) の *is said* も提示機能しか持たないが、(15c) のように *by everybody in the town* によって文主語構文が可能となっている。上記 (13) でも同様に、否定や強い肯定などによる強調や、疑問詞が存在することによって、主節が叙述機能を持つようになることで焦点化され、目的語位置からの *it* 外置が可能になっていると考えられる。

また、中右 (1983) は触れていないが、Bolinger (1977) は次の (16) のように述べている。

(16) [O]ne would not enter a room bearing news of an election and announce to those present **I do not believe it that the election hurt them.*

(Bolinger 1977: 67)

つまり、選挙のニュースをたずさえて部屋に入り、その部屋にいる人々に向かって *I do not believe it that the election hurt them.* とは言わない、ということである。*it* を目的語に立てて *that* 節を外置すると、*that* 節は既定的命題となり、主節が焦点化される。しかし、この場面において、その部屋にいる人々に対して伝えるべきは主節の内容ではなく、「選挙が彼らに痛手を与えた」という *that* 節の内容であるため、*it* を目的語に立てて *that* 節を外置するのは不適切であると考えられる。

以上のことから、目的語位置からの *it* 外置における *it* は、叙実的 *it* ではなく、既定的 *it* であると考えべきである。さらに、目的語に *it* を立てて *that* 節を外置すると、*that* 節の命題は既定的命題となる。したがって、既定的命題である *that* 節の内容を叙述するために、主節が叙述機能を持っていないと考えられる。

6.3 目的語位置からの *it* 外置を許す動詞と許さない動詞

本節では、Cattell (1978) および Hegarty (1992) に基づき、目的語位置からの *it* 外置を許す動詞と許さない動詞の違いを見ていく。

Cattell (1978) によれば、(17a) に挙げる動詞は、(17b) に示すように、後続する *that* 節内からの抜き出しを許す。しかし、(18a) に挙げる動詞は、(18b) に示すように、後続する *that* 節内からの抜き出しを許さない。

(17) a. Why do they {think/suppose/say/imagine/reckon/claim} (that) she killed him?

- b. Why do they {think/suppose/say/imagine/reckon/claim} (that) she killed him ____? (Cattell 1978: 62)
- (18) a. Why do they {regret/forget/emphasize/deny/doubt/admit/realize} that she killed him?
- b. *Why do they {regret/forget/emphasize/deny/doubt/admit/realize} that she killed him ____? (*ibid.*: 61)

Cattell (1978) は、このことを説明するために、表 2 に示すように、動詞を volunteered stance verbs (以下 v-stance 動詞)、response stance verbs (以下 r-stance 動詞)、non-stance verbs (以下 n-stance 動詞) の 3 種類に分類している。

表 2 : Cattell (1978) による動詞の分類

VOLUNTEERED STANCE VERBS		RESPONSE STANCE VERBS	NON-STANCE VERBS
allege	figure	accept	(be) aware
assert	imagine	admit	(be) certain
assume	intimate	agree	comment
believe	judge	confirm	convey
claim	maintain	deny	convince
conclude	propose	verify	detail
conjecture	reckon		doubt
consider	report		emphasize
decide	say		forget
declare	state		mention
deem	suggest		notice
envisage	suppose		point out
estimate	suspect		realize
except [sic]	tell		recall
fancy	think		recognize
feel			regret
			remember
			remind

(Cattell 1978: 77 参照)

そして、後続する that 節内からの抜き出しを許すのは、v-stance 動詞のみであると主張している。

続く 6.3.1 節と 6.3.2 節では、v-stance 動詞、r-stance 動詞、n-stance 動詞の違

いを概観する。

6.3.1 2種類の stance 動詞と n-stance 動詞

ここでは、v-stance 動詞および r-stance 動詞と、n-stance 動詞の違いを見ていく。例として、次の (19)-(22) に示す、v-stance 動詞／r-stance 動詞と n-stance 動詞の対比を見てみよう。

- (19) a. v-stance 動詞 :
Richard claimed that the road went through Windsor.
b. n-stance 動詞 :
Richard commented that the road went through Windsor.
(Cattell 1978: 66)
- (20) a. v-stance 動詞 :
I say that there are mice in the cupboard.
b. n-stance 動詞 :
I regret that there are mice in the cupboard. (ibid.:67)
- (21) a. r-stance 動詞 :
Peter admitted that he had no money.
b. n-stance 動詞 :
Peter recalled that he had no money. (ibid.)
- (22) a. r-stance 動詞 :
Joseph and Mary confirmed that they were engaged.
b. n-stance 動詞 :
Joseph and Mary emphasized that they were engaged. (ibid.)

Cattell (1978) は、(19)-(22) の対比について、次の (23) のように説明している。

- (23) None of the (a) sentences would be appropriate if the proposition expressed in the *that*-clause were part of the undisputed background of already-held belief common to all the participants in the conversation. All the (b) sentences, however, would be appropriate in those circumstances. A number of them would also be appropriate if the complement were not part of the background of common beliefs; but that does not affect the issue. The point is that the (a) sentences are appropriate ONLY if the complement is NOT part of the common ground.
(Cattell 1978: 67)

つまり、v-stance 動詞と r-stance 動詞は、that 節の内容が話し手と聞き手の共有知識に含まれない場面においてのみ適切になるということである。一方、n-stance 動詞には、そのような制約は存在しない。例として、上記 (19a) と (19b) を比較してみよう。(19a) は、v-stance 動詞の *claim* を含む例である。話し手が何らかの命題を「主張する (*claim*)」場合、その命題は話し手と聞き手の共有知識であってはならない。したがって、(19a) においては、that 節の内容が Richard と聞き手の共有知識ではなかった場面が想定される。一方、(19b) は n-stance 動詞の *comment* を含む例である。(19b) のように話し手が何らかの命題を「述べる (*comment*)」場合は (19a) に課されるような制約は存在せず、that 節の内容が Richard と聞き手の共有知識である場面であっても問題がない。

6.3.2 v-stance 動詞と r-stance 動詞

次に、v-stance 動詞と r-stance 動詞の違いを見ていく。まず、次の (24) を見てみよう。

- (24) a. Bill claimed that Sue was guilty, and Harry denied it.
 b. Bill claimed that Sue was guilty, and then, in response, Harry denied it. (Cattell 1978: 68)

(24a) では、v-stance 動詞の *claim* に続き、r-stance 動詞の *deny* が現れている。Cattell (1978) によれば、(24a) には、(24b) のような解釈があるという。つまり、「Bill が that 節の命題の真実性を主張し、それに応じて、Harry がその命題の真実性を否定した」という、時系列 (a temporal sequence) 的解釈が可能であるという。次に、(25) を見てみよう。

- (25) a. ?Bill denied that Sue was guilty, and Harry claimed it.
 b. What Bill denied and Harry claimed were the same thing: that Sue was guilty. (Cattell 1978: 68)

(25a) は (24a) とは対照的に、r-stance 動詞の *deny* に続き、v-stance 動詞の *claim* が現れている。(25a) は容認性が低いが、たとえ容認されとしても、(25b) の解釈しか存在しないという。すなわち、(25a) には、Bill が否定した命題と Harry が主張した命題が Sue was guilty という同一の命題であったという解釈しかなく、上記 (24b) のような時系列的解釈が存在しないということである。実際に、(25a) に時系列的解釈を強制する *and then, in response* を加えた次の (26) は容認されない。

(26) *Bill denied that Sue was guilty, and then, in response, Bill claimed it.

(Cattell 1978: 68)

次の (27) と (28) に示す擬似分裂文についても、同様の議論が当てはまる。

(27) a. Bill claimed what Harry denied.

b. The thing that Bill claimed was the same thing that Harry denied.

c. *In response to Harry's denying X, Bill claimed X. (Cattell 1978: 68)

(28) a. Bill denied what Harry claimed.

b. The thing that Bill denied was the same thing that Harry claimed.

c. In response to Harry's claiming X, Bill denied X. (*ibid.*)

(27a) が持つ解釈は、(27b) のように、「Bill が主張した命題と Harry が否定した命題は同一の命題であった」という解釈だけであり、(27c) のような時系列的解釈は存在しない。一方、(28a) は、(28b) の解釈だけでなく、(28c) のような時系列的解釈も可能である。

さらに、v-stance 動詞には、主語が命題の真実性に責任を負うという重要な特徴がある。例えば、次の (29) のように主張した人物に対し、v-stance 動詞を用いて (30) のように発話することが可能である。

(29) There is going to be a revolution in Great Britain.

(*ibid.*: 69)

(30) v-stance 動詞 :

a. Who told you that?

b. Who says {that/so}?

c. Who alleges that?

d. Who claims that?

(*ibid.*: 69)

v-stance 動詞は、主語が命題の真実性に責任を負うので、(29) に対して (30) のように発話することで、命題の真実性を主張している人物が誰であるかを追及することが可能である。一方、上記 (29) に対して、r-stance 動詞を用いて次の (31) のように発話することはないという。

(31) r-stance 動詞 :

a. Who admits that?

b. Who accepts that?

- c. Who denies that?
- d. Who remarked that? (Cattell 1978: 69)

Cattell (1978) によれば、(31) の応答が適切であるとすれば、それは修辞疑問文として解釈される場合のみである。例えば、(31a) であれば、「誰がそのようなことを認めるのだ（誰も認めはしない）」という解釈であれば可能であるという。

前節と本節の内容を踏まえ、Cattell (1978) による動詞の 3 分類をおおまかにまとめると、次の (32) のようになる。

- (32) a. v-stance 動詞は、主語が命題の真実性を主張する動詞である。
- b. r-stance 動詞は、既存の命題に対して、主語が肯定や否定などの意見を述べる動詞である。
- c. n-stance 動詞は、v-stance 動詞や r-stance 動詞とは異なり、that 節の命題が話し手と聞き手の共有知識となっている場面でも用いることができる動詞である。

続く 6.3.3 節では、Cattell (1978) による動詞の 3 分類と目的語位置からの it 外置を関連付けている Hegarty (1992) による観察を紹介する。

6.3.3 Hegarty (1992) による観察

まず、Cattell (1978) は v-stance 動詞、r-stance 動詞、n-stance 動詞の相違点について、重要な指摘をしている。次の (33) に示すように、v-stance 動詞の多くは the N + that 節に従えることができない。

- (33) v-stance 動詞 :
*John {thought / supposed / said/ imagined / reckoned / claimed} the {fact / allegation / story / claim / rumor} that she killed him. (Cattell 1978: 65)

一方、次の (34) に示すように、r-stance 動詞と n-stance 動詞は the N + that 節に従えることができる。

- (34) r-stance 動詞／n-stance 動詞 :
John {regretted the fact / forgot the fact / doubted the story / denied the allegation / admitted the fact / accepted the claim / realized the fact} that Sue killed Harry. (Cattell 1978: 64)

ただし、believe は上記の表 1 において v-stance 動詞に分類されているが、次の (35) に示すように、the N + that 節を従えることができる。

(35) Why do the police believe the claim that Sue killed Harry?

(Cattell 1978: 61)

このことについて、Cattell (1978) は次の (36) のように説明している。

(36) As any good dictionary (e.g. the Shorter Oxford) will confirm, *believe* has, among others, the following senses: (i) ‘to credit, give credence to’; (ii) ‘to hold it as true that’. Note that sense (i) implies believing something that is told to you, whereas sense (ii) does not necessarily involve being told anything. I may HOLD something as true simply as a result of my own thinking, or an inner impulse; but to CREDIT something is to believe what someone else has put to me (either in speech or in print). Now any sentence of the form *Why do you believe the claim that X ..., the story that X ..., the allegation that X ...?* automatically implies, by the words *claim*, *story*, and *allegation*, that you have heard or read about the notion being cited—that it has a source outside yourself. Therefore, *believe* is disambiguated in favor of sense (i). But in a sentence of the form *Why do you believe that X?*, no such disambiguation takes place, and so both senses (i) and (ii) are viable.

(Cattell 1978: 64)

つまり、Cattell (1978) は、believe には sense (i) と sense (ii) の 2 つの意味があるが、(35) のように the N + that 節を従えるのは、sense (i) の believe であると述べている。一方、believe が直接 that 節を従えている場合は、sense (i) と sense (ii) の両方の解釈が可能であるという。

believe が持つという sense (i) と sense (ii) の違いは、日本語の「信じている」と「思う」に関してもある程度並行的である。次の (37) と (38) を見てみよう。

(37) a. [太郎が来た]と信じている。

b. [太郎が来た]と思う。

(38) a. [太郎が来たという主張]を信じている。

b. *[太郎が来たという主張]を思う。

(37a,b) のように、「信じている」と「思う」はどちらも文を補部にとる。しかし、(38a,b) のように、「信じている」は複合名詞句を補部にとるが、(38b) のように、「思う」は原則として複合名詞句を補部にとらない。¹ すなわち、(36) の説明における believe の sense (i) は「信じている」に近く、sense (ii) は「思う」に近いということである。

さらに、Hegarty (1992) は、Cattell (1978) による動詞の 3 分類を踏襲しつつ、重要な指摘をしている。Cattell (1978) と比較して小規模ではあるが、Hegarty (1992) による動詞の 3 分類を表 3 に示す。

表 3 : Hegarty (1992) による動詞の分類

propositional [+E]	response stance [-E]	non-stance [-E]
believe	accept	announce
think	agree	emphasize
say	deny	forget
assume	admit	mention
suppose	verify	notice
conclude	confirm	recall
maintain		regret
claim		recognize
assert		know

(Hegarty 1992: 213)

表 3 から分かるように、Cattell (1978) が volunteered stance verbs と呼ぶ動詞を、Hegarty (1992) は propositional と呼んでいる。また、[+E] は [+Extraction] の略であり、後続する that 節からの抜き出しが可能であることを表している。その反対に、[-E] は後続する that 節からの抜き出しが不可能であることを表している。

上で述べたように、Cattell (1978) は、v-stance 動詞は原則として the N + that 節を従えることができず、r-stance 動詞と n-stance 動詞は the N + that 節を従え

¹ 「思う」という動詞が「原則として」複合名詞句を目的語にとらないと述べたのは、「思う」という動詞には、(37b) のように命題の真実性に対する推定判断を表す用法とは別に、いわば「考える」に近い意味で用いられる場合があり、その場合には名詞句を目的語にとることができるからである。次の (i) には、2 つの用法の「思う」が混在している。(i) における二重下線部の「思う」は、「考える」の意味に近い。

(i) 自分の出来る事は少ないが、この世にはいい、親切な人が多く、その人たちの事を思うのは幸福だと思う。その人の事を思うと嬉しくなる人が実に多いのは楽しい事と思う。
(武者小路実篤『美愛真』)

ることができる」と主張している。それに加えて、Hegarty (1992) は、v-stance 動詞は、目的語位置からの it 外置を許さないということを指摘している。次の (39) を見てみよう。

- (39) a. I regret it that John left.
b. I mentioned it that John left.
c. I believe it that John left. (Response stance intepretation only)
(Hegarty 1992: 213)

n-stance 動詞に分類される (39a) の regret と (39b) の mention は、it + that 節を従えることができる。また、(39c) の believe は、r-stance 動詞としての解釈、すなわち (36) の説明における sense (i) の解釈であれば、目的語位置からの it 外置が可能である。次に、(40) を見てみよう。

- (40) *I {suppose / claim} it that John left. (Hegarty 1992: 213)

(40) から明らかなように、v-stance 動詞の suppose と claim は、目的語位置からの it 外置を許さない。

Cattell (1978) と Hegarty (1992) による説明が正しければ、the N + that 節を従えることができる動詞と、目的語位置からの it 外置を許す動詞は共通しているということになる。次の 6.4 節では、Cattell (1978) による動詞の 3 分類と、中右 (1983) による既定性の概念を関連付けて議論する。

6.4 Cattell (1978) による動詞の 3 分類と既定性

6.2 節で述べたように、中右 (1983) にしたがえば、目的語位置からの it 外置における it は既定的 it である。したがって、目的語位置からの it 外置が用いられる場合、「that 節の事柄の知識が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識にある」ということになる。このことと、6.3 節で紹介した Cattell (1978) による動詞の 3 分類と、Hegarty (1992) の観察は、どのように関係しているだろうか。Cattell (1978) が分類している 3 種類の動詞のおおまかな特徴を、次の (41) に再掲する。

- (41) a. v-stance 動詞は、主語が命題の真実性を主張する動詞である。
b. r-stance 動詞は、既存の命題に対して、主語が肯定や否定などの意見を述べる動詞である。
c. n-stance 動詞は、v-stance 動詞や r-stance 動詞とは異なり、that

節の命題が話し手と聞き手の共有知識となっている場面でも用いることができる動詞である。

v-stance 動詞は、that 節の命題の真実性を主語が主張する動詞であるため、that 節の内容が「発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題」であってはならない。すなわち、v-stance 動詞が従える that 節の内容は非既定的であると考えられる。しかし、目的語位置に既定的 it を置いて that 節を外置すると、that 節の内容はあらかじめ確定した話題であることになってしまう。したがって、v-stance 動詞と既定的 it が持つ性質が相容れないために、v-stance 動詞は目的語位置からの it 外置を許さないと考えられる。

一方、r-stance 動詞は、既存の命題に対して主語が肯定や否定などの意見を述べる動詞であり、n-stance 動詞は that 節の命題が話し手と聞き手の共有知識となっている場面でも問題がない動詞である。つまり、r-stance 動詞と n-stance 動詞が従える that 節の内容は、既定的であっても問題がないと言える。したがって、r-stance 動詞と n-stance 動詞は、目的語に既定的 it を置いて that 節を外置し、that 節の内容があらかじめ確定した話題であることを明示しても、その性質と矛盾することがないため、目的語位置からの it 外置を許すと考えられる。また、r-stance 動詞と n-stance 動詞は、後続する that 節からの抜き出しを許さない動詞である。抜き出しに関しても、r-stance 動詞と n-stance 動詞が従える that 節の内容はあらかじめ確定した話題であるため、抜き出しが許されないと考えられる。

また、6.3 節で述べたように、Cattell (1978) と Hegarty (1992) に従えば、the N + that 節を従える動詞と、目的語位置からの it 外置を許す動詞は、共に r-stance 動詞および n-stance 動詞である。このことにも、既定性の概念が関与している。次の (42) に示すように、主節現象は複合名詞句内には生じない。

- (42) a. *[Bill's claim that each part he examined carefully] is clearly false.
(Hooper and Thompson 1973: 486)
(中右 1983: 588)
- b. *[The car which only rarely did I drive] is in excellent condition.
(Hooper and Thompson 1973: 489)
(中右 1983: 588)
- c. *[The boy that is, I think, our best player] will graduate next year.
(Hooper and Thompson 1973: 489)
(中右 1983: 588)
- d. *Sally plans for Gary to marry her, and he resents [the fact that marry

her he will].

(Hooper 1975: 120)

(中右 1983: 588)

(42) を統語論的に分析する場合は、複合名詞句制約 (The Complex NP Constraint, Ross 1967: 127) に説明を求めることになるだろう。しかし、中右 (1983) は、主節現象が複合名詞句内に生じないのは、複合名詞句が既定領域を成すからであると主張している。第 5 章で述べたように、中右 (1983) によれば、次の (43) に示すように文主語内に主節現象が生じないのは、文主語が既定的であるからである。

(43) a. *That never in his life has he had to borrow money is true.

b. *That over the entrance should you hand the gargoyle was written in the plans.

(Hooper and Thompson 1973: 476)

(中右 1983: 584)

つまり、中右 (1983) に従えば、複合名詞句に主節現象が生じないことと、文主語に主節現象が生じないことは、どちらも既定性という概念によって説明されるということになる。

複合名詞句が既定領域を成すのであれば、次の (44) に示すように、the N + that 節に従えるのが r-stance 動詞と n-stance 動詞に限られるという事実も説明できる。

(44) a. v-stance 動詞 :

*John {thought / supposed / said / imagined / reckoned / claimed} the {fact / allegation / story / claim / rumor} that she killed him.

(Cattell 1978: 65)

b. r-stance 動詞 / n-stance 動詞 :

John {regretted the fact / forgot the fact / doubted the story / denied the allegation / admitted the fact / accepted the claim / realized the fact} that Sue killed Harry.

(Cattell 1978: 64)

v-stance 動詞に従えるのは非既定的命題であるため、(44a) のように、既定領域を成す the N + that 節に従えることはできない。一方、r-stance 動詞と n-stance 動詞は既定的命題に従えるので、(44b) のように、同じく既定領域を成す the N + that 節を問題なく従えることができると考えられる。このことは、6.3.3 節で触れた日本語の「信じている」と「思う」に関しても同様である。

- (45) a. [太郎が来た]と信じている。
 b. [太郎が来た]と思う。
- (46) a. [太郎が来たという主張]を信じている。
 b. *[太郎が来たという主張]を思う。

すなわち、日本語の「思う」は非既定的命題に従えるので、既定領域を成す複合名詞句に従えることはできないということである。

6.5 さらに考察

筆者が調査した限り、目的語位置からの *it* 外置において、*it* が随意的な動詞が *it* + *that* 節に従えている例は稀であるが、少数ながら実例を発見することができた。本節では、Cattell (1978)、Hegarty (1992)、中右 (1983) に基づくこれまでの議論を踏まえ、*it* が随意的な動詞が *it* + *that* 節に従えている例を分析していく。まず、続く 6.5.1 節にて *v-stance* 動詞の例を扱い、6.5.2 節にて *r-stance* 動詞および *n-stance* 動詞の例を取り扱う。

6.5.1 *v-stance* 動詞と目的語位置からの *it* 外置

6.5.1.1 *believe*

6.3.3 節で紹介したように、Cattell (1978) によれば、*believe* には「信じている」に近い *sense* (i) と、「思う」に近い *sense* (ii) の 2 つの意味があり、*the N* + *that* 節に従えるのは、*sense* (i) の場合だけである。さらに、Hegarty (1992) による主張も加味すれば、目的語位置からの *it* 外置を許すのは *sense* (i) の *believe* だけであるということになる。このことを、実例観察によって示していく。

まず、次の (47) を見てみよう。

- (47) NIKKI ARAGUZ: I cannot even imagine loving anyone more than him. I can't imagine wanting to share a secret, a little dream or a silly laugh with anyone as much as I do with him. Thomas, your love is a home for my heart.
 DEBORAH ROBERTS (voiceover): A fallen hero in the eyes of the community and his family.
 RAQUEL ARAGUZ: There're no words to express how much hurt, it still hurts. I still can't believe it that he's gone. (COCA)

(47) は、Nikki Araguz が消防士である夫 Thomas を火災で亡くし、その葬儀が

執り行われた場面である。そして、Thomas の姉妹である Raquel Araguz は、下線部のように発話している。Thomas が亡くなったことは既に確定した話題であり、すなわち既定的である。そして、その既定的命題に対して「いまだに信じることができない」と述べている。したがって、既定的 it を目的語に置いて that 節を外置することで、主節が焦点化されていると考えられる。

6.2 節にて、目的語位置からの it 外置における that 節の命題は既定的命題であるため、主節が叙述機能を持っている必要があると述べた。Bolinger (1977) が挙げている次の (48) がそのことを示している。

- (48) a. ?I believed it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
b. Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (*ibid.*)
c. Would you believe it that the election hurt them? (*ibid.*)
d. I positively do believe it that the election hurt them. (*ibid.*: 67)

(48a) の容認性が低いのは、主節 I believed が十分な叙述機能を有していないためであると考えられる。一方、(48b-d) は、主節が否定や疑問、強い肯定などの環境にあるため、焦点が置かれるのに十分な叙述機能を有していると考えられる。上記 (47) も同様に、主節は can't によって叙述機能を有していると考えられる。しかし、Hegarty (1992) は、次の (49) を容認可能であると判断している。

- (49) I believe it that John left. (Response stance interpretation only)
(Hegarty 1992: 213)

(48a) と (49) の容認性の違いについては、2 つの原因が考えられる。一つは、話者による個人差の問題である。sense (i) の believe だけでは叙述機能として不十分であり、主節が否定などを含まなければならないと判断する話者であれば、(48a) や (49) を容認性が低いと判断する可能性がある。もう一つは、判断基準の問題である。Bolinger (1977) が (48a) に疑問符をつけたのは、あくまで (48b-d) と比較して容認性が低いと判断してのことであるという可能性がある。いずれにしても、believe が it + that 節に従える場合、主節が否定などの環境にある場合のほうが容認性が高いと考えられる。事実、このあとに見る (50) と (51) も、主節は否定を含んでいる。

続いて、次の (50) を見てみよう。

(50) ELIZABETH VARGAS: She doesn't remember getting out. Her next memory is lying here underneath this tree. You said you remember lying on your back, looking up at the leaves of the tree and thinking, "I don't wanna be here."

STEPHANIE NIELSON: Yeah.

ELIZABETH VARGAS: "I wanna be home making dinner for my kids."

STEPHANIE NIELSON: Mm-hmm. I couldn't believe it that I was in this situation. (COCA)

(50) では、Stephanie Nielson が、気が付いたら木の下に寝転んでいたという自身の体験について語っている。Stephanie Nielson がそのような経験をしたことは、冒頭でインタビューアーの Elizabeth Vargas が紹介しており、実際にその木の場所を訪れていることがうかがえる。したがって、この例でも *that* 節の内容は既定的であるため、焦点が置かれるべきは「そのことが信じられなかった」という主節の内容である。したがって、*it* を目的語に置いて *that* 節を外置することで、主節が焦点化されていると考えられる。また、ここでも主節は *couldn't* によって叙述機能を有している。

続いて、次の (51) を見てみよう。

(51) MR. HORNBY: It is incredible, actually. I - do you mind me asking if you're over 40?

BLOCK: I'm 45.

MR. HORNBY: Right. Because it seems to me that anyone over 40 has never heard of him and anyone under 40 can't believe it that people over 40 have never heard of him. (COCA)

(51) は、著名なスケートボーダーである Tony Hawk について話している場面である。一重下線部では *it* を目的語に置き、*that* 節が外置されているが、その *that* 節の内容は直前の二重下線部の内容と同等であるため、既定的であると考えられる。したがって、*it* を目的語に置いて *that* 節を外置することで、主節が焦点化されている。また、ここでもやはり、*can't* によって主節が叙述機能を有している。

以上見てきたように、*believe* が *it* + *that* 節に従える場合、*that* 節の内容は既に確定した話題、すなわち既定的命題であり、その真実性が問題となっていない場面であることがわかる。また、主節は原則として、否定などを含むことによって、叙述機能を有している必要がある。

6.5.1.2 expect

expect は表 1 において v-stance 動詞に分類されている。² したがって、Cattell (1978) および Hegarty (1992) に基づけば、expect は it + that 節を従えない動詞であると予測される。しかし、次の (52) に示すように、expect が it + that 節を従える例を挙げている文献がある。

- (52) a. I had expected it that there would be a big turnout (but this is ridiculous—get more chairs). (Kiparsky and Kiparsky 1970: 166)
b. We had expected it that the guests would come late, so we had made careful preparations. (Lysvåg 1975: 133)
c. I never expected (it) that he would be there. (Bolinger 1977: 71)

これは、believe と同様に、expect にも 2 つの意味があるためであると考えられる。Lysvåg (1975) によれば、I expect ... には I am expecting ... と I think ... の 2 つの意味があるという。すなわち、believe に「信じている」に近い sense (i) と「思う」に近い sense (ii) があり、it + that 節を従えるのが sense (i) であったのと同様に、expect にも「予期／期待している」に近い sense (i) と、「思う」に近い sense (ii) があり、it + that 節を従えるのは sense (i) の expect であると考えられる。

6.5.1.3 imagine

imagine も v-stance 動詞に分類されているが、it + that 節を従える場合がある。このことも、believe や expect と同様に、imagine に 2 つの意味があるためであると考えられる。まず、中右 (1983) が挙げている次の (53) と (54) を見てみよう。

- (53) A: Did Bob buy a new car?
(54) B: a. I imagine {so/*it}.
b. I don't imagine {so/*it}.
c. I imagine not. (中右 1983: 561)

(53) の問いは、「Bob が新車を買った」という命題が真であるか否かを尋ねて

² 表 1 では “except [sic]” としたが、これは “expect” の誤りであると思われる。したがって、これ以降、expect は v-stance 動詞に分類されるものとして議論を進める。

いる。その問いに対して、*imagine* を用いて (54a-c) のように応答することが可能であるが、(54a,b) からわかるように、目的語に *so* を置くことはできるが、*it* を置くことはできない。(54) における *imagine* は、*believe* の sense (ii) に相当すると考えられる。すなわち、(54a) の意味は「そう思う」に近く、(54b,c) の意味は「そうは思わない」に近いということである。次に、(55) と (56) を見てみよう。

(55) A: Can you imagine that Bob bought a new car?

(56) B: a. (Yes,) I can imagine it/*so.

b. (No,) I can't imagine it/*so.

c. *I can imagine not.

(中右 1983: 561)

(55) の問いは、「Bob が車を買ったということを想像できるかどうか」を尋ねている。(56) から明らかなように、(55) の問いに対して目的語に *it* を置いて応答することはできるが、*so* を置くことはできない。(56) における *imagine* は、*believe* の sense (i) に相当し、(56a) は「そのことを想像できる」、(56b) は「そのことを想像できない」という意味であると考えられる。

imagine にも *believe* と同様に 2 つの意味があるので、次の (57) に示すように、*it + that* 節を従える場合がある。

(57) a. Joseph wondered if their mysterious disappearance after the census might still be an ongoing controversy. It was hard to imagine it that it would have been forgotten.

(F. Riedemann, *Joseph: The Heart of the Father*)

b. Am I imagining it that since I've returned to the table, she hasn't looked at me once? (R. Lakin, *Getting Old Is Très Dangereux*)

(57) において *it + that* 節を従えているのは、「信じている」に近い *believe* の sense (i) と同様に、「想像する」に近い *imagine* であると考えられる。

6.5.1.4 think

think に関しては、Bolinger (1977) が次の (58) を挙げている。

(58) Who would have thought (it) that things would turn out this way?

(Bolinger 1977: 70)

しかし、筆者の知る限り、Bolinger (1977) のほかに think が it + that 節に従える
と述べている文献はない。³ 実例として見られるのは、次の (59) のような例
である。

- (59) a. Remarking on Lincoln's appearance in New England, the Chicago *Democrat* sneered, "Who would have thought it that Massachusetts would ever become so doubtful that it would be necessary to send to Illinois for aid? Well, Illinois has no use for her Whigs."
- (M. Burlingame, *Abraham Lincoln: A Life (Volume 1)*)
- b. Who would have thought it that out of all the great Masters that had passed through her bed chambers it would be the fool that brought about her freedom. (W. Schreiber, *Usurper of The Gods (Book 3)*)
- c. "Well, well, who would have thought it—that Jeremy Hastur is still young enough to take field license with his playmates!"
- (M. Z. Bradley, *Two to Conquer*)

(59a-c)の主節はどれも、Bolinger (1977) が挙げている (58) と同じく、Who would have thought it という形をとっている。Who would have thought it は、「誰がそのようなことを思っただろうか（誰も思わなかっただろう）」という意味であるため、that 節の内容は話し手の中で既に定まっている、すなわち既定的であると考えすることは可能である。また、Who would have thought it? という文は、新英和大辞典やリーダーズ英和辞典がそのままの形で扱っており、固定化された表現であることがうかがえる。したがって、it + that 節を従えるのは、Who would have thought という形が持つ特性であると考え、think は it + that 節を従えにくいと結論づけたい。⁴

think が it + that 節を従えない理由は、現時点では定かではない。Swan (2005)

³ Kim (2014) は、think が it + that 節を従えている例として、*Corpus of Contemporary American English (COCA)* から次の (ii) を挙げている。

(ii) I think it that God is on your side. (COCA)

しかし、(ii) の例は、COCA による誤りであり、実際には次の (iii) のように発話されている。

(iii) BLITZER: [...] Give us in a sentence or two, the most important message you want the folks to leave with.

OSTEEN: I think it's that God is on your side.

(iii) における Osteen の発話は、“I think it(=the most important message)’s that God is on your side.” という意味であると理解できるため、これは think が it + that 節を従えている例ではなく、この場合の it は単純に前方照応の指示詞である。

⁴ Bolinger (1977) によれば、次の (iv) に示すように、suppose は Who would have ... に続く場合であっても、it + that 節を従えない。

(iv) Who would have supposed (*it) that things would turn out this way? (Bolinger 1977: 70)

によれば、次の (60) と (61) に示すように、think が意見を述べるために用いられる場合には、通例、進行形にはならない。

- (60) a. I don't think much of his latest book.
b. *I'm not thinking much of his latest book. (Swan 2005: 588)
- (61) a. Who do you think will win the election?
b. *Who are you thinking will win the election? (ibid.)

一方、次の (62) と (63) のように、consider や plan に近い意味で用いられる場合には、進行形が可能である。

- (62) a. You're looking worried. What are you thinking about?
b. *You're looking worried. What do you think about? (Swan 2005: 588)
- (63) I'm thinking of changing my job. (ibid.)

したがって、believe と同様に、think にも「考える」と「思う」のように 2 つの意味があるようにも思えるが、実際には think は it + that 節を従えにくい。

上記 (62a) や (63) に示したように、think が「考える」という意味で用いられる場合、about もしくは of とともに用いられることが関係している可能性もある。つまり、believe は「信じている」に近い sense (i) の意味で用いられる場合であっても前置詞を必要としないのに対し、think は前置詞を必要とするため、it + that 節を従えにくいという可能性である。それならば、think {about/of} it that ... の形をとる例があってもよいはずだが、筆者が調査した限りではそのような例は見られない。

あるいは、think が it + that 節を従えにくいことには、think の叙述機能が関係している可能性がある。つまり、think が既定的命題を従えるのに十分な叙述機能を有していないという可能性である。例えば、次の (64) のように、think it ADJ that ... の形であれば問題がない。この場合は、形容詞によって十分な叙述機能を有しているために it + that 節を従えることができると考えられる。

- (64) a. As Mr Wolski ate his usual morning toast and marmalade he was listening to a spokesman from the RSPB saying, 'We think it possible that the eagle will try to find high ground. (COCA)
- b. Charity with enough resilience to laugh, thought it unlikely that Charles would make a particularly docile prisoner and Clarissa said she'd write and tell him to behave himself. (COCA)

- c. Hank was so used to being deserted by his mother that he did not think it odd that she should go out on the first evening in ten weeks that his father had been able to spend at home. (COCA)

ただし、think it ADJ that ... における it は義務的であり、この点についても説明が必要である。(64) のような例については、第 7 章にて議論する。

6.5.2 r-stance 動詞／n-stance 動詞と既定的 it

6.5.1 節で示したように、v-stance 動詞に分類される believe などが it + that 節に従える場合、that 節の内容の真実性は問題とならず、主節に焦点が置かれる。では、次の (65) に示すように、r-stance 動詞と n-stance 動詞の場合、it の有無は意味にどのような影響を与えるであろうか。

- (65) a. I regretted (it) that he was late.
 b. They confirmed (it) that you had passed the entrance exam.
 c. He resented (it) that his friends worked so hard.
 d. They announced (it) that she had passed her exams.

(Rothstein 1995: 519)

v-stance 動詞とは異なり、r-stance 動詞と n-stance 動詞は本質的に既定的命題に従えるため、it の有無によって大きな違いは生じないように思われる。しかし、Rothstein (1995) や Bolinger (1977) は、it の有無によって生じるニュアンスの違いを説明している。

Rothstein (1995) は、次の (66a,b) の最小対立例を挙げ、両者が持つ意味の違いを説明している。

- (66) a. John and Mary have announced ___ that they got married.
 b. John and Mary have announced it that they got married.

(Rothstein 1995: 520)

Rothstein (1995) によれば、it を持たない (66a) は、「John と Mary が結婚した」という that 節の内容が、話し手にとって新しい情報であるという意味合いがある。一方、it を持つ (66b) は、John と Mary が、話し手が既に知っている情報を発表した場合においてより適切であるという。また、Bolinger (1977) は、次の (67a,b) を挙げている。

- (67) a. You might at least have announced __ that you were moving in on us.
 b. You might at least have announced it that you were moving in on us.

(Bolinger 1977: 69)

(67a,b) についてもやはり、it の有無により、that 節の内容が未知の事柄か既に定まっている事柄か (something previously unknown and something already settled) という違いがあるという。

Bolinger (1977) が挙げている次の (68) は、どのような場面において it が適切となるかを示している。

- (68) a. If he asks you to help him, just say you regret (*it) that you can't.
 b. You shouldn't regret it that you're here. (Bolinger 1977: 69)

(68a) と (68b) の違いは、that 節の内容が特定の出来事であるかどうかという点である。(68a) は、「もし彼があなたに助けを求めてきたら」という仮定の話をしており、that 節の内容はまだ起こっていない不特定の出来事であるため、it を置くのは不適切であると考えられる。一方、(68b) は、you に相当する話し相手が実際にその場にいる場面で発話されていると推察されるため、that 節の内容は既に起こっている特定の出来事である。

さらに、Rothstein (1995) は、自然発話の例として次の (69) を挙げている。

- (69) I regret it that I am falling asleep. (Rothstein 1995: 521)

Rothstein (1995) によれば、(69) はディナーパーティーが行われている最中に発話された文である。すなわち、(69) の話し手は、「このディナーパーティーの最中に眠ってしまいそうである」という現在の状況を残念がっているので、ここでも that 節の内容は特定の出来事であると考えられる。

以上のことから、r-stance 動詞と n-stance に動詞が従える that 節の内容は本来的に既定的ではあるが、it + that 節に従える場合には、that 節の内容が特定の出来事を指しており、話し手にとって確定していると考えられる。続く 6.5.2.1 節から 6.5.2.6 節では、事例観察を通してこのことを確認していく。

6.5.2.1 accept

accept について、まずは次の (70) を見てみよう。

- (70) “You know,” said he in a quiet, reasoning tone, “she thinks quite highly of

you. You seem to be something of a model to her.” “Clarissa? Surely not, sir!” “Indeed it’s true, Jeremy. She greatly admires the single-minded way that you have applied yourself to the study of law.” “Oh?” said I, making a question of it as I considered the claim. I knew that Sir John would not lie regarding such a matter, and so I accepted it that Clarissa had praised me.

(COCA)

(70) では、二重下線部において、Clarissa が話し手を賞賛していることを知らされる。それを受けて、話し手は一重下線部のように述べる。つまり、「Clarissa が話し手を賞賛している」という事柄は、すでに話し手の中に確定した話題として存在しており、特定化されていると考えられる。

次に、(71) を見てみよう。

(71) “Let’s talk,” she said, as if they hadn’t been talking non-stop for two hours. The remaining hour was too little time to be wasted in beating around the bush and making boats. But since he wouldn’t start talking, she said simply: “We have to accept it that sometimes people just walk past each other.” “The whole irony of it is that they realize it the moment they meet,” he said.
(COCA)

(71) は、出会ったばかりの男女が、お互いに運命を感じているにも関わらず、別れの時が近づいているという場面である。(71) では、(70) とは異なり、that 節の内容が前の文脈に明白に現れているわけではない。しかし、運命を感じているにも関わらず別れなければならないという場面が、that 節の「ときに人々はお互いにすれ違うだけである」という事柄を、間接的にではあるが話し手にとって確定した話題にしていると言える。

6.5.2.2 resent

resent については、Huddleston and Pullum (2002) が次の (72) の例を挙げ、it は意味の上で明白な違いを生まないと述べている。

- (72) a. She resents __ that they appointed someone less qualified than her.
b. She resents it that they appointed someone less qualified than her.

(Huddleston and Pullum 2002: 963)

まずは、次の (73) を見てみよう。

- (73) To save money, Carlyle was making some of their Christmas presents this year—silver dollars drilled through and beaten into rings for the boys, and strung into necklaces for the girls. It was the sort of thing he used to do as a boy; he had been creative, artistic. It was sweet, Betsy thought.

To Fred, even this exercise in thrift savored of extravagance—silver dollars! “Are they that hard up?” he asked. “What’s happened to all Carlyle’s money?” He had always resented it that Carlyle had simply had money, whereas he had had to make it, a crumb at a time.

(John Updike, *The Afterlife: And Other Stories*)

(73) では、子供たちへのクリスマスプレゼントに、Carlyle が銀ドルを使ってアクセサリーを作っており、Fred は Carlyle が自分より裕福であることに憤りを感じている。したがって、that 節の「Carlyle がお金を持っている」という事柄は、前の文脈に既出であるため、確定した話題になっていると考えられる。

次に、(74) を見てみよう。

- (74) “No. You were an intelligent, serious student. Perhaps anxious. Mature for your age. You asked for extra-credit assignments in homework and they were always diligently done.” I laughed, surprised and annoyed. “That wasn’t me, Mr. Cantry.” “Please call me Virgil. Yes, surely it was you.” I resented it that this man, a stranger, should claim to know more about me than I knew about myself. (COCA)

(74) は、話し手が苦手としていた教師の Cantry と久々に再会した場面である。前の文脈では、話し手がどのような学生であったかを Cantry が語っている。それに対して話し手は、Cantry が話し手のことを話し手自身よりもよく知っているかのように述べることに對して憤り、下線部のように述べている。やはり、この場面でも、that 節の内容は文脈に既出であり、確定した話題となっている。

6.5.2.3 admit

admit の例として、次の (75) を見てみよう。

- (75) We’re moving toward—the national conversation is moving toward a consensus on the left, we ought to abolish ICE. If we did, what would happen? JESSICA VAUGHAN: Well, the effect is that there would be no rules or limits on immigration. It would be de facto open borders. And that is, I think,

what some of the people on the left want. At least they're honest enough to admit it that they want there to be open borders. (COCA)

(75) は、ICE (Immigration and Customs Enforcement, アメリカ合衆国移民・関税執行局) を廃止する方向に進んでいることについて話している場面である。二重下線部において、ICE が廃止されれば事実上の脱国境となることや、左派の中にそれを望んでいる人がいるということが述べられている。そして、一重下線部において、「少なくとも左派の人々は、脱国境を望んでいるということを認めるほどには正直だ」と述べている。したがって、この例でも、*that* 節の事柄は確定した話題となっていると言える。

6.5.2.4 realize

realize に関して、次の (77) を見てみよう。

(77) Nicole was still alive when you came home. [...] She scratched you out of animal instinct. She was just fighting to survive. You knew you had to get her to hospital. But you didn't realize it that she had already died in your front seat. (COCA)

(77) は科学捜査班の活躍を描くドラマからの例である。男性が家に帰ると、恋人の Nicole が苦しんでいるのを発見し、車で病院に運んでいたが、Nicole はすでに車内で亡くなっていたということについて述べている。Nicole が車内で亡くなっていたことは、科学捜査によって既に明らかになっている。したがって、ここでも *that* 節の内容は話し手にとって確定した話題である。

6.5.2.5 know

Bolinger (1977) によれば、叙実動詞には *it* を要求するものがある。次の (76)-(82) は Bolinger (1977) が挙げている叙実動詞の例である。

- (76) a. *He can't swallow __ that you dislike him.
 b. He can't swallow it that you dislike him. (Bolinger 1977: 68)
- (77) a. *She hid __ that she was involved.
 b. She hid it that she was involved. (ibid.)
- (78) a. *He let __ out of the bag that I was the one they were looking for.
 b. He let it out of the bag that I was the one they were looking for. (ibid.)
- (79) a. *He spilled __ that you were the thief.

- b. He spilled it that you were the thief. (ibid.)
- (80) a. *They pooh-poohed __ that we were responsible.
- b. They pooh-poohed it that we were responsible. (ibid.)
- (81) a. *I just love __ that you are moving in with us.
- b. I just love it that you are moving in with us. (ibid.)
- (82) a. *We welcome __ that we are to have the benefit of your criticism.
- b. We welcome it that we are to have the benefit of your criticism. (ibid.)

しかし、Bolinger (1977) は、次の (83) を挙げ、know は it + that 節を従えないと述べている。

- (83) a. He knows __ that I can best him.
- b. *He knows it that I can best him. (Bolinger 1977: 69)

know は n-stance 動詞に分類されるため、know が it + that 節を従えないのであれば、Cattell (1978) および Hegarty (1992) に基づく分析では予測できない。

Bolinger (1977) は、know が it + that 節を従えないのは、know は聞き手がある事柄をはじめて知るような場合にも用いることができるからであると述べている。Bolinger (1977) にはこれ以上の説明がないため、はっきりとしないが、おそらく次の (84) のように、叙実動詞ではない用法の know が関係していると思われる。

- (84) a. I don't know that I can finish it by next week.
(オックスフォード現代英英辞典)
- b. *私がそれを来週までに終わらせられるということを私は知らない。
(拙訳)

(84a) の I don't know を「私は知らない」と解釈すると、(84b) のように矛盾が生じる。したがって、(84a) の I don't know は、I'm not sure 程度の意味であると推察される。また、次の (85) に示すように、know は通例、文代用形の so をとらない。

- (85) A: You're late.
B: {I know. / I know that. / *I know so.} (Swan 2005: 540)

しかし、次の (86) のように、I know so. という形が現れる場合がある。

- (86) a. “I hope so,” I whisper.
 She reaches out and squeezes my arm. “I know so.”
 (J. Porter, *Easy on the Eyes*)
- b. Do I think so? No, I don’t think so; I know so.
 (E. Lefèvre, *Reminiscences of a Stock Operator*)
- c. ‘You think so?’ I meant it lightly, but in a flash her humor has gone.
 ‘I know so,’ she said. (J. Herbert, *Others*)

(86a) では hope と know が、(86b,c) では think と know がそれぞれ対比されている。すなわち、(86) における I know so は、「そう {望んでいる／思っている} という程度ではなく、そう確信している」というような意味であると推察される。このような場合の know も、叙実動詞ではない know の用法であると考えられる。

実際には、know が it + that 節をとっている例は存在しないわけではない。例として、次の (87) を見てみよう。

- (87) MEREDITH VIEIRA: Did he say anything about the other couple?
 CAROLYN SAVAGE: They didn’t know. They didn’t know it had happened.
 SEAN SAVAGE: They didn’t know it that this had happened yet. (COCA)

(87) は、Sean と Carolyn は夫婦であり、Carolyn は人工授精の際に誤って他の夫婦の受精卵を移植されてしまったことについて取材を受けている場面である。そして、Sean は下線部のように発話している。この場面では、他の夫婦 (the other couple) が、そのような医療ミスが起こっていることを知っていたかどうかの問題となっているため、that 節の内容は確定した話題である。そこで、it を目的語に立てて that 節を外置することで、医療ミスが起こったことではなく、「他の夫婦は知らなかった」ということに焦点が置かれていると考えられる。

次に、(88) を見てみよう。

- (88) O’REILLY: As usual I did my job. I asked the tough questions about Mrs. Obama because there was a perception and everybody knows it that she was not happy-go-lucky. (COCA)

(88) の場合、主節は everybody knows であるため、話し手は that 節の内容を周知の事実であると考えていることがうかがえる。したがって、ここでも that 節

の内容は話し手にとってすでに確定していると考えられる。

また、次の (89) に示すように、*wouldn't you know* が *it + that* 節を従えている例が散見される。

- (89) a. COOPER: [...] Wouldn't you know it that John Edward says this happens to him all the time with microphones, something he says has to do with psychic energy, coincidence? (COCA)
- b. Well wouldn't you know it that while the officer had his hands in the man's left front pocket the intoxicated driver looked straight at him and slurred the words, "I know what you're trying to do ... you're trying to feel of my peter!" (G. D. Ward, *Memories of a Small-Town Cop*)
- c. Well wouldn't you know it that fate finally stepped in.
(E. G. McMillan, *The Journey of an American Boy*)
- d. [...] I'm real spooked right now and wouldn't you know it that Halloween is two weeks away [...] (D. Atkins, *You Weren't Here*)

(89) のような例に関して、「主張の焦点が主節にある」と主張するのは無理があるように思われる。では、*wouldn't you know* という表現はどのようなときに用いられるのだろうか。次の (90) に *Longman Dictionary of Contemporary English* による説明を示す。

- (90) *spoken wouldn't you know (it)*
used to say that something is not at all surprising:
I was told in no uncertain terms that Helen, wouldn't you know it, didn't approve.
(Longman Dictionary of Contemporary English)

(90) の説明によれば、*wouldn't you know* は「まったく意外でないことを述べるのに用いられる」という。おそらく、日本語の「やはり」、「案の定」、「察しのとおり」といった表現に近いと思われる。つまり、*wouldn't you know* によって導入される *that* 節の内容は、「発話の時点に先立って、あらかじめ確定しており、話し手の意識の中にある」と考えることができる。このことが *that* 節の命題を既定的にし、*it* を目的語に立たせていると考えられる。

6.5.2.6 understand

ここまでは、Cattell (1978) もしくは Hegarty (1992) の分類に含まれている動詞について見てきたが、本節では、Cattell (1978) と Hegarty (1992) が挙げてい

ない understand について見ていく。次の (91) に示すように、understand は the N + that 節に従えるので、r-stance 動詞もしくは n-stance 動詞に分類されると考えられる。

- (91) a. “I can not understand the fact that hardly any resistance was offered in Cologne,” he complains. (TMC)
- b. So too they can understand the fact that fruit is more valuable than snowballs because it can feed people and therefore shouldn’t be lobbed around in food wars. (COCA)
- c. She understood the fact that her refusal to get married was creating distress to her parents. (COCA)

understand が it + that 節に従える例に関しては、Bolinger (1977) が次の (92) を挙げている。

- (92) a. *I understand it that the election hurt them.
- b. I can understand it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)

(92a) のように、主節が I understand の場合は、it を目的語に立てて that 節を外置することはできない。一方、(92b) のように、I can understand であれば可能である。(92) を見る限り、understand も believe と同様に、主節の焦点化を促す要素が必要であるように思われる。

実例として、まずは次の (93) を見てみよう。

- (93) On one occasion my friend Arthur Duroseau had some business matter to talk over with Zora and asked me to go with him, which I did. (It seemed that he had pawned his watch with Zora and wanted to get it back.) When we arrived, Zora was working with a young informant whose name I recall as Louis, though it could have been something else. Of course we had interrupted their work session, and I could understand it that she was irritated. (COCA)

(93) では、話し手は友人とともに Zora のもとを訪れたが、そのとき Zora はインフォーマントと作業中であり、その作業を邪魔してしまったと述べられている。そして、話し手は下線部のように述べている。ここでは、「Zora がいらいらしていた」という that 節の内容は、文脈に既出というわけではない。しかし、

作業を邪魔してしまったという前の文脈から、Zora がいらいらしていたことが推察される。もしくは、話し手は Zora がいらいらしているのを実際に目撃しているため、話し手にとって確定していると考えられる。ここでは、作業を邪魔してしまったので、Zora がいらいらしているのも「理解できた」という主節の内容に焦点を置きたいのだと考えられる。したがって、主節を焦点化するために、it を目的語に立てて that 節を外置している。

続いて、次の (94) を見てみよう。

- (94) I wasn't given any action sequence. I didn't know what they looked like or whatever. So I then --- and it was like the movie was in release in three weeks' time. It was what we call a wet print when it went into the theaters because it was so behind. And then it opened at The Pavilion in Piccadilly in London and I went on a Sunday afternoon and saw it. And that was the first time I'd ever seen " Dr. No. "And I understood it that I was just writing the main title theme, but then every time he says, ' I'm Bond, James Bond,' and dah, dah, and it laid it all over the damn place. (COCA)

(94) は映画 007 シリーズの作曲者として知られる John Barry による発話である。John は 007 シリーズの一つであるドクター・ノオの曲を作るにあたり、映像を見せられずに作曲をし、映画館ではじめて映像を見たと言っている。当然、John が 007 シリーズの作曲者であることは明らかであり、下線部における that 節の内容は重要ではない。映画館に行って実際の映像を見て、自分が作曲者であることをはじめて「理解した」ということに焦点が置かれるべきである。したがって、主節を焦点化するために、it を目的語に立てて that 節を外置していると考えられる。また、この例においては、主節は I understood であり、法助動詞や肯定を強調する要素などは含んでいない。したがって (94) は、believe とは異なり、understand は焦点化を促す要素がなくとも十分な叙述機能を有する動詞である可能性を示唆している。

最後に、次の (95) に示すように、understand は Do I understand it that ... ? という形をとる例が見られる。

- (95) a. Do I understand it that you, as the chairman of the Republican National Committee, will support the recently converted Republican governor of Louisiana, Buddy Roemer, even if the state party endorses Congressman Clyde Holloway? (COCA)
- b. Do I now understand it that the whole programme is subject to max-

imum price?

(BNC)

このような例については、第 7 章にて **take it that ...** と関連付けて議論する。

6.6. おわりに

本章では、目的語位置からの **it** 外置の中でも、**it** が随意的な事例を取り扱った。目的語位置からの **it** 外置における **it** は既定的 **it** であるという中右 (1983) の主張に加えて、Cattell (1978) および Hegarty (1992) による動詞の 3 分類に基づき、分析を試みた。

第 7 章 目的語位置からの it 外置 2 : it が義務的な場合

7.1 はじめに

第 6 章では、目的語位置からの it 外置の中でも it が随意的な事例を取り扱ったが、本章では、目的語位置からの it 外置の中でも、it が義務的に要求される事例を取り扱う。具体的には、次の (1)-(5) に示す動詞や、(6) の V it ADJ that ... の形を取る例を分析する。

- (1) a. I take it that you are enjoying yourselves.
b. *I take ___ that you are enjoying yourselves.
(Quirk *et al.* 1989: 1184, fn)
- (2) a. Rumour has it that they're getting divorced.
b. *Rumour has ___ that they're getting divorced.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)
- (3) a. I like it that she has good manners.
b. *I like ___ that she has good manners. (Rothstein 1995: 514)
- (4) a. I just love it that you are moving in with us.
b. *I just love ___ that you are moving in with us. (Bolinger 1977: 68)
- (5) a. We welcome it that we are to have the benefit of your criticism.
b. *We welcome ___ that we are to have the benefit of your criticism.
(*ibid.*)
- (6) a. I find it hardly surprising that he tried to retract his statement.
b. *I find ___ hardly surprising that he tried to retract his statement.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)

Kim and Sag (2005) は、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar, HPSG) の考え方にに基づき、語彙的構造 (lexical construction) によって目的語位置からの it 外置を説明しようと試みている。Kim and Sag (2005) は、目的語位置からの it 外置を許すのは、名詞句と that 節のどちらも従えることができる動詞であると主張している。例として、次の (7)-(9) を見てみよう。

- (7) a. They didn't even mention {his latest promotion / that he was promoted recently}.
b. They never mentioned it to the candidate that the job was poorly paid.
(Kim and Sag 2005: 198)
- (8) a. They demanded {justice / that he should leave}.

- b. They demand it of our employees that they wear a tie. (*ibid.*)
- (9) a. He said {many things / that I was not the person he was looking for}.
- b. He wouldn't dare say it that I am not the right man for the job. (*ibid.*)

(7)-(9) の a 文から明らかなように、mention, demand, say は名詞句と that 節のどちらも従えることができる。そして、(7)-(9) の b 文のように、それらの動詞は目的語位置からの it 外置を許す。しかし、(1)-(5) に示したような動詞は、名詞句は従えるが、that 節を従えることはできない。それにも関わらず、(1)-(5) の動詞は目的語位置からの it 外置が可能であるため、Kim and Sag (2005) による主張によって説明することはできない。Kim and Sag (2005) は、このような動詞に関しては、少数の例外として扱うに留めている。

本章では、第 6 章で取り扱った it が随意的な事例と同様に、it が義務的な事例においても it は統語的に導入される要素ではなく、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示す。

7.2 take it that ...

本節では、take を取り扱う。(10) に示すように、take は it + that 節を従えるが、この場合、it は義務的である。

- (10) a. I take it that you are enjoying yourselves.
- b. *I take __ that you are enjoying yourselves.

(Quirk *et al.* 1989: 1184, fn)

英和辞典における take it that ... の扱われ方としては、(11) のように「思う」という訳を与えられている場合や、(12) のように「ですね」という確認の解釈を与えられている場合がある。

- (11) a. I take it that you're not interested.
あなたは興味がないと思います。 (ランダムハウス英和辞典)
- b. I took it that this was my last chance.
これが最後のチャンスだと思った。 (ジーニアス英和辞典)
- c. I {imagine / take it that / assume} you are all in favor of this plan.
この案に諸君も全員賛成のことと思います。 (新英和大辞典)
- (12) a. I take it that he has not been invited.
彼は招かれていないということですね [と解釈してもいいのですね] 。 (新編英和活用大辞典)

- b. I take it (that) you don't want to go.
あなたは行きたくないんですね。 (ルミナス英和辞典)
- c. I can take it that anyone who has not put their hand up won't take part, then?
手を挙げない人は参加しないと受け取っていいんですね？
(新英和大辞典)

take it that ... における it は、take が that 節を従えることができないために、統語的に導入された「虚辞」であるとも考えることもできるかもしれない。しかし、本節では、take it that ... における it も既定的 it である可能性を示す。

7.2.1 他の実詞に相当する it

次の (13) に示すように、Bolinger (1977) は、イディオムに含まれる it の中で、他の名詞句に置き換えることができる it を挙げている。Bolinger (1977) はこのような it を「他の実詞に相当する it (*it matched with other substantives*)」と呼び、it が指示対象を持たない「虚辞」ではなく、前方照応の代名詞であることの証拠の一つとしている。

- (13) a. I have {it/the word} on good authority that you are to be selected.
b. She gave {it/the game/the fact} away that we had played the joke.
c. They let {it/the fact} be known that their next move would be an economic one.
d. I intend to make {it/the news} public that I am a candidate.
e. They bruited {it/the rumor} about that arson was involved.
f. Our interview brought {it/the fact} into consciousness that we had a deep rapport.
(Bolinger 1977: 75)

また、次の (14) に示すように、Rothstein (1995) も Bolinger (1977) と同様に、他の名詞句に置き換えることができる it を挙げ、やはりこのような it は前方照応の代名詞であると述べている。

- (14) a. have it out with — have the matter out with
b. fight it out with — fight the matter out with
c. keep it up — keep up {the work/the appearance}
d. rush it — rush {the matter/the things}
e. buy it (be deceived by) — buy the story

- f. walk it — walk the distance
- g. get it together — get your act together (Rothstein 1995: 527)

さらに、次の (15) に示すように、他の名詞句に置き換えられる *it* は、主語位置に置かれて受動化される場合がある。このことも、*it* が前方照応の指示詞であることを示していると言える。

- (15) a. It was rushed, but we finally got the job done.
 - b. It was kept up for a long time.
 - c. It's being fought out with the management right now.
- (Rothstein 1995: 527)

しかし、Bolinger (1977) と Rothstein (1995) の両者とも、次の (16) に示すような *I take it that ...* の *it* は、置き換えるのにふさわしい名詞句が存在しないと述べている。

- (16) I take it that you wanted something else. (Bolinger 1977: 75)

一方、次の (17) のように、大竹 (2009) は *take* が *the fact + that* 節を従えている例を挙げている。

- (17) DR. MARK GREENE: You can't take the fact that I'm your boss!
 - DR. DOUG ROSS: That's typically narcissistic of you, Mark. I can't take the fact that anyone's my boss. (ER (テレビドラマ))
- (大竹 2009: 160)

たしかに、次の (18) に示すように、*take* が *the fact + that* 節を従えている例は (17) 以外にも見られる。

- (18) a. You chose to believe a stinking little rat who can't take the fact that a woman might just be better at his job than he is! (BNC)
- b. We didn't take any action because I take the fact that someone else uses part of your song as a compliment really. (ibid.)

もし、(17) や (18) が、*take it that ...* の *it* を *the fact* に置き換えたものであるならば、*it* が前方照応の代名詞であることを示していると言えるだろう。

7.2.2 大竹 (2009) による分析

本節では、大竹 (2009) による *take it that ...* の分析を紹介する。次の (19) では、*take it that ...* と *imagine, assume* が同義であるものとして扱われている。

- (19) I {imagine / take it that / assume} you are all in favor of this plan.

この案に諸君も全員賛成のことと思います。 (新英和大辞典)

しかし、大竹 (2009) は、*take it that ...* の機能を詳細に説明している。大竹 (2009) は 次の (20) を挙げ、*take it that ...* の機能を (21) のように説明している。

- (20) a. Thank you for permission to visit Julia — I take it that silence means consent. (J. Webster, *Daddy-Long-Legs*)

(大竹 2009: 154)

- b. Julia のところへ行くことをお許しいただきありがとうございます。お返事がないということは承諾されたのですね。

(大竹 2009: 154)

- (21) It はある情報が話し手の知識にすでに獲得されていることを積極的に合図する。S *take it that* 節構文は、主語の指示対象が何らかの根拠に基づいて、そのすでに獲得した情報を理解に取り込み確定する過程を表現する。 (大竹 2009: 157)

(21) の説明から、大竹 (2009) は *take it that ...* の *it* を単に統語的に導入される指示対象を持たない要素ではないと考えていることがわかる。さらに、大竹 (2009) は (21) に対して次の (22) の説明を加えている。

- (22) [(21)] を換言すれば、本構文の主語の指示対象の念頭にはある命題情報がすでに獲得されており、その命題情報を自分の理解に取り込み確定することを相手に伝えていると考える。自分がすでに獲得している情報を理解に取り込み確定するということは、裏を返せば、発話に先立ってまだ未確定の情報でなければならない。したがって、典型的には主語の指示対象による推論や解釈が提示されることになる。

(大竹 2009: 157)

(22) の説明に「典型的には主語の指示対象による推論や解釈が提示されることになる」とあるように、典型的には主語は一人称であるが、次の (23) のように、主語が話し手以外の人物である場合もある。

- (23) a. You take it that endangering anyone else would have been fine.
(*The Guardian*, 2001/0910)
(大竹 2009: 161)
- b. She takes it that we are sophisticated enough to understand its primacy, and doesn't need to restate it.
(*The Guardian*, 2003/06/24)
(大竹 2009: 161)

しかし、大竹 (2009: 161) は、次の (24) のように、「話し手以外の人物の理解や認識の過程は直接的には断言しがたいために、間接的な形式 “certainly” (「きっと」) や “I think” (「思うに」) がしばしば主節に付与される」と指摘している。このことも、(21) と (22) の説明の正当性を示していると言える。

- (24) a. “You can certainly take it that the prime minister has devoted a huge amount of his own personal time and energy to what is a very important decision for any government,” he said.
(*The Guardian*, 2003/06/05)
(大竹 2009: 161)
- b. I think we can take it that Sir John Bond will not be volunteering to sit on any working parties, review panels or other talking shops that the Government might have in mind.
(*The Times*, 2002/06/01)
(大竹 2009: 161)

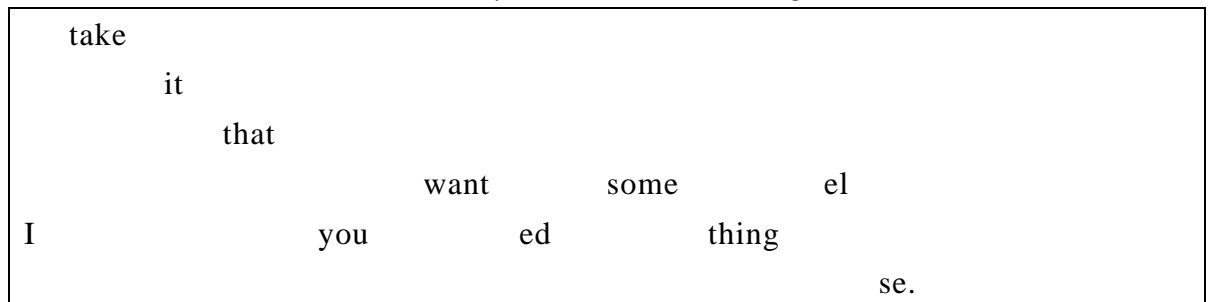
7.2.3 確認の機能と既定的 it

上記 (21) に示したように、大竹 (2009) は take it that における it について、「It はある情報が話し手の知識にすでに獲得されていることを積極的に合図する」と述べている。このことは、中右 (1983) による既定的 it の特徴と合致していると言える。したがって、本節では、take it that ... における it も既定的 it である可能性を示す。

Bolinger (1977) は、I take it that you wanted something else. と I guess you wanted something else. の音調には違いがあると述べている。それぞれの音調は、図 1 と図 2 に示すとおりである。図 1 の I take it that ... の場合、図 2 とは異な

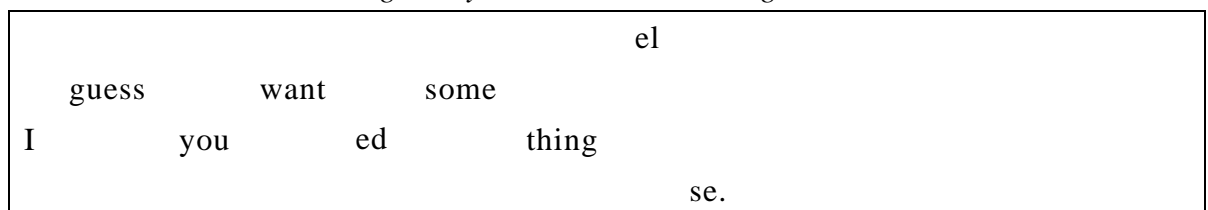
り、主節に比べて *that* 節の音調が低くなっている。このことは、*that* 節の内容が話し手にとって既に定まっていることを示していると言える。

図 1 : *I take it that you wanted something else.* の音調



(Bolinger 1977: 88, fn8)

図 2 : *I guess you wanted something else.* の音調



(Bolinger 1977: 88, fn8)

7.2 節で示したように、辞書の中には、*I take it that ...* の機能として、「確認」の機能を挙げているものがある。*I take it that ...* に確認の機能があるのであれば、*that* 節の内容が話し手の中で既に定まっていると仮定しても不自然ではないと思われる。同じく「確認」の機能を持つ表現としては、次の (25a) の *Do you mean that ... ?* や (25b) の *Do I understand that ... ?* が挙げられる。しかし、どちらの場合も *it* は必須ではない。

- (25) a. “Do you mean that he’s dishonest?” “Well, not exactly, but”
(ルミナス英和辞典)
b. Do I understand that you can’t pay? (ランダムハウス英和大辞典)

しかし、次の (26) では、*Do you mean / Do I understand* が *it + that* 節を従えている。

- (26) a. His candidacy says, ‘Do you really mean it that you want a conservative Jeffersonian way of life in this country?’ (COCA)

- b. “Did you mean it that we could meet somewhere sometime, not rushed like in the office?” (COCA)
- c. Do I understand it that you, as the chairman of the Republican National Committee, will support the recently converted Republican governor of Louisiana, Buddy Roemer, even if the state party endorses Congressman Clyde Holloway? (COCA)
- d. Do I now understand it that the whole programme is subject to maximum price? (BNC)

(26) において、Do you mean ... / Do I understand ... が持つ「確認」の機能が that 節の事柄を既定的にさせ、it を介在させていると仮定したうえで、次の (27) を見てみよう。

(27) “Do I understand it correctly that you didn’t see Mr. Phillimore return for his umbrella on the morning that he disappeared?”

“No, sir. I mean yes, sir, that’s the way it was.”

“I take it that he always carried his umbrella.”

“Oh, yes,” she answered hastily.

(D. Andriacco, *The Disappearance of Mr. James Phillimore*)

(27) はミステリー小説からの例で、事件の関係者に聞き込みをしている場面である。(27) においては、Do I understand it correctly that ... ? に続き、I take it that ... が現れており、どちらも話し手の理解が正しいかどうかを確認する意図で用いられていることがわかる。(27) において、Do I understand it correctly that ... ? と I take it that ... は対応しているため、これら 2 つの it を別の it であると考えるのは適切ではない。すなわち、どちらも既定的 it であると考えべきである。

7.3 have it that ...

次の (28) のように、have も it + that 節に従えるが、it が義務的であることが知られている。

(28) a. Rumour has it that they’re getting divorced.

b. *Rumour has ___ that they’re getting divorced.

(Huddleston and Pullum 2002: 963)

7.2.1 節で紹介したように、Bolinger (1977) や Rothstein (1995) は、イディオム

に含まれる it の中で、他の名詞句に置き換えることができる it を挙げている。その中で、Bolinger (1977) は次の (29) の例を示している。

(29) I have {it/the word} on good authority that you are to be selected.

(Bolinger 1977: 75)

(29) において、it を the word に置き換えることができるならば、it が前方照応的であることを示しているといえる。

五十嵐・本多 (2014) は、(28a) のような have it that ... は、(29) のような have it PP that ... から派生したと仮定している。それに対し、河野 (2016) は、(28a) のような例を「have it that 構文」、(29) のような例を「have it PP that 構文」と呼び、両者の相違点を指摘している。続く 7.3.1 節では、河野 (2016) による分析を紹介する。

7.3.1 河野 (2016) による分析

河野 (2016) は、*Corpus of Contemporary American English (COCA)* を用いて、have it that 構文の主語位置、および have it PP that 構文の前置詞句内に現れる名詞句を調査し、両者の相違点を指摘している。

まず、have it that 構文について見ていこう。河野 (2016) は、次の (30) に示すように、have it that 構文の主語位置に現れる名詞句を噂話類、伝承類、社会通念例の 3 つに分類し、抽象名詞句が現れやすいことを指摘している。(30) における () 内の数字は、それぞれの名詞句の出現回数を表している。

(30) have it that 構文の主語位置に現れる名詞句：

a. 噂話類：

rumor (143), word (40), story (19), report (8), gossip (7),
scuttlebutt (6) whispers (2), ...

b. 伝承類：

legend (233), lore (32), tradition (21), myth (5), history (4),
folklore (3), tale (2), ...

c. 社会通念類：

wisdom (37), theory (14), speculation (4), accounts (3), cliché (3),
argument (2), ...

(河野 2016: 106 参照)

次の (31) は、河野 (2016) が挙げている噂話類、伝承類、社会通念類の具体例である。

- (31) a. 噂話類の例：

Rumor has it that they aren't hostages, but I think they are.

- b. 伝承類の例：

Legend has it that when George Washington was a boy, he chopped down a cherry tree on his father's farm.

- c. 社会通念類の例：.

Conventional wisdom has it that business and pleasure don't mix.

(COCA)

(河野 2016: 106 参照)

次に、have it PP that 構文について見ていこう。河野 (2016) は、have it PP that 構文は have it that 構文とは異なり、信頼できる情報源から得た情報や、情報記録媒体等の物的証拠が PP 内に現れることを指摘している。河野 (2016) が have it PP that 構文の具体例として挙げているものを次の (32) に示す。

- (32) a. In fact, I have it from a reliable source that you've been discussing Mr. Cerino's case in detail.

- b. I have it on good authority that Cormac lives on Coffin Avenue.

- c. ... and then you have it on tape that I said that.

- d. They have it in their logs that I came here last night and retrieved my property with this.

(COCA)

(河野 2016: 107)

河野 (2016: 107) によれば、have it PP that 構文の前置詞句内に現れる名詞句の特徴として、「信頼度の高さ (e.g. reliable source) や複数の情報源の存在 (e.g. two sources, several sources)、特定の人物から得た情報という含意 (e.g. the editor himself)」などが挙げられるという。また、河野 (2016) は、on 句には (32b) のように「形容詞 (e.g. good, certain) + authority」が高頻度で現れることや、(32c) のように tape や videotape などの情報記録媒体が現れることがあることも指摘している。in 句は頻度が低い、(32d) のように in 句には情報記録媒体が現れている例が見られたという。

河野 (2016) による指摘を考慮すると、五十嵐・本多 (2014) による have it that 構文が have it PP that 構文から派生したという仮定の正当性には疑問が生じる。したがって、have it PP that 構文の it を the word に置き換えることができるという Bolinger (1977) による主張を、have it that 構文に当てはめるのは適切で

はないと思われる。また、筆者の知る限り、have it that 構文の it が他の名詞句に置き換えられている例は見られない。

7.3.2 have it that ... と have (it) in mind that ...

have it that ... において it が義務的なのは、統語的な要因によるものである可能性もある。すなわち、have は名詞句を従えることはできるが、that 節を従えることはできないので、厳密下位範疇化制限に違反するのを避けるために it が置かれなければならない、と考えることも可能であるかもしれない。

しかし、have は that 節を従えるために必ず it を要求するというわけではない。次の (33) に示す have in mind について考えてみよう。

- (33) a. I have a double object in mind.
b. I had a different scheme in mind. (新編英和活用大辞典)

have in mind は、that 節を従えることがある。その際、次の (34) のように it が置かれる場合もあるが、(35) のように it を置かないことも可能である。

- (34) a. In fact I had it in mind that she might be trained up to one of the women's auxiliary services which justified themselves so splendidly in the last war -- the WRENS, I mean, of course. (BNC)
b. Yet, said Mr. Watkinson, Lord Bridge can hardly have had it in mind that the private law right which he plainly regarded as coming into existence when the duty laid down in section 65(2) arose could give rise to a public law duty as to the manner in which the private law right was to be satisfied. (BNC)
c. [...] I certainly had it in mind that many of the proposals in that Bill -- improved it may be by further consideration and fresh ideas -- might find a place in such a programme. (BNC)
- (35) a. I have in mind that in certain respects statutory assignments and equitable assignments have different legal consequences. (BNC)
b. To impose such a test on children would be a particularly invidious way of discriminating against them, unless Harris has in mind that we should all undergo such examination. (BNC)
c. Childe had in mind that human evolution and development were not just passive responses to an external environment, but were the result of humanity's own efforts. (BNC)

したがって、have it that ... において it が義務的であることを、have に課される厳密下位範疇化制限によって説明するのは妥当ではないと思われる。¹ have it that ... の場合に it が義務的であることには、この構文が持つ意味が関与していると考えられる。

ただし、統語論的な説明が優勢であると思われる場合もある。例えば、次の (36) のような場合である。

- (36) a. You can depend on it that she'll find a solution.
b. *You can depend on __ that she'll find a solution.

(Huddleston and Pullum 2002: 963)

(36a) では、it は動詞の補部ではなく、前置詞の補部である。(36b) から明らかなように、it が前置詞の補部である場合、it は義務的である。(36) の depend on と同様に it + that 節に従えるものとして、Huddleston and Pullum (2002) は次の (37) を挙げている。

- (37) bank on / rely on / get over / see to / get wind of / take my word for

(Huddleston and Pullum 2002: 963 参照)

筆者の知る限り、前置詞の補部である it が随意的であるような事例は存在しない。したがって、この場合は統語的に it が要求されると考えるほうが適切であるように思われる。

また、第 6 章で触れた Bolinger (1977) が挙げている次の (38)-(41) のような動詞についても同様である。

- (38) a. *He can't swallow __ that you dislike him.
b. He can't swallow it that you dislike him. (Bolinger 1977: 68)
(39) a. *She hid __ that she was involved.
b. She hid it that she was involved. (ibid.)
(40) a. *He let __ out of the bag that I was the one they were looking for.
b. He let it out of the bag that I was the one they were looking for. (ibid.)

¹ このことは take に関しても同様である。7.2 節で取り扱った take it that ... は、次の (i-a) に示すように it を要求するが、(i-b) に示すように、take for granted の場合は it は随意的である。

(i) a. I take *(it) that you are enjoying yourselves. (Quirk *et al.* 1989: 1184, fn)
b. He had taken (it) for granted that he would be given a second chance.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)

- (41) a. *He spilled ___ that you were the thief.
 b. He spilled it that you were the thief. (ibid.)

(38)-(41) の動詞が *it* を要求するのは、本来は物を目的語にとっていた動詞が、命題を目的語にとる動詞として比喩的に用いられるようになったことの影響が大きいと思われる。例えば、(38) の *swallow* であれば、「食べ物などを飲み込む」という意味から「何らかの事柄を飲み込む」という意味を持つようになり、(39) の *hide* であれば、「物を隠す」という意味から、「何らかの事柄を隠す」という意味を持つようになったということである。このように考えると、(38)-(41) のような動詞が *it* を要求するのは、それらの動詞が本来は名詞句を補部にとる動詞であることに起因すると考えるほうが自然であると思われる。

ただし、既定的 *it* に基づいて、目的語位置からの *it* 外置を統一的に分析する場合、(36a) や (38)-(41) のような事例であっても、*it* は指示対象を持たない「虚辞」ではなく、いわば *the N* のような働きをしていると考えるべきである。

7.3.3 have it that ... と既定的 *it*

have it that ... の意味機能を議論している文献として、Ureña Gómez-Moreno (2014) が挙げられる。Ureña Gómez-Moreno (2014) は、次の (42) の例を挙げ、(43) のように説明している。

- (42) a. One view has it that they are the trusted preservers of law and order.
 b. Business mythology has it that computer firms in Japan are no good at software. (BNC)

(Ureña Gómez-Moreno 2014: 520)

- (43) In the preceding examples, the HITC [=Have-It-That-Construction] attributes the content in the *that*-clause to an external sayer — *one view* and *business mythology*, respectively. This sayer is presented as the ultimate source of information which is responsible for the truth of the proposition. The HITC therefore construes facts “as they are”, enabling the speaker to take a more or less distant position in place and time with respect to the original source, while in turn inviting the hearer to evaluate the contents being reported. (Ureña Gómez-Moreno 2014: 520)

ここで重要なことは、*have it that ...* によって導入される *that* 節の命題の真実性に責任を負うのは、話し手ではなく主語の名詞句、すなわち (42a) であれば *one view*、(42b) であれば *business mythology* であるという点である。

ただし、(43) の説明において、Ureña Gómez-Moreno (2014) は have it that ... における that 節の命題を“facts”と表現していると思われ、このことには疑問が残る。例として、次の (44) を見てみよう。Ureña Gómez-Moreno (2014) が挙げている上記 (42b) は *British National Corpus* からの例であるが、前後の文脈を復元したものが次の (44) である。

(44) Japan challenges the computer giant

Business mythology has it that computer firms in Japan are no good at software and will never break the dominance of IBM, the world's biggest computer company. But important changes in the way computers are sold are beginning to favour the Japanese (New Scientist, 1983/01/06)

(44) は科学雑誌の見出しと、その説明からの例である。(44) では、日本はソフトウェアが得意ではなく、IBM を破ることは出来ないというビジネス神話があると述べられている。しかし、後の文脈では、日本のソフトウェアが好まれはじめているとも述べられている。したがって、話し手は that 節の内容を真実であるにとらえているわけではなく、「そのようなビジネス神話がある」と伝えているだけである。

次の (45) では、話し手が that 節の内容を真実であるにとらえていないことがより明らかである。

(45) Palmer was in Napa, California, for a senior tournament, and he invited Woods to lunch. The meal became something of a cause celebre when it was revealed that the millionaire had picked up the tab for the student. Stanford, fearing the NCAA would strip its star golfer of his amateur status, made Woods send Palmer a check for his half of the tab: \$25. Story has it that Palmer kept the check and framed it, but the truth is that he did cash it, more for Tiger's sake than his own. (TMC)

(45) は、まだアマチュアゴルファーだったころのタイガー・ウッズについて書かれている。アマチュアゴルファーは金銭的な利益を享受することが厳しく禁止されており、それに違反するとアマチュア資格を剥奪される。ある時、同じくゴルファーのアーノルド・パーマーがウッズを昼食に招待し、ウッズの昼食代をパーマーが支払ったことが問題になり、ウッズはパーマーに昼食代として 25 ドルの小切手を送った。そのことについて、一重下線部にて、have it that ... を用いて「パーマーはその小切手をとっておいて、額縁に入れたという話がある」

と述べられている。しかし、直後の二重下線部にて、「実際にはパーマーはその小切手を換金した」と述べられ、その話の真実性が否定されている。したがって、ここでも、書き手は **have it that ...** を用いて「そのような話がある」と伝えているだけであり、**that** 節の内容を真実であるにとらえているわけではない。

以上のことを踏まえれば、**have it that ...** の **it** もやはり既定的 **it** であると考えられる。既定的 **it** の例として、第 6 章で紹介した、Lysvåg (1975) が挙げている例に対する中右 (1983) の主張を再度紹介する。次の (46) を見てみよう。

- (46) a. They told us that the guests would come late. (中右 1983: 576)
b. We had expected it that the guests would come late, so we had made careful preparations. (Lysvåg 1975: 133)

中右 (1983) によれば、既定的 **it** を含む (46b) は、誰かが (46a) のように述べたのを受けて発話されたものであるという。**have it that ...** も同様に、話し手は噂話や伝説の内容など、話し手にとって既知の情報を伝えている。さらに、次の (47) を見てみよう。

- (47) a. We had expected it that the guests would come late, so we had made careful preparations. (Lysvåg 1975: 133)
b. ... but contrary to our expectations, most of the guests came on time. (中右 1983: 578)

(47a) の **it** は叙実的 **it** ではなく既定的 **it** であるため、(47a) に続けて (47b) のように発話しても矛盾は生じないという。すなわち、(47a) は「客が遅れて来る」という命題が発話の時点に先立って話し手の中に存在していたことを含意するだけで、その命題が真実であるということまでは含意しない。このことは、上で紹介した **have it that ...** の特徴と一致している。つまり、話し手は「そのような話／伝説／噂などがある」ということを伝えているだけで、命題の真実性を主張しているわけではない。

最後に、次の (48) を見てみよう。

- (48) It was an incredible distance from both Rio de Janeiro or São Paulo: legend has it, and I believe it, that the wealthy families in Belém up to the Republican period in 1889 used to send their laundry to Lisbon for washing because it was closer than Rio de Janeiro.

(J. M. Young, *Lost in the Stars of the Southern Cross*:

(48) では、*legend has it* に続いて *I believe it* が現れている。これらの *it* を全く別のものとして扱うのは適切ではない。やはり、(48) の *it* はどちらも既定的 *it* であると考えべきである。

7.4 like/dislike it that ... など

次の (49)-(51) のように、*like* などの動詞は *it + that* 節に従えるが、その際、*it* は義務的である。²

- (49) a. I like it that she has good manners.
b. *I like __ that she has good manners. (Rothstein 1995: 514)
- (50) a. I just love it that you are moving in with us.
b. *I just love __ that you are moving in with us. (Bolinger 1977: 68)
- (51) a. We welcome it that we are to have the benefit of your criticism.
b. *We welcome __ that we are to have the benefit of your criticism.
- (ibid.)

Huddleston and Pullum (2002) によれば、*dislike* と *hate* も同じ振る舞いをするという。

第 6 章で紹介したように、Cattell (1978) は、*believe* には「信じている」に近い *sense (i)* と、「思う」に近い *sense (ii)* の 2 つの意味があると述べている。そして、第 6 章では、Cattell (1978) および Hegarty (1992) に基づき、*it + that* 節に従えるのは、*sense (i)* の *believe* のであると主張した。まず、*sense (i)* の *believe* と日本語の「信じている」を比較するために、次の (52) と (53) を見てみよう。

² Rothstein (1995), Huddleston and Pullum (2002), Kim and Sag (2005) といった文献では、次の (ii) のように、*like* が *that* 節に従える場合、*it* は義務的であると述べられている。

- (ii) a. I like *(it) that she has good manners. (Rothstein 1995: 514)
b. He didn't like *(it) that she had brought the children. (Huddleston and Pullum 2002: 963)
c. I like *(it) that she has good manners. (Kim and Sag 2005: 210)

Huddleston and Pullum (2002) は、*dislike* や *hate* も同じ振る舞いをするとして述べている。一方、Rosenbaum (1965) は、次の (iii) を挙げている。(iii) では *dislike* が *that* 節に従えているが、*it* は随意的であると判断されている。

- (iii) I dislike (it) very much that he is always late. (Rosenbaum 1965: 76)

したがって、*like* のような動詞が *that* 節に従える場合に *it* を要求するか否かの判断は、話者によって異なる可能性がある。*it* が随意的なのであれば、第 6 章で示したように、*it* の有無による違いは *that* 節の内容が既定的か否かである。しかし、本研究は、上記 (ii) のように *it* を義務的であると判断している文献を重要視し、議論を進める。

(52) believe (sense (i)):

- a. ... believe ___ that ...
- b. ... believe it that ...

(53) a. [太郎が来た]と信じている。

b. [太郎が来たという主張]を信じている。

(52) に示すように、sense (i) の believe は、that 節を直接従えることもできるし、it + that 節を従えることもできる。同様に、sense (i) の believe に近いと思われる「信じている」は、(53a) のように定型節を直接従えることもできるし、(53b) のように複合名詞句を従えることもできる。次に、sense (ii) の believe と日本語の「思う」を比較するために、次の (54) と (55) を見てみよう。

(54) believe (sense (ii)):

- a. ... believe ___ that ...
- b. *... believe it that ...

(55) a. [太郎が来た]と思う。

b. *[太郎が来たという主張]を思う。

(54a) に示すように、sense (ii) の believe は、that 節を直接従えることはできるが、(54b) のように it + that 節を従えることはできない。同様に、sense (ii) の believe に近いと思われる「思う」は、(55a) のように文を従えることはできるが、(55b) のように複合名詞句を従えることはできない。

(52)-(55) と同様に、like と、それに近いと思われる日本語の「好む/好ましく思う」を比較するために、次の (56) と (57) を見てみよう。

(56) a. *... like ___ that ...

b. ... like it that ...

(57) a. *[太郎が来た]と{好む/好ましく思う}。

b. [太郎が来たこと]を{好む/好ましく思う}。

(56a) に示したように、like は that 節を直接従えることはできず、(56b) のように it を介在させなければならない。同様に、like に近いと思われる「好む/好ましく思う」は、(57a) のように文を従えることはできず、(57b) のように複合名詞句化されていなければならない。これは、次の (58) に示すように、dislike や hate に近い「嫌う/嫌だと思う」に関しても同様である。

- (58) a. *[太郎が来た]と{嫌う/嫌だと思ふ}。
 b. [太郎が来たこと]を{嫌う/嫌だと思ふ}。

日本語においては、動詞が何らかの事柄に対して良し悪しなどの判断を述べる場合、その対象は複合名詞句化されていなければならないということである。このように考えると、英語にける、*like it that ...* の *it* も、*that* 節を名詞化するために介在している可能性がある。言い換えれば、そのような *it* は、「the N + *that* 節」における the N のように機能しているということである。

対応する動詞が日本語に存在するかどうかは別として、次の (59) に示す *love* や (60) に示す *welcome* についても同様のことが言える。*welcome* は、(61) に示すように、日本語の「歓迎する」に近いと思われる。

- (59) a. *I just love __ that you are moving in with us.
 b. I just love it that you are moving in with us. (Bolinger 1977: 68)
 (60) a. *We welcome __ that we are to have the benefit of your criticism.
 b. We welcome it that we are to have the benefit of your criticism. (*ibid.*)
 (61) a. *[太郎が来た]と歓迎する。³
 b. [太郎が来たこと]を歓迎する。

like, *dislike*, *hate*, *welcome* などの動詞が *it* を要求するのは、それらの動詞が持つ「何らかの事柄に対してその良し悪しなどの判断を述べる」という意味によるものではないだろうか。すなわち、*it* を置くことで *that* 節が名詞化され、それらの動詞によって叙述される対象になることができるということである。そこで、次の (62) の仮説を立ててみたい。

- (62) 目的語の *that* 節が叙述の対象になっている場合、*it* は義務的である。

7.4.1 複合他動詞と *it*

(62) の仮説についてさらに考えるために、次の (63) に示すような例について

³ 「歓迎する」に限った話ではないが、次の (iv) のように、原則として文を直接従えない日本語の動詞が、文を従えているように見える例がある。

(iv) 国民は、初めて言行一致の首相が出てきたと、歓迎した。

(西村京太郎『二つの首相暗殺計画』)

しかし、(iv) は引用の例であり、いわば次の (v) の意味である。

(v) 国民は、「初めて言行一致の首相が出てきた」と（言って）歓迎した。

したがって、(iv) は「歓迎する」が文を従えている例ではない。

て考えてみよう。(63) では、他動詞が形容詞句もしくは前置詞句と共に現れている。このような動詞を、Huddleston and Pullum (2002) が complex-transitive verbs と呼んでいるのにならって、「複合他動詞」と呼ぶことにする。

- (63) a. I find it hardly surprising that he tried to retract his statement.
 b. They regard it as a discourtesy that you didn't notify them earlier.
 (Huddleston and Pullum 2002: 963)

次の (64a) のように、目的語が名詞句である場合は、複合他動詞に割り込む形で現れても問題がない。一方、(64b) のように、目的語が that 節である場合、その that 節は複合他動詞の間に割り込むことはできない。

- (64) a. I find [his behavior] hardly surprising.
 b. *I find [that he got away with it for so long] quite incredible.
 (Huddleston and Pullum 2002: 963)

(64b) のように目的語が that 節である場合は、次の (65a) のように that 節は外置されなければならない。その際、(65b) から明らかなように、it は義務的である。

- (65) a. I find it hardly surprising [that he tried to retract his statement].
 b. *I find __ hardly surprising [that he tried to retract his statement].
 (Huddleston and Pullum 2002: 963)

that 節に関して同じ振る舞いをする複合他動詞として Huddleston and Pullum (2002) が挙げている動詞を、次の (66) に示しておく。[as] が付記されている動詞は、形容詞句ではなく as 句と共に起するということを意味する。

- | | | | | |
|------|--------------|----------------|----------|----------------|
| (66) | accept [as] | believe | call | confirm [as] |
| | consider | declare | deem | establish [as] |
| | find | hold | judge | make |
| | present [as] | recognise [as] | see [as] | |
- (Huddleston and Pullum 2002: 963)

that 節は複合他動詞に割り込めず、外置されなければならないのであれば、it は単に統語的に導入される要素であるようにも思える。Kim and Sag (2005) は

Kuno (1987) に基づき、上記 (64b) のような文は、彼らが **Ban on Non-Sentence Final Clause** (以下 BNFC) と呼ぶ規則によって除外されるとしている。BNFC とは、**that** 節や不定詞節から成る項の右側にいかなる要素も現れてはならないとする規則である。例として、次の (67) と (68) を見てみよう。

- (67) a. *Would [that John came] surprise you?
 b. *Would [to pay now] be better? (Kim and Sag 2005: 203)
- (68) a. Would it surprise you [that John came]?
 b. Would it be better [to pay now]? (*ibid.*)

(67a,b) についても (64b) と同様に BNFC に違反するので、(68a,b) のように、それぞれ **that** 節と不定詞節を外置しなければならないと説明される。

しかし、**that** 節を外置しなければならないことと、**it** を置かなければならないことには、別の要因が関わっているように思える事例がある。まず、次の (69) を見てみよう。

- (69) a. Nobody expected [anything] of me.
 b. *Nobody expected [that you could be so cruel] of you.
 (Kim and Sag 2005: 207)

expect of NP が複合他動詞に分類されるかどうかはさておき、動詞と前置詞句から成る点、そして **that** 節を外置しなければならない点は、複合他動詞と同様である。つまり、(69a) のように、名詞句であれば **expect** と **of NP** の間に割り込むことができるが、(69b) のように、**that** 節の場合は許されない。この点については、上記 (64) の **find it ADJ that ...** と同様である。しかし、**it** を置くかどうかについては異なる。次の (70) を見てみよう。

- (70) a. Nobody expected ___ of you [that you could be so cruel].
 b. Nobody expected it of you [that you could be so cruel].
 (Kim and Sag 2005: 207)

(70a,b) から明らかなように、**expect of NP** の場合、**that** 節が外置されている場合であっても **it** は随意的である。**expect of NP** と、次の (71) と (72) に示す **blame on NP** を比較してみよう。

- (71) a. I blame [the case] on you.

- b. *I blame [that we can't go] on you. (Kim and Sag 2005: 204)
- (72) a. *I blame __ on you [that we can't go].
- b. I blame it on you [that we can't go]. (*ibid.*)

expect of NP の場合と同様に、(71a) のように名詞句であれば **blame** と **on NP** の間に割り込むことができるが、(71b) のように、**that** 節の場合は許されない。しかし、**expect of NP** と異なるのは、(72) から明らかなように、**that** 節が外置されている場合には **it** が義務的であるという点である。

では、**expect of NP** の **of** 句と、**blame on NP** の **on** 句には、どのような違いがあるだろうか。次の (73) を見てみよう。

- (73) a. The blame was on me.
- b. *The expectation is of me. (Kim and Sag 2005: 207)

Kim and Sag (2005) によれば、両者の違いは叙述的 (**predicative**) であるか否かである。(73a) のように、**blame** の **on** 句は述語として機能するのに対し、(73b) のように、**expect** の **of** 句は述語として機能しない。したがって、**blame on NP** において、**on** 句は目的語を叙述する働きをしていると考えられる。

以上のことから、**blame on NP** が **that** 節に従える場合に **it** が義務的なのは、**blame on NP** が **that** 節を叙述の対象としているためであると考えられる。これは、先に触れた **find it ADJ that ...** についても同様である。というのも、形容詞は言うまでもなく、述語として機能するからである。

ここで、本節で述べたことをまとめておく。まず、**expect of NP** は次の (74) のような振る舞いをする。

- (74) a. *expect [that S] of NP
- b. expect __ of NP [that S]
- c. expect it of NP [that S]

(74a) が許されないのは、Kim and Sag (2005) が主張しているように、BNFC のような統語的制約によるものであると考えられる。また、**expect of NP** の場合、(74b,c) のように、**it** は随意的である。これは第 6 章で述べたように、既定的 **it** の有無による違いである。次に、**blame on NP** と **find ADJ** について、次の (75) と (76) を見てみよう。

- (75) a. *blame [that S] on NP

- b. *blame ___ on you [that S].
 - c. blame it on you [that S]
- (76)
- a. *find [that S] ADJ
 - b. *find ___ ADJ [that S]
 - c. find it ADJ [that S]

(75a) と (76a) が許されないのは、(74a) が許されないのと同様に、BNFC のような統語的制約によるものであると考えられる。(75b) と (76b) が許されないのは、blame on NP と find ADJ が that 節を叙述の対象としているにも関わらず、it を置いていないからである。目的語の that 節が叙述の対象になっている場合、that 節を外置するだけでなく、(75c) と (76c) のように it を置かなければならない。

find it ADJ that ... は、第 6 章で触れた think it ADJ that ... にも関係している。第 6 章にて、think は it + that 節を従えにくいことを示したが、次の (77) に示すように、think it ADJ that ... の形をとる例は特に珍しくない。

- (77)
- a. As Mr Wolski ate his usual morning toast and marmalade he was listening to a spokesman from the RSPB saying, 'We think it possible that the eagle will try to find high ground. (COCA)
 - b. Charity with enough resilience to laugh, thought it unlikely that Charles would make a particularly docile prisoner and Clarissa said she'd write and tell him to behave himself. (COCA)
 - c. Hank was so used to being deserted by his mother that he did not think it odd that she should go out on the first evening in ten weeks that his father had been able to spend at home. (COCA)

これは、think が形容詞と組み合わせることで叙述機能を持ち、that 節が叙述の対象となっているためであると考えられる。

7.4.2 複合他動詞と like/dislike it that ... など

ここで、like/dislike it that ... などの例に立ち戻る。7.4 節にて、次の (78) の仮説を立てた。

- (78) 目的語の that 節が叙述の対象になっている場合、it は義務的である。

つまり、次の (79a) に示す like it that ... において it が義務的であることと、(80a)

の find it ADJ that ... において it が義務的であることには、同じ原理が関わっている」と主張したいわけである。

- (79) a. He didn't like it [that she brought the children].
b. *He didn't like __ [that she brought the children].
(Huddleston and Pullum 2002: 963)
- (80) a. I find it hardly surprising [that he tried to retract his statement].
b. *I find __ hardly surprising [that he tried to retract his statement].
(*ibid.*)

7.4 節にて、like, dislike, love, welcome などの動詞が it を要求するのは、それらの動詞が持つ「何らかの事柄に対して良し悪しなどの判断を述べる」という意味によるものであると述べた。次の (81) と (82) に、英英辞典における like と dislike の意味の説明を示す。

- (81) 英英辞典における like の説明：
a. to enjoy something or think that it is nice or good
(Longman Dictionary of Contemporary English)
b. If you **like** something or someone, you think they are interesting, enjoyable, or attractive (Collins コウビルド新英英辞典)
- (82) 英英辞典における dislike の説明：
a. to think someone or something is unpleasant and not like them
(Longman Dictionary of Contemporary English)
b. If you **dislike** someone or something, you consider them to be unpleasant and do not like them. (Collins コウビルド新英英辞典)

これらの動詞は、(81) と (82) に示したような意味を実際に持っていると考えられる。つまり、like や love、welcome は、形の上では 1 語であるが、実際は think + good のような意味を持っているということである。dislike や hate であれば、think + bad である。すなわち、like や dislike などの動詞が it を要求するのは、find + ADJ や think + ADJ と同様に、that 節を叙述の対象としているからであると考えられる。

7.4.3 文主語構文と複合他動詞

ここで、第 5 章で分析した文主語構文について考えてみよう。中右 (1983) は、文主語構文について次の (83) のように主張している。

- (83) 補文命題が文主語として成り立つのは、それが叙述 (predication) の対象になっているときである。一方、それが提示 (presentation) の対象になっているときには外置されなければならない。

(中右 1983: 581)

例として、次の (84) と (85) を見てみよう。

- (84) a. *That he is happy is believed. (中右 1983: 583)
b. *That the president has been indicted will be announced. (*ibid.*: 582)
c. *That she slipped arsenic into his tea is said. (*ibid.*: 582)
- (85) a. That he is happy is widely believed. (中右 1983: 583)
b. That the president has been indicted will not be announced. (*ibid.*: 582)
c. That she slipped arsenic into his tea is said by everybody in the town. (*ibid.*: 582)

中右 (1983) に基づけば、(84a-c) は、述語が叙述機能を有していないために、文主語が許されないということになる。一方、(85a-c) は、それぞれ *widely*, *not*, *by everybody in the town* によって述語が叙述機能を有しているため、文主語が許される。つまり、(85a-c) では、*that* 節が叙述の対象になっていると言える。また、次の (86) のような場合では、述語が形容詞であるため、*that* 節が叙述の対象になっていることは明らかである。

- (86) a. [That he was wrong] is obvious. (Huddleston and Pullum 2002: 961)
b. [That much of what he calls folklore is the result of beliefs carefully sown among the people with the conscious aim of producing a desired mass emotional reaction to a particular situation or set of situations] is irrelevant. (*ibid.*: 1405 を一部抜粋)

しかし、(85) と (86) の例においては、*that* 節は目的語ではなく主語であるとはいえ、叙述の対象になっているにも関わらず、*it* は置かれていない。このことをどのように説明すればよいだろうか。

まず、Bolinger (1977) が挙げている次の (87) を見てみよう。

- (87) a. The fact that you take that attitude is to be resented.

- b. *It that you take that attitude is to be resented. (Bolinger 1977: 76)

(87a) のように、主語が The fact that ... であれば問題がないが、It that ... は主語として許されない。Bolinger (1977) は、It that ... が許されないのは英語の韻律の問題であるとして、次の (88) のように述べている。

- (88) Yet this is probably a trivial difference, perhaps attributable just to the prosody of English. *It* is normally stressless, but in initial position followed by an obligatory stressless *that* it would have to be stressed.

(Bolinger 1977: 76)

つまり、普通は it に強勢はないが、文頭に it が置かれ、直後に強勢がない that が続くと、it に強勢が置かれなければならないため、It that ... という文は存在しないと Bolinger (1977) は述べている。

Bolinger (1977) の韻律に基づく説明が正しいかどうかは別として、It that ... という文が存在しないのは、文頭の that 節に特有の性質によるものと思われる。まず、先に触れた次の (89) を見てみよう。

- (89) a. I find it hardly surprising [that he tried to retract his statement].
b. *I find __ hardly surprising [that he tried to retract his statement].

(Huddleston and Pullum 2002: 963)

(89a) において it は義務的であり、(89b) のように省略することはできない。これは、本研究の説明に基づけば、that 節が叙述の対象になっているため、it を置かなければならないと説明される。しかし、Huddleston and Pullum (2002) によれば、次の (90) のように that 節を文頭に置くことができる。

- (90) [That he tried to retract his statement] I find __ hardly surprising.

(Huddleston and Pullum 2002: 963)

Huddleston and Pullum (2002) には特に説明がないが、(90) は話題化 (topicalization) の例であると思われる。(90) から明らかなように、that 節が文頭に置かれている場合、it は不要である。(89a) の延長で考えると、もし (90) において it が置かれるならば、下線部の位置に置かれてもよいはずである。したがって、(90) のように、目的語位置からの it 外置であっても、that 節が文頭に置かれている場合に it が不要であることは、韻律的に It that ... が許されないとする

Bolinger (1977) の主張では説明がつかない。次の (91) と (92) の対比についても同様である。

- (91) a. We owe it to you [that we got off so lightly].
b. [That we got off so lightly] we owe ___ to you.
(Huddleston and Pullum 2002: 963)
- (92) a. *[That you refuse even to discuss the matter] I most certainly do resent it.
b. [That you refuse even to discuss the matter] I most certainly do resent _____.
(Higgins 1973: 158)

7.3.2 節にて、that 節が前置詞の補部になっている場合、例外なく it は義務的であると述べた。しかし、次の (93) のように that 節が文頭に置かれている場合、that 節が前置詞の補部になっていても it は不要である。

- (93) a. *[That we won't abandon him] you may definitely depend on it.
b. [That we won't abandon him] you may definitely depend on _____.
(Higgins 1973: 158)

上記 (90) では、that 節が叙述の対象になっているにもかかわらず、it が不要であるため、本研究の主張に対する反例であるようにも思える。しかし、それらの例において it が要求されないのは、文頭の that 節に固有の特徴であると考えられる。すなわち、理由は定かではないが、文頭の that 節は、次の (94) に示すように、文頭の名詞句と同じような振る舞いをするということである。

- (94) a. [Most of it] she had written ___ herself.
b. [Anything] you don't eat put ___ back in the fridge.
(Huddleston and Pullum 2002: 1372)

つまり、that 節は主語であるか目的語であるかに関係なく、例え叙述の対象となっても、文頭に置かれている場合は it が不要であるという性質を持っていると考えられる。そのように考えると、上記 (90)、(91b)、(92b)、(93b) において it が不要なことと、文主語構文に it が不要なことには、同じ原理が関わっているということになる。したがって、7.4 節で示した本研究の主張は、次の (95) のように修正されるべきであろう。

- (95) 目的語の **that** 節が叙述の対象になっている場合、**it** は義務的である。
ただし、**that** 節が文頭に置かれている場合は、文主語構文と同様に、**it** は不要である。

7.5 おわりに

本章では、第 6 章で取り扱った **it** が随意的な事例と同様に、**it** が義務的な事例においても **it** は統語的に導入される「虚辞」ではなく、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示した。

第 8 章 It says LOC 構文

8.1 はじめに

本章では、次の (1) に示すような構文を取り扱う。

- (1) a. It says in the Commandments that adultery is wrong.
姦淫 [不義] はいけないと十戒で定められている。
(新編英和活用大辞典)
- b. It says on the container to take two pills after every meal.
容器に毎食後 2 錠ずつ服用するように書いてある。 (ibid.)
- c. {The Bible says / It says in the Bible} that God is love.
聖書にいわく、神は愛なりと。 (ルミナス英和辞典)
- d. It says on the label 'Produce of France'.
ラベルには「フランス産」と書かれている。
(Oxford Advanced Learner's Dictionary)

(1) では、It says に続き場所句 (LOC) が現れている。この構文を便宜上、It says LOC 構文と呼ぶことにする。

Bolinger (1977) は、ラジオの会話からの例として、次の (2a) を挙げている。ただし、実際には場所句が it に先行している (2a) よりも、it が場所句に先行している (2b) のほうがやや普通の語順 (a somewhat more usual order) であるという。

- (2) a. In the Bible it says that ...
b. It says in the Bible that ... (Bolinger 1977: 81)

(1) においてそれぞれの辞書が示している日本語訳を見るかぎり、この構文における主語 it は単純に、場所句内の名詞句を指示しているようにも思える。実際に、(1c) では The Bible says ... と It says in the Bible ... が互いの言い換えとして扱われている。しかし、Bolinger (1977) によれば、次の (3) のような文を耳にすることは無いという。

- (3) *In John's letter it says that ... (Bolinger 1977: 81)

すなわち、It says LOC 構文において、in John's letter は場所句として不適切であ

ることになる。(3)において、itが単にJohn's letterを指示しているのであれば、(3)は特に問題がないはずである。つまり、It says LOC構文のitは、場所句内の名詞句を指示しているとは考えにくい。(3)が容認されないことについて、Bolinger (1977)は次の(4)のように述べている。

- (4) There is no syntactic reason for this but there is a semantic one: *it* is too general, *letter* is too specific. (Bolinger 1977: 81)

つまり、It says LOC構文においてin John's letterのような表現が場所句として不適切なのは、itが一般的(general)すぎ、letterが特定の(specific)すぎるからであるとBolinger (1977)は述べている。

本章の目的は、次の(5)のことを明らかにすることである。

- (5) a. Bolinger (1977)が述べている「一般的」と「特定の」は何を意味しているか。
b. 場所句がitに先行している場合よりも、itが場所句に先行している場合のほうが普通なのはなぜか。

(5a)に対しては次の(6a)、(5b)に対しては次の(6b)のことを主張する。

- (6) a. It says LOC構文は、特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといった場合に用いられる。したがって、特定の書き手を明示することが可能である場合や、明示しても差し支えがないような場合にはitはそぐわないため、その意味でitは「一般的」である。一方、letterは特定の書き手を明示しやすいため、その意味で「特定の」である。
b. It says LOC構文におけるitは、場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではない。それにもかかわらず、場所句を先行させると、itがその場所句に含まれる名詞句との前方照応性を強いられているように感じられ、その結果、話者に不自然さを感じさせる。

8.2 場所句に現れる名詞句の特徴

本節では、It says LOC構文の場所句内に現れる名詞句について見ていく。まず、中右(2015)は、次の(7)の例を挙げている。

(7) It says in {the paper/*her letter} that they're getting divorced.

(中右 2015: 12)

(7) の例は、her letter が場所句 LOC として不適切であることを示しており、「it は一般的すぎ、letter は特定のすぎる」という Bolinger (1977) の主張と一致している。また、中右 (2015) は、in her letter の場合、次の (8) のように She が主語に置かれるのが標準であり、(7) の主語 it は(8) の She と交代したものであると推測している。

(8) She says in her letter that they're getting divorced.

さらに、中右 (2015) は、次の (9) のように述べている。

(9) 「彼女の手紙」は私的な個別的実体を指し示し、常に〈特定の書き手〉が指定できる。にもかかわらず、それを非人称化して it に〈任意の不特定の個人〉を指し示す役割を担わせるようにすることはできない。どうやら、位置表現 her letter は非人称 it 主語の指示作用に見合う程度に十分に一般的な広がりを持った情報媒体ではありえない、というところに煮詰まってくるのではないか。

[...]「手紙」とは対照的に、「新聞」も「聖書」も非人称 it の指示作用に見合うほどに十分に一般的な広がりを持つ。ひとりの個人が占有するような私的な情報媒体ではなく、その気になれば、どの人にも接触可能な情報媒体である。

(中右 2015: 13)

たしかに、It says LOC 構文の場所句に現れる名詞句は、幅広く共有されているような情報媒体である場合が典型例であるように思われる。例えば、次の (10) に示す例では、聖書が場所句に現れている。場所句に現れるのは、(10a,b) のように the Bible である場合もあれば、(10c-f) のように聖書の具体名であったり、その一部であったりする。

- (10) a. It says in the Bible that one should love one's enemies, but it does not say one should love one's creditors. (TMC)
- b. In a teacher-disciple kind of call-and-response, he asked, "What do you need to do in order to hear God's work? In the Bible it says that the voice of the Lord comes *not* ... how?" (J. Willis, *Dreaming Me*)
- c. Or as it says in the Book of John, Chapter 20, Verse 29: 'Blessed are

- they that have not seen and yet have believed.’ (TMC)
- d. The Israelites marched on dry ground between two walls of water. Or did they? So it says in Exodus 14, and so it is depicted in Cecil B. (TMC)
- e. “In Judges,” she quoted, “it says that after the death of Joshua, the children of Israel asked God: ‘Who will go up for us against the Canaanites, to fight against them?’ (B. Pollack, *Forty-Eight X: The Lumeria Project*)
- f. In the prophecy of Malachi it says, ‘Suddenly the Lord whom you seek will come to his Temple’ (Malachi 3:1). (BNC)

次の (11) では、本や新聞、雑誌などが現れている。この場合も、(11d-f) のように、本や新聞、雑誌の具体名やその一部である場合もある。

- (11) a. It means’ he ground himself into me’, as it says in the book I bought at the airport. (BNC)
- b. I think they’re sort of purple, like it says in the book. (BNC)
- c. It says in the paper they haven’t identified her yet. (BNC)
- d. It says in the Daily Mirror that she fancies me,’ he boasts lightheartedly. (BNC)
- e. In the item on Axl Rose’s childhood abuse (FACE 47), it says ‘a history of childhood abuse is both hip and horrible’. (BNC)
- f. The venerable employee of the Lambert Pharmacal Co., makers of Listerine, opened his book of news clippings and said: “It says in the British Lancet that in cases of halitosis ...”
 “What’s halitosis?” interrupted Gerard Lambert, the company’s general manager. “ (TMC)

しかし、聖書や新聞などの他にも、場所句に現れる名詞句は多岐に渡る。例として、次の (12) を見てみよう。

- (12) a. Trust me. Like it says on the money. (TMC)
- b. Roylance Maclean. I know it is because that’s what it says on my Amex card. (BNC)
- c. The cloth drops open. There’s a moment’s silence. Then everyone cheers and whoops and claps. I have to half hang off the branch to see

why. It's amazing! It's a protest banner. At the top, in big black letters, it says: SAVE BLUEBELL WOOD

(M. Gibson, *Seriously Sassy*)

- d. He hands me a slick bookmark, with a side view of some black hands, palms together in classic prayer, the tips of the index fingers touching startlingly red lips, and words beneath the image, printed in a fancy font: "There is gold, and a multitude of rubies: but the lips of knowledge are precious jewel. Proverbs 20:15." On the back it says, "Mount Carmel Baptist Church—Atlanta, Georgia."

(J. L. Cannon, *Scarlett Says*)

- e. She's wearing her favourite apron, dusted in white. On the front, it says: "Women are like wine, they improve with age."

(M. Farrer, *A Flash of Blue*)

- f. In the instruction manual for the BOSS ME-5 it says to take it to a recognised dealer to get the back-up memory battery replaced. I've written to the makers for info, but with no reply. (BNC)

(12a) はアメリカドルの紙幣や硬貨に書かれている "IN GOD WE TRUST" という文言のことを述べていると思われる。(12b) では話し手が所持しているクレジットカードが場所句に現れている。(12c) では、前の文脈に布 (the cloth) が現れ、それが抗議の旗 (a protest banner) であることが明らかとなり、そして場所句にはその旗の上部 (at the top) が現れている。(12d) では、場所句は本のしおりの裏面である。(12e) では、女性が着ているエプロンの前面が場所句に現れている。(12f) の BOSS ME-5 は音楽機器の名称であり、場所句にはその取扱説明書が現れている。

また、中右 (2015) は次の (13) の例を挙げている。

- (13) a. 'Highly inflammable,' it says on the spare canister.
b. It says in the job description that we're only supposed to work 35 hours a week.
c. It says in the rules that every child has to wear school uniform.
d. It clearly says on it that it will self-destruct sometime after you unseal the package. (中右 2015: 13)

(12) と (13) の場所句に現れている名詞句の中には、「どの人にも接触可能な情報媒体」と呼べるかどうか疑わしいものもある。(10)-(13) を合わせて考える

と、この構文の場所句に現れる名詞句にとって重要なのは、「誰にでも接触可能な情報媒体」であることよりも、「書き手が誰であるかが問題とならない」ことであると言えるだろう。続く 8.3 節では、このことを示すために、場所句に **letter** が現れている例を検討する。

8.3 It says LOC 構文と letter

8.1 節で紹介したように、Bolinger (1977) は、次の (14a) のような文を耳にすることはないと述べている。また、これも既に 8.2 節で紹介したことだが、中右 (2015) も (14b) に示すように、**her letter** が場所句として不適切であることを示す例を挙げている。

- (14) a. *In John's letter it says that ... (Bolinger 1977: 265)
b. It says in {the paper/*her letter} that they're getting divorced.
(中右 2015: 12)

しかし、次の (15) に示すように、場所句に **letter** が生起している例が、聖書や新聞などの例と比べれば稀ではあるが見られる。したがって、Bolinger (1977) が上記 (4) のように述べているのに基づいて、「**letter** は特定のすぎるので位置表現に生起しない」と説明したのでは不十分であるといえる。(15) を見てみよう。

- (15) In the letter to parents it said: 'The school is proud of it's [sic] record of excellence'.¹
(Oxford Advanced Learners's Dictionary)

(15) における **the letter** は、学校から保護者への手紙であることがわかる。学校から保護者への手紙が、「誰にでも接触可能な情報媒体」であるかどうかは疑問である。それよりも、ここで重要なのは、学校という組織からの手紙であるということである。学校という組織からの手紙は、特定の書き手を明示することが困難な媒体である。もしくは、書き手が誰であるか、すなわち誰が主張しているかは問題ではない。つまり、「その手紙には…と書かれていた」とだけ述べればよい。そのため、書き手の代役として主語に **it** を立てていると考えられる。

ここからさらに、**It says LOC** 構文の場所句に **letter** が生起している例を見て

¹ (15) は、*Oxford Advanced Learners's Dictionary* において、[sic] の使い方を説明するために挙げられている例文である。したがって、(15) は “it's [sic]” という部分も含めて原文のとおりである。

いくが、どの場合においても、主語に書き手ではなく it を置く何らかの理由があることが示される。(15) の類例として、次の (16) を見てみよう。

(16) ‘How would you like to officiate at Darrowby Show, James?’

Siegfried threw the letter he had been reading on to the desk and turned to me.

‘I don’t mind, but I thought you always did it.’

‘I do, but it says in that letter that they’ve changed the date this year and it happens I’m going to be away that weekend.’

(J. Herriot, *James Herriot’s Dog Stories*)

James と Siegfried は獣医である。(16) の the letter / that letter は、Darrowby Show という動物の競技会についての手紙であり、James と Siegfried はその競技会の審判をすることについて話し合っている。手紙は競技会を主催している組織からのものである。したがって、ここでも特定の書き手を明示することは困難である。そして、競技会の日程変更を知らせる手紙であるため、誰が主張しているかは問題ではない。したがって、主語に書き手ではなく it を立てていると考えられる。

さらに、次の (17) を見てみよう。

(17) Consequently, everyone at the meeting decided that it would be good if we sent a message to the Dalai Lama recommending that he and the Chinese Central Government hold discussions. In the letter it said that if Tibet is peacefully liberated, the monks and lay people will not have to experience the suffering of war, and monasteries and villages will not be destroyed, and everyone will not have to become separated and dislocated and will be able to live together.

(M. C. Goldstein, *A History of Modern Tibet Volume 2*)

(17) においても、場所句に the letter が生起している。この例では、ダライ・ラマにメッセージを送ることが会議で決定されたということが前の文脈に書かれている。手紙の書き手は、話し手も含む会議の出席者であるから、上記の (15) や (16) と比較すれば、手紙の書き手は明らかであるかもしれない。それでも、手紙の内容は会議の出席者によって決定されたものであり、書き手が誰であることを明示することは困難である。そのため、it を主語に立てていると考えられる。上記 (15)-(17) のように、手紙がなんらかの組織によるものであり、書き

手を明示することが困難であったり不要であったりする場合には、letter が場所句 LOC に生起し、主語に it が置かれる。

次の (18) は、It says LOC 構文が効果的に用いられている例である。

(18) ‘But you do not hate me?’

‘No.’ she shrugged. ‘In the letter it says I hate you so if you read that, I changed my mind in the carriage ride. It is a long journey. I had time to think.’
(L. Tyner, *A Captain and a Rogue*)

(18) では、女性は手紙の中で、男性のことを嫌っていると書いたが、時間を経て心変わりしたことが述べられている。上記 (15)-(17) とは異なり、手紙の書き手は何らかの組織ではなく、明らかにその女性であることが判明している。しかし、女性はあえて it を主語に立てることで、自身が手紙の書き手であることをぼかしていると考えられる。「あなたのことが嫌いだと私がその手紙に書いた」と述べるのではなく、まるでその手紙が自分に無関係であるように「その手紙にはあなたのことが嫌いだと書いてあるけれど、今は心変わりした」と述べることで、女性の今の心境と、その手紙に書かれていることに相違があることを効果的に表現しているといえる。

最後に、letter と同程度に「特定の」であると思われる invitation が場所句 LOC に生起している (19) を見てみよう。

(19) A little boy had been sent off to a birthday party all dressed up in his best clothes and clutching a present for his school friend. His mother was a little surprised to see him coming up the garden path crying his eyes out just half an hour later.

‘Er...how was the party?’ his mother asked.

‘I couldn’t go,’ sniffed the youngster.

‘Why not?’ asked his mum.

‘It says on the invitation ‘From 3 till 6’ and I’m 7!’ (BNC)

invitation のほうが letter よりも一般的であるとする理由はないはずだが、(19) では場所句に invitation が生起している。この招待状は、男の子の友人の誕生日会についての招待状なので、書き手はその友人本人か、もしくはその友人の親であるかもしれない。なんらかの組織からの手紙よりは、書き手が明らかであるが、やはりここでも誰が主張しているかは問題ではなく、「招待状に…と書かれている」と述べればよいと、主語に it を置いていると考えられる。

これまでの観察に基づき、8.1 節で紹介した Bolinger (1977) が述べている次の (20) について考えてみよう。

- (20) There is no syntactic reason for this but there is a semantic one: *it* is too general, *letter* is too specific. (Bolinger 1977: 81)

聖書や新聞、本などの媒体に比べれば、手紙は特定の書き手を明示しやすい。このことを指して、Bolinger (1977) は “*letter* is too specific” と述べているのだと思われる。たしかに、手紙は「特定の」な媒体であるかもしれないが、だからといって It says LOC 構文の場所句に *letter* が生起できないということはない。本節では、*letter* が生起している場合には、特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといったように、主語に *it* を置く理由があることを示した。したがって、特定の書き手を明示することが可能な場合や、明示しても差し支えがないような場合には、*it* はそぐわないということである。このことを指して、Bolinger (1977) は “*it* is too general” と述べていると考えられる。

8.4 *it* と場所句の語順

8.1.節で紹介したように、Bolinger (1977) によれば、場所句が *it* に先行している次の (21a) よりも、*it* が場所句に先行している (21b) のほうがやや普通の語順であるという。

- (21) a. In the Bible it says that ...
b. It says in the Bible that ... (Bolinger 1977: 81)

筆者のインフォーマントも同様に、(21b) の語順のほうが (21a) よりも自然であると判断している。これはなぜだろうか。

8.3 節にて、*letter* が場所句に生起している例を観察することで、It says LOC 構文の *it* は場所句に含まれる名詞句を指示しているのではなく、書き手を明示することが困難であったり不要であったりする場合に、書き手の代役として機能していることを示した。また、次の (22) に示すように、It says LOC 構文の場所句には、複数形の名詞句が生起することがある。

- (22) a. It says in the papers he expects to win the election.
(ランダムハウス英和辞典)
b. According to what it says in books, you have to tread carefully right out on the edges of each step, where they are fixed against the wall.

- (BNC)
- c. ‘Well, as it says in the books, it could augur good.’ (BNC)
- d. A man with a little tin cart was keeping our beautiful city clean, like it says on the posters, watched by the usual couple of loafers, one of them sitting on a fire hydrant. (BNC)
- e. There are people, of course, who believe that the author was God, who (as it says in the stories) had made the people. (COCA)
- f. “It says in the ancient books that that’s possible. (COCA)
- g. It said in the papers that you wanted a girl of 14 to play Juliet. (TMC)

(22) から明らかなように、場所句に複数形の名詞句が現れている場合であっても、主語が *they* になるということではなく、*it* のままである。このことも、*it* が単に場所句に含まれる名詞句を指示しているわけではないことを示しているといえる。

Bolinger (1977) は、*It says* LOC 構文において、*it* が場所句に先行する語順のほうが好まれることについて、次の (23) のように述べている。

- (23) [T]here is no confinement of *it* by a prior context, and ambience has more play: *It says in today’s paper that ...*, less likely ?*In today’s paper it says that ...* (Bolinger 1977: 81)

Bolinger (1977) は “confinement” という言葉を用いているが、おそらくこれは統語論でいうところの束縛 (*binding*) に近い意味で用いられているのではないだろうか。すなわち、場所句が *it* に先行する語順では、*it* が場所句内の名詞句に束縛されているように感じられるため、不自然さを感じさせるという可能性がある。*It says* LOC 構文における *it* は、場所句が先行している場合であっても、その場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではない。それにもかかわらず、場所句を先行させると、*it* がその場所句に含まれる名詞句に対して前方照的であるように感じられ、その結果、不自然さを感じさせると考えられる。

8.5 おわりに

本章では、*It says* LOC 構文を取り扱った。Bolinger (1977) の主張に反して *It says* LOC 構文の場所句に *letter* が生起している例を観察することで、この構文が特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといった場合に用いられることを示した。特定の書き手を明示することが可能である場合や、明示しても差し支えないような場合には *it* はそぐわないため、その意味

で **it** は「一般的」であり、一方、**letter** は特定の書き手を明示しやすいため、その意味で「特定の」とであると主張した。また、**It says LOC** 構文における **it** は、場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではないので、場所句を先行させると、**it** がその場所句に含まれる名詞句に対して前方照応的であるように感じられ、不自然さを感じさせると主張した。

第9章 結論

本研究は、「虚辞」の *it* を前方照応の代名詞の一員であるとする Bolinger (1977) の考え方を踏襲し、「虚辞」の *it* を含む構文を意味論的・語用論的に分析した。本章では結論として、各章のまとめを述べる。添付資料の「本研究で取り扱っている構文とその分類」もあわせて参照されたい。

第1章では、本研究の趣旨と構成を説明した。

第2章では、*it* 分裂文が持つ特性として、主に Prince (1978) と Declerck (1988) に基づき、次の (1) に示すことを概観した。

- (1) a. *it* 分裂文は、前提要素の存在を必要とする。ただし、その前提要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はない。 (Prince (1978) 参照)
- b. *it* 分裂文は総記的含意を持つ。ただし、その総記的含意は論理的含意ではないが、会話の含意と言語規約的含意の両方の性質を持っている。 (Declerck (1988) 参照)

第3章では、Bolinger (1977) による *it* 分裂文の分析に基づき、*it is that* 節構文を *it* 分裂文の変種と見なして分析した。具体的には、主に次の (2) のことを示した。

- (2) a. *it* 分裂文と同様に、*it is that* 節構文は前提として開放命題を必要とする。主語 *it* はその前提を指示し、その前提の変項を指定する値を焦点要素として取り立てることで、理由を提示する。
- b. *it* 分裂文とは異なり、*it is that* 節構文の *it* が指示する前提は、聞き手の意識にのぼっていると話し手が判断している事柄、すなわち *given information* (Prince 1978) に相当する。

第4章では、*It is not that ...* を「…のではない」によって解釈することが困難な例を示し、「*it is that* 節構文は分裂文の変種である」という、本研究第3章の主張を支持した。具体的には、次の (3) のことを主張した。

- (3) *It is not that ...* を「…のではない」によって解釈することが困難な例が存在する。その理由は、*It is not that ...* が命題の真実性を否定しないのに対し、「…のではない」は命題の真実性を否定するからである。

さらに、(3) を踏まえたうえで、it is that 節構文はモダリティであると主張している八木 (2019) を批判的に検討した。

第 5 章では、中右 (1983) による既定性の概念に基づいて文主語構文と主語位置からの it 外置を比較し、文主語構文の機能を次の (4) のように説明した。

- (4) 文主語構文は、「確定した話題」を叙述することで、前の文脈との結束力を生み出す有標の構文である。したがって、談話冒頭では不適切である。

また、主語位置からの it 外置における it は、指示性が希薄化していることを示した。さらに、It AUX be that ... と it is that 節構文の相違点ならびに It AUX be that ... と主語位置からの it 外置の類似点を示し、It AUX be that ... が主語位置からの it 外置の例であることを示した。

第 6 章では、目的語位置からの it 外置の中でも、it が随意的な事例を取り扱った。目的語位置からの it 外置における it は既定的 it であるという中右 (1983) の主張に加えて、Cattell (1978) および Hegarty (1992) による動詞の 3 分類に基づき、分析を試みた。

第 7 章では、目的語位置からの it 外置の中でも、it が義務的な事例を取り扱った。第 6 章で取り扱った it が随意的な事例と同様に、it が義務的な事例においても it は統語的に導入される「虚辞」ではなく、中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示した。

第 8 章では、It says LOC 構文を取り扱った。It says LOC 構文の場所句に letter が生起している例を観察することで、この構文が特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといった場合に用いられることを示した。特定の書き手を明示することが可能である場合や、明示しても差し支えないような場合には it はそぐわないため、その意味で it は「一般的」であり、一方、letter は特定の書き手を明示しやすいため、その意味で「特定の」とであると主張した。また、It says LOC 構文における it は、場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではないので、場所句を先行させると、it がその場所句に含まれる名詞句に対して前方照応的であるように感じられ、不自然さを感じさせると主張した。

添付資料：本研究で取り扱っている構文とその分類

構文	便宜上の呼称	例
it 分裂文		It's the president I'm referring to. (Huddleston and Pullum 2002: 1418)
		It was with considerable misgivings that she accepted the position. (Huddleston and Pullum 2002: 1418)
		It was only gradually that I came to realise how much I was being exploited. (Huddleston and Pullum 2002: 1419)
		It's not lonely he made me feel – it's angry. (Huddleston and Pullum 2002: 1419)
		It's that he's so self-satisfied that I find offputting. (Huddleston and Pullum 2002: 1418)
		It's certainly not to make life easier for us that they are changing the rules. (Huddleston and Pullum 2002: 1418)
	縮約 it 分裂文	A: Who came? B: It was John. (Bolinger 1977: 72)
		If they gave him something, it was a book. (Declerck and Seki 1990: 23)
	it is that 節構文	No, it's not that. It's that I'm not pretty enough. (Declerck 1992: 209 を一部抜粋)
		It isn't that he lied exactly, but he did tend to exaggerate. (<i>Oxford Advanced Learner's Dictionary</i>).
文主語構文		That he hasn't phoned worries me. (Huddleston and Pullum 2002: 1403)
主語位置からの it 外置		It worries me that he hasn't phoned. (Huddleston and Pullum 2002: 1403)
	It AUX be that ...	It may be that Minoan ships were built and repaired here. (<i>Longman Dictionary of Contemporary English</i>)

構文	便宜上の呼称	例
目的語位置 からの it 外置	it が随意的な 事例	Bill resents it that people are always comparing him to Mozart. (Kiparsky and Kiparsky 1970: 165)
		They didn't mind it that a crowd was beginning to gather in the street. (Kiparsky and Kiparsky 1970: 165)
		Not for a moment did I believe it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
		Would you believe it that the election hurt them? (Bolinger 1977: 66)
		I positively do believe it that the election hurt them. (Bolinger 1977: 66)
	it が義務的な 事例	I take it that you are enjoying yourselves. (Quirk et al. 1989: 1184, fn)
		Rumour has it that they're getting divorced. (Huddleston and Pullum 2002: 963)
		I like it that she has good manners. (Rothstein 1995: 514)
		I find it hardly surprising that he tried to retract his statement. (Huddleston and Pullum 2002: 963)
		They regard it as a discourtesy that you didn't notify them earlier. (Huddleston and Pullum 2002: 963)
It says LOC 構文		It says in the Commandments that adultery is wrong. (新編英和活用大辞典)
		It says on the container to take two pills after every meal. (新編英和活用大辞典)
		It says on the label 'Produce of France'. (Oxford Advanced Learner's Dictionary)
		In the letter to parents it said: 'The school is proud of it's [sic] record of excellence'. (Oxford Advanced Learners's Dictionary)

参考文献

- Allan, K. 1986. *Linguistic Meaning Volume 2*. London, New York: Routledge & Kegan Paul.
- Arnold, J. E., T. Wasow, A. Losongco and R. Ginstrom. 2000. "Heaviness vs. Newness: The Effects of Structural Complexity and Discourse Status on Constituent Ordering." *Language* 76(1), 28-55.
- Atlas, J. D. and S. C. Levinson. 1981. "*It*-Clefts, Informativeness, and Logical Form: Radical Pragmatics (Revised Standard Version)." In P. Cole ed., *Radical Pragmatics*, 1-61. New York: Academic Press.
- Bailey, C.-J. N. 1969. "A further example of the manner in which a negative enhances acceptability." *Working Papers in Linguistics* (University of Hawaii) II, 177-178.
- Birner, B.J. 1994. "Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion." *Language* 70(2), 233-259.
- Birner, B. J. and G. Ward. 2006. "Information Structure." In Aarts, B. and A. McMahon eds., *The Handbook of English Linguistics*, 291-317. Massachusetts, Oxford, Victoria: Blackwell Publishing.
- Bolinger, D. 1970. "The Meaning of Do So." *Linguistic Inquiry* 1(1), 140-144.
- Bolinger, D. 1972. *That's That*. The Hague: Mouton.
- Bolinger, D. 1973. "Ambient *it* is meaningful too." *Journal of Linguistics* 9, 261-270.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman. [中右実(訳). 1981. 『意味と形』東京: こびあん書房.]
- Brugman, C. 1988. "The Syntax and Semantics of HAVE and Its Complements." Ph.D. dissertation, University of California.
- Brugman, C. 1996. "Mental Spaces, Constructional Meaning, and Pragmatic Ambiguity." In Fauconnier, G. and E. Sweetser eds., *Spaces, Worlds, and Grammar*, 29-56. Chicago: The University of Chicago Press.
- Cattell, R. 1978. "On the Source of Interrogative Adverbs." *Language* 54(1), 61-77.
- Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the structure of language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Collins, P. 1994. "Extraposition in English." *Functions of Language* 1(1), 7-24.
- Curme, G. O. 1931. *A Grammar of the English Language Vol. III: Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Declerck, R. 1992. "The inferential *it is* that-construction and its congeners." *Lingua*

87, 203-230.

- Declerck, R. and S. Seki. 1990. "Premodified Reduced It-Clefts." *Lingua* 82, 15-51.
- Delahunty, G. P. 1981. *Topics in the Syntax and Semantics of English Cleft Sentences*. Doctoral dissertation, University of California.
- Delahunty, G. P. 1983. "But Sentential Subjects Do Exist." *Linguistic Analysis* 12(4), 379-398.
- Delahunty, G. P. 1990. "Inferentials: The Story of a Forgotten Evidential." *Kansas Working Papers in Linguistics* 15, 1-28.
- Erdmann, P. 1990. *Discourse and Grammar: Focussing and defocussing in English*. Tübingen, Niemeyer.
- Green, G. M. 1980. "Some Wherefores of English Inversions." *Language* 56(3), 582-601.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In Cole, P. and J. Morgan eds., *Syntax and Semantics* 3, 41-58. New York: Academic Press.
- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on transitivity and theme in English." *Journal of Linguistics* 3(2), 177-274.
- Hankamer, J. and I. Sag. 1976. "Deep and Surface Anaphora." *Linguistic Inquiry* 7(3), 391-426.
- Hegarty, M. 1992. "Adjunct Extraction without Traces." *Proceedings of the Tenth West Coast Conference on Formal Linguistics*, 209-222.
- Higgins, F. R. 1973. "On J. Emonds's analysis of extraposition." In Kimball, J. P. ed., *Syntax and Semantics* 2, 149-195. New York: Academic Press.
- Hooper, P.J. 1975. "On Assertive Predicates."
- Hooper, P.J. and S. A. Thompson. 1973. "On the Applicability of Root Transformations." *Linguistic Inquiry* 4(4), 465-497.
- Horn, L. R. 1981. "Exhaustiveness and the Semantics of Clefts." *NELS* 11, 125-42.
- Horn, L. R. 1986. "Presupposition, Theme, and Variations." *Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory, 22nd Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, 168-192.
- Huddleston, R. 1984. *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hurford, J. R. 1973. "Deriving S from S + Is." In Kimball, J. P. ed., *Syntax and Semantics* 2, 247-299. New York: Seminar Press.
- Ikarashi, K. 2014. "The *It Is That*-Construction and Abductive Inference." *English*

Linguistics 31, 161-172.

五十嵐啓太・本多正敏. 2014. 「証拠性を表す have it that 構文」『英語語法文法学会第 22 回大会予稿集』, 42-47.

Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar Part III*. London: Allen & Unwin.

Kaltenböck, G. 2000. "It-extraposition and non-extraposition in English discourse." *Corpus Linguistics and Linguistic Theory: Papers from the Twentieth International Conference on English Language Research on Computerized Corpora*, 157-175.

Kaltenböck, G. 2005. "It-extraposition in English." *International Journal of Corpus Linguistics* 10-2, 119-159.

Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: CSLI Publications.

Kim, J.-B. 2008. "Gramatical Interfaces in English Object Extraposition." *Linguistic Research* 25(3), 117-131.

Kim, J.-B. 2014. "Vacuous It-Extraposition: A Lexicalist, Construction-based Approach." *Language Research* 50(2), 333-356.

Kim, J.-B. and I. A. Sag. 2005. "English Object Extraposition: A Constraint-Based Approach." *Proceedings of the 12th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*, 192-212.

Kim, J.-B. and I. A. Sag. 2008. "Variations in English Object Extraposition." *Proceedings of the 41st Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society* 41, 251-265.

Kiparsky, P. and C. Kiparsky. 1970. "Fact." In Bierwisch, M. and K. E. Heidolph eds., *Progress in Linguistics*, 143-173. The Hague, Paris: Mouton.

河野亘. 2016. 「have it that 構文および have it PP that 構文の認知文法的分析」『日本語用論学会第 19 回大会発表論文集』, 105-112.

Koops, C. 2007. "Constraints on Inferential Constructions." In Günter, R., K. Köpcke, T. Berg and P. Siemund eds., *Aspects of Meaning Construction*, 207-224. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Koster, J. 1978. "Why Subject Sentences Don't Exist." In Keyser, S. J. ed., *Recent Transformational Studies in European Languages*, 53-64. Cambridge, Massachusetts, London: The MIT Press.

Kuno, S. 1987. *Functional Syntax*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lambrecht, K. 2001. "A framework for the analysis of cleft constructions." *Linguistics* 39-3, 463-516.

Lambrecht, K. 2001. "Dislocation." In Haspelmath, M., E. König, W. Oesterreicher and W. Raible eds., *Language Typology and Language Universals Volume 2*,

- 1050-1078. Berlin, New York: Walter de Gruyter.
- Lysvåg, P. 1975. "Verbs of Hedging." In Kimball J. P. ed., *Syntax and Semantics Volume 4*, 125-154.
- McCloskey, J. 1991. "There, It, and Agreement." *Linguistic Inquiry* 4(3), 563-567.
- Meier, G. E. H. 1988. "The it cleft sentence." *Acta Linguistica Hafniensia* 21(1), 51-61.
- 中右実. 1981. 「変形と意味の原理」『英語青年』第127巻第9号, 563-565.
- 中右実. 1983. 「文の構造と機能」安井稔・中右実・中村捷・山梨正明（著）『英語学体系5 意味論』548-626. 東京：大修館書店.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京：大修館書店.
- 中右実. 2013. 「非人称 it 構文 —語法と文法の不可分な全体を構文に見る—」『英語語法文法研究』第20号, 5-34.
- 中右実. 2015. 「非人称 it 主語と特異な構文」深田智・西田光一・田村敏広（編）『言語研究の視座』2-18. 東京：開拓社.
- 野田春海. 1997. 『の（だ）』の機能. 東京：くろしお出版.
- Otake, Y. 2002. "Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction." *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 143-157.
- 大竹芳夫. 2004. 「英語の take it that 節構文の意味と談話機能」信州大学教育学部紀要 108, 69-80.
- 大竹芳夫. 2009. 『「の（だ）」に対応する英語の構文』東京：くろしお出版.
- Prince, E. F. 1978. "A Comparison of Wh-Clefts and It-Clefts in Discourse." *Language* 54-4, 883-906.
- Prince, E. F. 1981. "Toward a Taxonomy of Given-New Information." In P. Cole ed., *Radical Pragmatics*, 223-256. New York: Academic Press.
- Prince, E. F. 1986. "On the Syntactic Marking of Presupposed Open Propositions." *Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory, Chicago Linguistic Society* 22, 208-222.
- Prince, E. F. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information status." In S. Thompson and W. Mann eds., *Discourse Description: Diverse Analyses of a Fund Raising Text*, 295-325. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Prince, E. F. 1997. "On the Functions of Left-Dislocation in English Discourse." In A. Kamio ed., *Directions in Functional Linguistics*, 117-143. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Prince, E. F. 1998. "On the Limits of Syntax, with Reference to Left-Dislocation and Topicalization." In P. W. Culicover and L. McNally eds., *Syntax and Semantics* 29, 281-302. New York: Academic Press.

- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik 1972. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rosenbaum, P. S. 1965. "The Grammar of English Predicate Complement Constructions." Ph.D. dissertation, MIT.
- Ross, J. R. 1967. "Constraints on variables in syntax." Ph.D. dissertation, MIT.
- Rothstein, S. D. 1995. "Pleonastics and the Interpretation of Pronouns." *Linguistic Inquiry* 26(3), 499-529.
- 佐藤翔馬. 2015a. 「2 種類の it is (just) that 節構文」 *JELS* 32, 112-118.
- 佐藤翔馬. 2015b. 「理由を提示する it is that 節構文」『英語語法文法研究』第 22 号, 53-68.
- 佐藤翔馬. 2019. 「文主語構文と it 外置文」『英語語法文法研究』第 26 号, 125-140
- Stowell, T. A. 1981. "Origins of phrase structure." Ph.D. dissertation, MIT.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage (Third Edition)*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- 田野村忠温. 2002. 『現代日本語の文法 I — 「のだ」の意味と用法—』大阪：和泉書店.
- Ureña Gómez-Moreno, P. 2014. "The *have-it-that* construction: A corpus-based analysis." *International Journal of Corpus Linguistics* 19(4), 505-529.
- Ward, G. and B. J. Birner. 1994. "A Unified Account of English Fronting Constructions." *Penn Working Papers in Linguistics* 1, 159-165.
- Williams, E. 1980. "Predication." *Linguistic Inquiry* 11(1), 203-238.
- 八木克正. 2019. 「断定のモダリティ表現 "it is that" の特性」住吉誠・鈴木亨・西村義樹（編）『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』146-161. 東京：開拓社.

コーパス

- BNC: British National Corpus XML Edition.*
- COCA: Corpus of Contemporary American English.*
- TMC: TIME Magazine Corpus.*

謝辞

本研究を遂行するにあたり、名古屋大学大学院人文学研究科人文学専攻教授の大名力先生には、主指導教員として終始懇切なご指導をいただきました。心より御礼申し上げます。同専攻教授の大室剛志先生、ならびに同専攻准教授の大島義和先生には、副指導教員としてきめ細やかなご指導をいただきました。厚く御礼申し上げます。同専攻教授の木下徹先生は、突然のお願いにも関わらず快く審査委員をお引き受けくださり、熱心に審査をしてくださいました。深く御礼申し上げます。

立命館大学大学院言語教育情報研究科教授の滝沢直宏先生は、名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻教授であられたときに、実例を観察することの楽しさや大切さを教えてくださいました。厚く御礼申し上げます。

筆者が麗澤大学外国語学部英語学科、ならびに同大学大学院言語教育研究科英語教育専攻修士課程に在籍していた際にご指導いただきました、筑波大学名誉教授の中右実先生には、名古屋大学大学院に入学してから大変貴重なご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。同じく、筆者が麗澤大学ならびに同大学大学院に在籍していた際にご指導いただきました、麗澤大学外国語学部外国語学科教授の渡邊信先生は、言語研究の楽しさを教えてくださり、名古屋大学大学院への入学を決心した際には、快く推薦状を書いてくださいました。深く御礼申し上げます。

筆者の友人であり、大同大学教養部外国語教室講師である山内昇氏には、様々なご助言や有益な資料をいただきました。深く感謝いたします。

最後に、筆者を長きにわたって応援してくれた家族に、心から感謝します。